

回 想 錄

私の文學部在職當時の思出の二、三

矢 野 仁 一

私が桑原（騰藏）先生の推薦で文學部に奉職したのは大正初年で創立後六年、すでに規模も定まり内容も整い、各學科共卒業生も出始めた時で、私はただ成を受けて員に備わるのみであつたが、それでよかつたような時であつた。京大の特色は東洋に重きを置き、それで東洋史は三講座になつておるといふことだつた。東洋といつても中國のことで、考えてみればおかしな話だが、それに重きを置くといふことは、當時の時勢の反映と考えると面白い。私はそれまで七年半清末の立憲準備から、辛亥革命後の民國成立まで、中國の大變革期を北京で過し、今から考えると、まことに餘計なことに骨折つたものだが、その時は大真面目になにせよ東大文科大學助教の資格のまま中國の應聘教官となつていたので、日中親善は使命であるように考え、服部、巖谷兩博士らと協力し、清朝の學制について學部大臣に建議するとか、中國の革命に對する日本の態度について外務大臣に獻策するとか、どれもこれも何にもならずじまいであつたが、そんなことで忙がしく暮したので、ただ専門の學問に専心すればよい文學部に奉職したことは、少しさびしい氣もしなくはなかつたが、それでこそほんとうの研究はでき有難いわけであつた。當時法學部には學閥争いのようなものがあつたといふことは、眞偽はわからないが、創立時の木下總長の相談相手であつたといふ巖谷博士から始終聞かされていたので、文學部の平和の雰圍氣は實にうれしかつた。當時北京始め中

國各省に招聘されていた日本人教官は非常に多かつたが、到る處勢力争いで紛擾を起し、中國人にも眉を顰めしめたほどであつたが、ひとり北京にはそれがなかつた。日中親善という共通の使命を感じていたからだろう。文學部の當時の諸教授は博學の人多く、接すれば接するほど啓發の益を受け、敲けば敲くほど鏗鏘の響きがあつたような感があつたが、それぞれその専門においては蔚として一家をなし、眼一世を曠しうするような概があり、自然傲岸相下らざる孤高の風は感ぜられなくもなかつたが、舊き傳統をもつ最高學府の東大に拮抗して、新旗幟を樹立し重きを競わんことを期せる共通の意識が期せずして諸教授の和衷協同の精神となつたのではないか。つぎに私の親炙する機會の多かつた諸先生の思い出について、紙面の許すかぎり述べてみたい。私が始めて内藤先生のことを知つたのは、私の大學院學生當時、那珂通世先生から元祀史の蒙言漢字傍註本を譯してみるようにいわれ、先生の小石川の第に出入していた當時、關西に内藤虎次郎という學者がある。關西文運史論という著書は立派なものだと感心して話された時である。私は坪井九馬三先生の推薦で北京の進士館教習として赴任した時、一度劈柴胡同の寓居に先生の御來訪を蒙つたことがある。先生は私が早大講師時代の未熟な清朝史の講義を御覽になつていて、これならばと、桑原先生の推薦をバックされたという事は、當時桑原先生から承つた。狩野先生とは、二本松から田中に移住され、私も御近所に住むことになつてから家族的に御交際することになつた。禮易のこと、詩文のこと、さては拳匪亂當時のこと、西南戰爭當時のこと、話題は千緒萬端であつたが、御前講義に當り帝王の師たるに愧じざる心構えて精魂を傾けられたる時の御苦心談は、人をして襟を正さしむるものあり、今も耳底に残つてゐる。この時の先生の手藁本は長い間私の手許に拜借していた。原（勝郎）先生は、先生の一高教授時代からの舊知で、先生が陸軍中尉として滿洲に出征されし時深夜中野驛に御見送りのことを覚えてゐる。早く奥様を亡くされ、郷里より呼寄せられた忠實な女中相手にさびしく暮されていたので、夕食後などによく來訪された。佐藤丑次郎博士が東北大法文學部創立に當り、私の協力を強く要望され、私も郷里に近いので意稍々動きし時、先生は猛烈に反對されお

じやんになったようなこともある。私は中國の視察旅行を命ぜられし時、先生は病を押しして私のために京都ホテルで祝道の宴を催され、腹痛のため自分では何も召上らずに、陪賓として招待された西洋史關係の御弟子たちと共に私のために盃をあげられし時の先生の御容貌は、今も忘るることはできない。それが悲しい今生の永訣となり、私が旅行を終つて歸國した時は、先生はすでに亡くなられていた。先生が晩年世界大戦史の講義案の作成に着手されし時、歐文の根本史料を蒐集し、涉獵し、驅使し、不朽の業をなさんとして眼中東西の學者なき意氣込で當られていたことを承知している私として、果すに及ばずして中道でたおれられしことは残念でたまらない。桑原先生には公私共に非常に御世話になり、思い出はつきない。先生とは先生の高師教授時代からの舊知であるが、爾汝の交ともいへべき親交を重ね、一家の私事までも御相談し合うようになったのは、先生の二年間の北京留學の時からで、その間四十五日の蒙古旅行、起居寢食を共にし、苦樂を共にした。私はいつとも先生の講演や論文の聞き役で、先生は先ず私を説得せんと務められたが、私はいつとも精緻を極め周到を極むる論旨に敬服し、またその熱情に近い自信に満ちた態度に打たれたが、先生のこの自信は、データでも史料でも方法でも、およそ考へ得べき限りを盡し、利用し得べき限りを盡したという安心感から來たものと思う。然し孝道論でも明らかなように、世道人心ということはいつとも先生の念願を離れなかつた。

五十年前の回想

新 村 出

徒らに生きながらえて、有爲なりし創立初期の先輩先進の僚友を見おくり、又後進また益々多望なりし學友にも

先だたれ、殆どひとり取りのこされた恨みをいなく自分としては、感慨無量の情に満ち、いのち永ければ肝多しとの古語がしみじみ身にあたる心地もして、筆がいよいよ執りにくくなるばかりである。

その上、われらの文學部、前稱たる京大文科大學の創立については、その成立前史とも云つてよい時代を、斷片的ながら、ぼんやり聞知していた地位に在り、又偶然その機會にも遇つたものだから、その先史時代の混沌期を、蔭ながら、特に人物の登用に關する經過の荒筋だけを、ほほ——むろん多少の誤聞誤解も交ざるが多少一方的な、然しまんざら風聞でもなく、幾らか根源地にも近いあたりから——仄聞する位置に在職した縁故があつたものだから、祕史とも申すべき部分に屬する事がらを、自分のおぼつかなき老年の記憶をたどつて、今更人も無げに、公表するのは、情に於ても義に於ても、忍びがたい氣もするので、折々親しき人々にこそ私語したこともないではなかつたが、いざと更まると、書けるものではないのである。沈黙の金言を守るのほかあるまいと執筆を躊躇する氣味にもなつた。

私は明治の三十五年（一九〇二）四月から、文部省内に新設された所の臨時國語調査委員會なるものの補助委員の一人として、高師教授と東大文科の講師（三十七年から兼任助教）との職務の傍ら、一週三度かしか月水金の三日間、同僚の亡友保科孝一君たち數名と共に、文部省の一室に通勤して居つた。會長は加藤弘之博士、主事と主査委員を兼ねて、經理と調査との兩面を指導したのが、第一に私の専門學の恩師教授にして、且つ前専門學務局長たる故人上田萬年先生（昭和十二年一九三七年逝）、次には、同じく東大國語學の芳賀矢一教授、それに第三に言海の老學究大槻文彦博士、但し、この老先輩は一週毎日出勤で、口語法制定の主任として終始斯業に盡瘁したが、他の主査上田、芳賀の兩博士は、われら補助委員（保科、岡田正美と予の三人）と同様の日に出勤の具合であつた。毎週一回を原則とした本會議は、普通學務局長の故澤柳政太郎博士、後に京大總長になつて、文科の谷本富教授を諭旨罷免したりして所謂七博士事件を起した發當人たりし其の人も委員の一人であつた。次には國語の委員ではな

かつたが、後に京大總長に來任した岡田良平氏、東大文の哲學（倫理學）出身者だが、當時は文部次官であつた。折々は委員會の經理の方面へ容喙しないでもなかつた。その他の本委員については、必要がないから略しておく。

さて京大文科の豫算が議會を通過したので、明治三十九年の四五月ころか、設立委員數名が囑託されたが、かねて風聞され、下馬評され、且つ自任しても居たと稱せられた谷本氏も、京大文科大學長の候補者には、文部省では眼をそらした。そして沈毅なる一高校長としても令名ありし狩野亨吉氏を新文科大學長に擧用することになつた經過は、偶然お膝下に在勤して居た私たちの耳には割合に早く入つた。谷本氏も、狩野氏も、省内の岡田次官をはじめ、澤柳普通局長と嘗ては相並んで専門局長たりし上田氏、また濶達な開放的な芳賀氏などの往來や應對、別室またわれらの調査室で、私語密談の機會が、前後しばしばあつたのが目撃された。むろん私たちは、それら上司ないし先輩からは何ら全豹を洩らされたことはなくして、自然にただ機微を察したにすぎなかつた。創立委員として誰々が選ばれたのかも、私たちにはわかる由もなかつた。新聞記者の探索も、明治三十七八年、それも日露戰役の翌年のことでもあり、鋭敏さは、今日には比べものにはならず、極めて悠長であつた。誰々が内定したかも、ただおぼろげに私たちの耳にきこえたか、感づいたか、憶えないけれども、とにかく明治三十九年（一九〇六）の九月から開かれる豫定の教授としては、狩野亨吉、同直喜、谷本富、松本文三郎、同亦太郎、桑木嚴翼、即ち倫理、支那哲學、教育學、印度哲學、心理學、西洋哲學などで、その後何名かの、それぞれの助教や講師が任命囑託された次第であつたが、それらはここに一々順序だてたり、形式づけたりして記載するには及ぶまい。

要するに、文科大學の創設の際には、谷本、狩野（直）の兩京大講師（法）、ややおくれての坂口（史）、榊（文）の兩助教、史學科の内藤湖南講師などは、三高教授兩名と在野（大朝）の一遺賢の登用、申さば京阪學界よりの拔擢。つぎに東京からは、高師からの前記松本（東大講）、桑原（史）、上田（文）、および新村、一高からの松本文（印哲）、桑木、原（史）その他、在野からの幸田露伴（國文）、廣島高師からの内田（國史）教授と、吉澤（國語）

助教。一は史學教官の先進スタッフ、否むしる中心人物たり、他は國語の助教として、後れて名古屋の八高から來聘された藤井紫影講師（後の教授）など、多少の遲速の差を以て、任命または囑託された。申すまでもなく、創立第一學年（三十九年至四〇年、一九〇六至〇七）に、先以て哲學科、次學年度に史學科、第三年目に文學科、この順序に開設された。史學科には内田、つづいては三浦、文學科には藤代、それぞれ先輩として任命されて一通り出揃つたわけ。留學生としては文學科の榊、新村の二名が、四十年三四月の交に相前後して先驅出發した。次には哲の桑木、史の原と桑原の二人。桑原は健康上の顧慮から北京だけに留學。文學科の上田は、將來は英文の教授たる約定で私費留學の途に上り、離合集散は免れなかつたが、英獨佛の三京のあちこちにおいて、桑木（教授として）原、榊、上田、新村の五名が、將來の京大文科の理想を論じ合つたこと、殊に伯林の僑居において、桑、原、上、新の四留學生が落合つたとき、みな三十歳を三年ないし四、五年越えたばかりの壯年期の元氣はつらつ年代であつたから、東大の一友僚助教に向つて、柳村を京大に取り得た感喜のあまり、空覺が、東京大學さまを見ろ、とビイル氣嫌で繪葉書をかいた青年の客氣も、はや半世紀の昔になつたかと回顧すると、哀傷と寂寥の感に打たれるばかりだ。

かくてその桑木はケイベル先生の後任として靜穩に東大に去り、それより少し以前には、松本（小）は、元良教授の後繼として、兼任の京都繪專校の校長の位置をも併せて、へいりの如くに棄て去り、波瀾を起した。それらの事件に先立つ露伴翁の東歸、西田寸心君の登用、米田社會學および喜田國史學の起用の経緯、梨庵翁の退任、さては、東西兩大の文科系の人々の文學博士會における遭遇戰の華々しさ。みなこれ京都文科創立初期の十年間の青春期の元氣さの象徴だ。今は五十年は夢の跡の夏草ばかりか。京都文學會の綜藝種智機關誌たりし藝文の興廢、逐一敍し去らんと欲するも、紙面を越ゆることすでに何枚、老いのくりごと、ゆるさしめ、ゆるさしめ。

在職當時の追想

鈴 木 虎 雄

三十年が過ぎたかと思うと忽ち又五十年になつたという。日月の速いには驚かされる。しかし人の一生とはちがひ、學校は年年進歩しつゝ更に百年二百年と永遠に存続するものであることを考えると、歳月を果ねることは喜ばしいことである。

京都の文科大學は明治三十九年に創設された。私は東京の高等師範の教授に在任中、創設委員の一人であつた狩野直喜教授から、「京都へ來ぬか」といわれ、四十二年の正月に助教として京都へやつて來た。但し當時の京都文科では、支那哲學・文學の講座はまだ各々一個であり、狩野教授はそれを兼擔せられ、哲學の方は高瀬武次郎博士が助教として私より先きに赴任されていた。狩野教授の話に、「文學講座一個であるから、將來増設に盡力けするがその時期はわからぬ、マア萬年助教のつもりで來てくれぬか」とのことであつた。而して私は書物が讀めるなら萬年助教でもかまわぬというつもりで赴任したのである。かくて大正六年支那に留學を命ぜられ、八年春歸朝、秋、講座の増設と共に教授に任ぜられた。これで我が京都大學は東京帝大に先つて支那文學二講座を有することができた。

留學中に英文の上田敏教授の計に接したことは遺憾の至りであつたが、歸朝當時の文學部は新進氣鋭の英才教授ぞろいで、海外への往來も頻繁であつた。先づ、明治四十三年の夏に、内藤・狩野・小川の三教授と富岡謙藏講師とが燉煌發掘物を觀るため北京へ赴かれた。其後西本願寺にも光瑞師の蒐集された發掘物が到着し、又師の門下

の橘瑞超氏の發掘に關する講演が大學の講堂で行われ、燉煌熱が高まり、一時此等の古文獻に興味をもち之に熱中している人人を燉煌派などと冷評したものがあつた。大正八年五月に、松本女三郎、小川琢治、原勝郎の三教授はそれぞれ歐洲へ赴かるることになり、松本教授は更に南洋及び印度を、小川教授は「ロシア」の南部を旅行せらるる筈であつた。其頃内田銀藏教授は歐米から歸朝された。そこで僚友の催に由り、東山の左阿彌樓で四教授の送迎會が開かれた。私は「宴別歌」を作り、四教授の學識についてのべたことがある。四教授に限らず、當時の諸教授皆錚錚たる學者であつた。

初期文學關係の諸教授中、内藤湖南博士は別として、狩野、桑原、高瀬等の先輩及び私は皆東京帝大漢學科の出身である。漢學科というのは經・史・文兼修であつた。狩野教授は創設當時、漢學科というか、支那學科というか、經史文を分たず一本として置きたい意見であつたが、終に哲・史・文に分たれたのだとのことである。制度上學科は分れたが、「支那學會」という學會があり、「藝文」という雜誌が起り、言説と文章とに由つて、お互に智識を交換することを得て、随分たためになつたとおもわれる。當時の學部の建物は木造で、教室は法學部と共用であつた。夜の通路には電燈は甚だ稀で、私は屢々提灯をぶらさげて往來し、時として溝の中へ落ち込んだこともある。

私は淺學短才の身を以て助教授三年、教授二十五年を文學部に奉職した。此の間、普通講義は教授の擔任たるに拘らず、助教授時代より留學期を除いて前後を貫き、特殊講義、演習、講讀、作詩文、微力ながら能う限りの精力を傾けた。譬えば劍道師範が竹刀を執つて立つが如く、氣構えは眞剣白刃の勝負に劣らず、討つかつたれるかの境地を踏んだ。傍評或は嚴酷に失するとも言われたというが、私としては當時を顧みて之に満足しておる。私は明治の碩儒中村正直敬宇先生の言われたことを思う。「大學は教授を本體とする如く見えるが、教授は手段であつて、國としては優秀なる學生を養成することが主であるから、實は學生が本體で、教授は之を養成する手段に過ぎぬ」と。先生は此様な意味のことをのべておられる。私は之を佩服するものである。學問の研究は益々進んで、今は私

などの粗末な時期とは大に異なるものがあると察せられるが、當時混沌たりし斯界に荊棘を開きつつ進んだ私としては私なりにそれが總てであつたのである。

終りに、狩野教授の退職、近く、同教授の盡力により、東方文化研究所（今の人文科學研究所）が、他の諸教授と共に傍系として設立され、京都に於ける文那學の發達に偉大な功績をのこしたことも、私の忘れ得ぬ事實である。

（昭和三十一年六月十二日稿）

半世紀の回顧

野 上 俊 夫

明治三十九年七月東京帝國大學文科大學の哲學科を卒業した私は、大學在學の三年間心理學を教えていたといふ松本亦太郎先生が其の九月に創設された京都帝國大學文科大學の心理學擔任の教授として赴任せられるに際し、その助手に採用されることになり、同月末に京都に来て「文科大學雇を命ず、月給三十圓」（助手の定員が無かつたため）という辭令を頂戴した。三十九年には文科大學の中でたゞ哲學科だけが置かれ、教授の數も六人に過ぎなかつたが、四十年には史學科、四十一年には文學科が置かれ、教授の數も學生の數も次第に増加した。昭和十年秋文學部創立三十周年の祝典を舉げた時は偶然私が學部長であつたが、其の時は創設當時の六教授は皆健在であつた。即ち狩野亨吉（倫理學）、谷本富（教育學教授法）、松本文三郎（印度哲學）、松本亦太郎（心理學）、狩野直喜（支那哲學）、桑木巖翼（哲學）の諸先生であるが、五十周年の今日は皆故人となられたのは甚菲もない。創立當時から職員であつた人は今は私たゞ一人となつてしまつた。

東京大學では心理學の教授は元良勇次郎先生であつたが、獨立した心理學の講座は無く、論理、心理、倫理で二講座となつて居たが、京都では日本で最初の心理學の講座が出来たのである。又心理學教室も東京のは醫科大學の何かの教室であつた古い建物を貰つたのであつたが、京都では新しい建物を松本先生の設計で作つたのであつた。尤も最初の一二年間は正門の正面の今の本部の木館の所にあつた煉瓦二階建の理工科の建物の二階の三室を文科大學が借用し、中央の一番大きい室を心理學實驗室として居たが、後に法科の教室があつた木造の稍大きな室に移り、その中に百七坪の新築教室が落成したので四十一年六月にこゝに移轉した。松本先生は京都赴任以前は東京高等師範の教授で（東京大學は講師）あつたので、先生が東京高等師範で集められた實驗裝置全部を京都大學に保管轉換され、又アメリカ心理學などの學術雜誌をも數年間高等師範から借用して居つた。

東京大學の心理學主任教授元良先生はアメリカでスタンレー・ホール先生の所で勉強された人であり、私どもの先輩の心理學者は主に英米の心理學者たとえば米國のジェイムス、ホール、ティッチナー、英國のスペンリア、サレーなどの系統を引くものが多かつたが、松本先生は米國のイェール大學に長く居られてラッドやスクリプチュアなどの學者について學び、イェール大學心理學教室紀要の中に有名な「聽空間の研究」を發表して居られるに係らず、私どもの東京大學で先生から三年間受けた講義はドイツのウィルヘルム、ヴント流のもので、大體ヴントの「生理的心理學原理」により、演習にはやはりヴントの「心理學概論」第四版を使用された。又東京大學で或る年何かの都合で松本先生が専門外の哲學概論を受け持たれた時、先生はヴントの「哲學入門」によつて講義された。京都でも先生の講義や演習は初めはヴント流のものであり、先生が設計された心理學實驗室の間取りなどもライプチヒ大學のヴントの實驗室によく似たものである。明治から大正にかけて日本の心理學がヴントを中心としたドイツの心理學の影響を受けることが大きかつたのは先生の力によることが最も多い。

京都の心理教室の實驗裝置も最初に買い入れたものの大部分はドイツのチンメルマン會社からのもので松本先生

はこれ等の機械や装置を用いて研究と學生の指導とに當られ、精神動作學 (Psychocinematics) という研究の一分野を開くべきことを唱導されたが、先生はまた東西兩洋の美術に精通せられ、當時京都市が創設した繪畫専門學校の校長を兼務し、又當時文部省が始めた美術展覽會の審査員として、京都畫壇の老大家と共に京都の美術界を指導激勵し、東京の美術界と對抗せる西の一勢力たらしめた先生の功績は極めて大きい。かくの如く先生が一方に於いて實驗的及び統計的な精密な心理研究に従事しつつ、他方に於いて藝術的乃至歴史的の研究と玩賞とを樂まれたことは、ヴント老先生が其の壯年期に於いて生理學的及び實驗的な個人心理の研究に従事したが、その晩年に於いて廣く言語、神話、風習等の社會的現象を研究の對象として其の大著「民族心理學」十卷を完成したのと似通つた所がある。

最初心理學教室に備えられた雑誌は米、獨、英のものが主であつたが、フランスのはたゞ一つ「心理學年報」があつた。その中に有名なアルフレッド、ピネーの知能検査の報告が三回に涉つて載せられて居て、私等がそれまでに學んで居たドイツやアメリカの實驗的研究と可なり趣を異にした新味のある點が私には非常に興味深く思われ、教室の研究會の席上で報告したことがあつたが、これは恐らく我國に於ける知能検査の紹介の最も古いものだと思う。

大正二年の夏私は官命を受けて獨佛米三國に研究の爲め出發したが、それと同時に松本先生は其の前年に逝去された元良先生の後任として東京に轉任され、大正五年夏私の歸朝するまでの三年間は哲學の西田(幾多郎)教授が心理學講座を擔當され、松本先生も時々入浴して大學院學生の指導に當つて居られた。

私は大正二年の秋からライブチヒのヴント先生の教室に入れて貰い、こゝに留學期間三年の半分を過すつもりであつたが、翌三年八月第一次世界大戰の勃發した爲め、ドイツを去つて英、佛、伊、米などの諸國に二個年居た。ヴントは大戦後間もなく八十八歳の高齡で歿したので、私が先生の教えを直接受けた最後の日本人となつた。松本

先牛の外に、ドイツのヴント先生、英國のロンドン大學のウェスターマーク先生、米國のクラーク大學のホール先生は、其の著書及び講義や指導によつて深い影響を私に與えたもので、これ等諸先生の師恩は永久に忘れることは出来ない。

開設當時の支那學の教授たち

小 島 祐 馬

私は明治四十二年に、支那學を修めるべく哲學の第四期に入學したが、その時支那學關係の教授は、支那哲學並に支那文學講座擔任の狩野（直喜）先生と、東洋史講座擔任の内藤（虎次郎）先生と桑原（隴藏）先生との三人であつた。

狩野先生は京大の教授になられるまで、世間では全く名前の知られていない方であつたが、東大卒業後三、四年たつて、將來京大文科開設の場合教授の任に當るべき人として、文部省から支那へ留學を命ぜられたのであつたら、學界では早くから嶄然頭角を見わけていられたことは明らかである。桑原先生は狩野先生より一年後れて東大を出られたが、卒業の翌々年『中等東洋史』二巻の名著を出され、その後まもなく高等師範學校の教授になられ、東洋史家としてすでに名聲の高い方であつた。そして内藤先生は、狩野桑原兩先生とはその經歷を異にし、中等學校を出ただけで雑誌記者や新聞記者をしていられたが、その著書や新聞雜誌の論文によつて、支那に關する學識の非凡なることが、早くから一般に認められており、文科開設の際廣く人材を四方に求める方針の下に京大へ招聘され、來任されたような次第であつた。

そういう風で開設當時の支那學關係の三教授は、みな若くして卓越した學者であつたが、これらの先生が他科の教授と少しく様子の違つていたことは、これらの先生は獨りその擔當の部門において學識が勝れていたばかりでなく、およそ支那の學問である以上どの部門のことにも相當深い造詣を有つていられたことである。そして此等の先生の一致した意見として、支那の學問というものは、各部門が相互に關連をもつているから、他と獨立して一局部一時期のことを研究するわけにゆかない。されば一局部一時期のことを研究するにしても、先ず一應支那の學問全體に通じた上で然る後やるべきであるといふのであつた。これがその後京都大學でいふ支那學の意味であつて、單に支那に關する研究ならば何でもそれは支那學であるとするのは少しく趣が違ふ。そこで狩野先生のごときは、文科の講座の構成を現在の如く哲學史學文學の三科に大別することをやめ、日本學支那學印度學などといつたような別け方にして、その支那學科の中で哲學史學文學を專攻させるといふ風にすることを望んでいられた。しかし桑原先生は、學生時代東大の漢文科から東洋史學を獨立させた張本人であつただけであつて、狩野先生のこの主張には反對であつたが、しかし支那學が現行の組織の如く哲學史學文學三科に分屬しながら、お互に密接な關連を持して行くことには賛成であつて、當時一部の東洋學者のように、古來東洋文化の中心であつた支那本部のことなどは少しも知ろうとせず、塞外の一地域のことばかり専心に研究するといつた研究態度には、少なからず不滿の意を表していられた。

次にこれら三先生の間で一致していたことはその研究方法であつた。尤も此點でも狩野内藤兩先生と桑原先生とは多少傾向を異にし、狩野内藤兩先生が主として清朝風の實事求是の方法で行こうとするに反し、桑原先生は支那人の研究はすべて粗漏で信用できないとし、西洋風の科學的研究方法を取つていられた。しかしそれが双方とも實證的で、從來の明學風の漢學に反對した點においては全く一致していた。これが京大支那學の第二の特徴であつた。

今一つこれら三先生に共通なことは、いずれも支那文化に就いて深い理解をもつていられたということであつた。こゝでも支那文化に對する態度において、狩野内藤兩先生と桑原先生とは違つておつて、狩野内藤兩先生は共に支那文化を非常に愛好され、支那の文化人と親交を結ばれ、御自身でも支那的教養を身につけることに力めていられたに反し、桑原先生は支那文化に對しては大體批判的であり、支那人をば概して好んでいられなかつたが、それにも拘らず支那の研究には多大の興味を有つていられ、多方面のことに通じていられたのであつた。

支那學はその後京大文科の一つの特色となつたが、それは開設當時のこれら三先生の支那學についての考え方、その研究方法がすでに後年の學風を規定していたのであつて、またこれら諸先生の支那文化に關する極めて深い理解が、後進の研究心を大いにそゝつたものであつた。

聞くところによると東京あたりでは、京大文科の支那學の發展は、支那の革命騒ぎで明治四十四年の暮に支那の學者——羅振玉・董康・王國維諸先生——が京都へ亡命して來たことが大いに影響していると思つている人もあるようであるが、これは大きな見當違いといわなければならぬ。京都大學では前述の如く羅さんたちが亡命して來る前すなわち開設の當初から、すでに三教授によつて後來發展の基礎は築かれていたのであつた。もちろん京都の支那學が、羅さんたちが京都で出版した資料や著述のおかげを蒙つたことは多大であるが、それはなにも羅さんたちが京都にいたということゝは關係なく、狩野内藤兩先生は明治三十五六年頃から羅さんとは親交があり、それらの先生がたが大舉して北京へ敦煌文書を見に行かれたのは明治四十三年のことであり、かりにそれ等の書物が他の土地で出版されていたとしても、京都へはすぐ輸入されていたであらうことは、羅さんや王さんが亡命前北京で出版した敦煌文書や殷虛遺物に關する著書が、當時いち早く京都に來ていたことから推察されるところである。いくら近所で立派なものを出していても、こちらにそれを受容れる態勢ができていなければ、それこそ猫に小判で何の役にも立たないものである。

京大の憶出

田 邊 元

京大に私が職を奉じたのは大正八年（一九一九）から昭和二〇年（一九四五）までであるから、その期間は丁度二十五年になる。その中大正十五年（昭和元年）までは西田先生の下に助教として勤務し、その後の十八年間は教授として哲學の講座を擔當したのである。この時期は、日本に於ける最初の哲學組織者としての西田先生の、權威と名聲とが日本哲學に指導的地位を占め、先生の下に學ばんとする學生の數しだいに多きを加えて、ただに關西方面の高等學校出身者のみならず、東京や東北の高校卒業生にも、特に京大の哲學を選びここに入學する人の數が増加し、優秀なる天分を有する人々がたくさんに現れた時である。その餘勢私の講座擔任時代にも及んで、いわゆる京都哲學の名が學界に重きをなすに至つた。およそ教師をして身の生甲斐を感じしむるもの、優秀をその門下に擁するに如くはない。私が一生の勤務期間の大半を京大に過ごすことができたのは、何ものもこれに比較する能わざる仕合せであつた。私は當時の卒業生諸君に對し、今もなお限無き懐かしさと感謝とをいなくわけである。

しかしながら、優秀なる天分を懷いて眞理への愛に燃ゆる學生を、數多く教室に包容することは、教師の無上なる光榮であると同時に、また大なる苦痛でもある。みずからの到底及びがたきすぐれた天賦の才能を有する秀才達の教師となるのは、大きい悦であると共に、いかに苦しいことであるであらうか。特に本質上、「愛知」として探求するを生命とし、既成の知識を傳達することを本義としない哲學に於ては、教師も學生も同行として互に切磋琢磨し合い、相互に自由批判を行い問答討論することを、古來その學習方法となすのであるから、私の如きものにと

つては、教師の職は光榮であるけれども苦難でもあつたこといかんともしがたい。

かてて加えて、第一次世界大戰の結果起つたソヴェート革命は、共產主義唯物論を新興階級の哲學として俄然勃興せしめた。我國に於てもそれは、講壇哲學に對抗する革新思想として勢力を振り、今日に至るまでその勢は衰へることがない。その思想の徹底的にして鋭き論理に貫かれ、社會的正義の要求と共に理論の一貫性をも満足せしむる哲學である以上は、それが特に年若き優秀の頭腦を引着けずには措かなかつたこと當然である。私自身、理性の要求を充たす論理の貫徹に於て、この思想に共鳴する所少なしとはしなかつた。保守主義の人からは、或は私自身が、學生を左傾せしめる誘因であるかの如くに危惧せられたことも、ないではなかつたようである。しかしながらマルクンズムの如く政治を哲學に注入し、階級獨裁の鬭争目的をもつて理性の自由批判を抑壓せんとすのは、私のとうてい賛する能わざる所である。私は革新思想の側から反動と攻撃せられても、哲學講座を政治から自由に保つことを念とし、しかも私自身の無力の故に、學生諸君を殘無く中正に導くことの不可能なるを、不斷の苦惱とせざるを得なかつたのである。

このような、哲學と政治との杆格紛糾の問題は、昭和六年（一九三一）滿洲事變以後軍部獨裁の傾向が思想統制を企つるに及んで、ただに從來の如く革新主義との關係に於てのみならず、反動主義との關係に於て更に一層激しさを加え、政府の監督を受くる官立大學の哲學教師として私は、直接間接に壓迫を感じないわけにはゆかなかつた。しかし當時横行した反動思想非合理主義は、私の性格的に嫌う所である。私としては微力の許すかぎり、この傾向の大學に侵入するを防ぎ、その政治的統制を少なくとも哲學教室からは遠ざけることに努めたこと當然である。私が終始一貫して哲學演習にドイツ古典哲學のテキストを用い、講義にも現實の政治問題を取上げることなく、實存の本質問題を主として取扱つたのは、そのためである。しかし第二次大戰の緊迫愈々激しきに伴い思想統制益々厳しく、それに對し心弱き私がならん積極的に抵抗すること能わず、多かれ少なかれ時勢の風潮に支配せられざるを

得なかつたのは、いかに深く自ら慚ずるもなお足らざる所である。遂に盲目なる軍國主義が幾多の卒業生在學生を戦場に驅立て、その中犠牲になつて仆れた人が哲學だけでも十數名にのぼるのは、私にとつて自責痛恨の極みである。たまたま終戦に先だつこと半年に、私の停年退職が實現したことは、個人的には私の解放を意味したので、幸運といふべきものであつた。しかしそれだけに、當時から現在にいたるまでの同僚各位の心勞努力に對しては、私に實に感謝に堪えないのである。御かげで、私の學問生活の故郷である京大文學部が隆昌を續け、いま開設五十年を記念するのは、まことに慶賀の至りといわなければならぬ。(一九五六・二・二〇)

雜魚の魚まじり

成 瀬 清

明治四十年に東大獨文科を出た私は北海道と金澤とに就職口があつたが、一高入學の翌年父を失い母ひとり子ひとりの境遇だつたので、東京生れの老母を遠國へ移住させるに忍びず、辭退して根岸の里に止まつていた。然し、生活の必要に迫られ、恩師藤代禎輔先生の推薦で慶應義塾の高等豫科へ出勤することになり、向軍治氏の下で一年間ドイツ語の教鞭を取つた。そして前年京大教授に榮轉せられた藤代師に三高教授兼京大講師として招かれ、喜んで赴任したのでつた。それは知遇の恩に感じたからであり、また窃かに京都へ憧れを持つていたからでもあり、老母も京都ならと同意して呉れたからである。然し初めはまず五、六年のつもりでいたのだが、いつか住み慣れて定年まで滿三十七年間を送つてしまつた。そして四十年を隔てて三田の塾へ復歸することになつたのも何かの因縁であらう。京大では副科目の語學を受持ち十一年間講師を勤め、大正九年助教授に任官したが、いつまでも論文が書

けず、藤代師の歿後も未提出のまま十年間を経て萬年助教に終りそうだった。赴任當時、京大の教員室ではいつもフランス語のオリアンティス講師と顔が合った。温顔の老紳士で、日本語はドイツのシラー牧師などより遙かに流暢だった。若冠二十四歳の私から見ると慈父の感じがした。或るとき無髯で眉毛も薄く、どこか坊さんめいた、短軀便腹の教授が現われてオリアンティス師とジェスチュワたつぷりにフランス語で會話を始めたので度肝を抜かれたが、それは谷本富博士だった。鐵齋の御曹子富岡謙藏講師も氣焰萬丈當るべからざるものがあつた。教授陣には藤代先生を始め、一高時代の舊師原勝郎、桑木嚴翼、松本文三郎等の諸博士があり、文學の狩野、新村、藤井、哲學の波多野、朝永、松本、藤井、史學の三浦、坂口等々碩學大家揃いで、美學の深田康算博士などが最年少組だった。そして、圖書館には島華水博士が、事務室には伊津野直氏が控えていて、ここでも私などは子供扱いだった。更に、時々開かれる全學教職員の會食では一そう雑魚の魚まじりの感が深かつた。そのころ醫科や理科の教授の間に駄洒落が流行していた。文科では當時新烏丸通りに住んでいられた新村博士が「新カラスマロギー」なるものを唱えた。少年の頃から地口を好んだ私は大いに啓發されるところがあつた。由來、東京生れでも山手趣味の人々は駄洒落を卑しむ傾向がある。上田敏氏の如きは漱石に比べてずっと貴族趣味だった。露伴や湖南なども駄洒落は超越していたようだ。英文科の講師に推薦されたという芥川龍之介なども同様だったことと思う。むしろ一高時代の舊師クラーク博士の方が案外洒落を解したのではあるまいか。厨川白村にうっかり駄洒落でも云つたら一喝に附せられたろう。之に反して藤代素人博士は謠い會の福引の文句を考えたり、「へなぶり」を作つたり、洒落氣たつぷりだった。

在職初期の思い出だけを取り上げても數限りなくあるが、中でも奈良見學の折の一齣が鮮かに浮かび上がる。大佛殿の足場の上で露伴と二人取り残され、氏の案内で猿澤池畔の古い鰻屋へ行つたこと、嫩草山の麓に在つた對山樓という旅館で雑魚寢をしたことなど今でも忘れられない。そのとき美術史の瀧講師と國文學の吉澤教授とが烏鷺

を戦わせていたが、松本亦太郎博士は學生連を相手に徹宵飲み明かしてついに盛りつぶされた。朝永、波多野、深田の三教授が文學部の三酒豪と呼ばれていた。藤代先生も剛の者だったが主としてビール黨だった。深田博士のけ梯子酒で、ハルトマン流の無意識界に入らないと満足しなかつた。私もこれら大先輩の感化で多少盃に親しんだが元來酒量は少なかつた。ただ直ぐ陽氣になり、盛んに駄辯を弄るので、いつか酒飲みのように誤傳されたのだ。

東三本木の月波樓に行季を解いてから、吉田、下嶋、新烏丸、南禪寺高岸、動物園横、眞如堂裏、東天王町、法勝寺町、室町と轉々したが、動物園横の家で度々盲腸炎の發作に悩んだときには、特に近所の厨川白村氏と銀閣寺畔の島華水氏との世話になり、新村、濱田、羽田の諸先輩には學位論文の事などで御心配をかけた。更に、半生以上を京都で送ることになつた直接の動因はもとより藤代先生の高誼であつたが、間接に先生に説いたのは西田幾多郎博士だと聞いている。回顧すると私が京大の諸先輩に負うところは誠に大きく、この點で甚だ恵まれていたと云わねばならない。今、重山博士の新隨筆集「五月富士」と鈴木博士の「豹軒退休集」とを前にして誠に感慨無量なるものがある。(昭31・3)

第九 教室

植 田 壽 藏

私は明治四十一年の夏三高を卒業して、京都大學文科大學へ入學したが、その秋から聽いた哲學科の普通講義には、大抵第九教室が用いられた。その時の美學の講義はドイツ文學の藤代教授が兼ねて居られた。私は楽しんでこの講義に出席した。或る日のこと、何の例としてであつたか、いつものように無雜作にひろげた布呂敷の上に開い

て、抱えるようにして見ていられたノオトから、ふと目をあげて、シルレルの詩にと云つて、一行だけ朗讀せられた。藤代先生のドイツの詩の朗讀の美しさは、定評のあるものだと前から聞いていたが、多年觀世の謠を習われた、底に響きのある深い調子で、

Und es waltet und siedet und brauset und zischt.

と讀まれるのをきいて、私は急に目が覺めたような思いがした。三高の二年から三年へかけて、英語の時間に、詩の韻律のことを習つた。アイアムビック、トウロケエイックなどというのをいろいろと知つたが、さてそれが實際の詩にどう生きてくるか、どう美しいのか、私には丸で分からなかつた。何の面白味もなかつた。藤代先生が讀まれた一行で、私は忽ちに、それがアナペストであることをはつきり諒解した。こう讀めば分かるのだとも思つた。「ウント、エス」と弱く、「ワル」と上がつて「レット、エス、ジイ」で上がる。(抑々揚)それが四度ここではくりかえされる。アナペストの壯重な調子が、先生の打つてつけたような聲とよく合つて、私は全く感動した。シルレルのどの詩だろう。その日授業が終つて歸るなり、レクラムの小さい詩集を開いて、「ヘエロオ、ウント、レアンデル」をまず探してみたが、そこには無い。それなら「タウヘルム」だと狙いを着けて探したら出て來た。ひとりで讀みかえてみると、あとはそう簡単に、一本調子にはいかないものだということが分かつたが、それでも幾らかは讀むことができた。いかにも大學へ來たという思いがして嬉しかつた。

同じ教壇の、南北に二間もあるかと思う長い講義臺の、北の端に近いところへ立つて、おまけに東北の隅の方を向いて、狩野教授が中國哲學史の講義をして居られた。これが先生の講義の仕方であつた。それもまた何の例であつたか忘れたが、詩經の中にと云いながら、後ろの黒板に書いて示された。

哀々父母生我劬勞

それをノオトへ寫しながら、私は目頭が熱くなるのを感じ、覺えず涙をこぼした。中學四年、三高三年を経て大學

へはいるまでの間、學資のために、私は両親に非常な苦勞をかけた。三高の二年から三年ほどは私も多少のアルバイトをして、月々の生活はほほそれで行けたし、三高、大學の六年間は、當時京都で勤めていた姉が、非常な努力をして助けて呉れたが、なおその上に多くの心勞を、すでに老年の両親にかけ續けていた。この古い言葉を聞いて私は丸で私自身の懺悔を、人が云つているような心もちがした。これは詩經の蓼莪の中の詩の一句であつた。

明治四十三年九月、二十二日の木曜の朝、西田先生の哲學概論の講義が始められた。たしかその三回目ぐらいいあつたかと思ふから、それだと十月六日になる。二節の「哲學と科學」の終りの邊で、アリストテレスの考えにと云つて、哲學は驚きから起る。普通のものについて驚けば驚くほど、より深い哲人であるという意味を述べられた。この言葉にも私は深く動かされた。すでに最初の日に、目を見張るような驚きのうちに深い感動を得た。それをまたきようも繰りかえず講義の中に、この言葉を聞いて、言葉そのものと、同時に、こういう言葉を特に取り上げられる先生とに、私は深く動かされたのである。

さまざまの深い感動を與えられた諸先生は、もう幾年も前に、相ついで世を去られた。思い出の多い第九教室も今は無くなつた。私もそのうちに消えてゆくであらう。

京都大學文學部西洋古典學講座創設の經路

田 中 秀 央

Tantae molis erat Romanam condere gentem. (Vergilius, Aeneis, I, 33)

西洋古典語が日本の大學ではじめて教えられたのは東京帝國大學文科大學においてであつた。然しその頃の先生は、神田乃武先生をはじめ、Koerber 先生、Heck 先生、Lawrence 先生、皆何れも西洋古典語の専門家ではなくて、英語學とか、哲學とか、或はフランス語學の教師が、それぞれ自分の好みで自發的に、又は大學より求められるがままに教えるという程度であつた。従つて明治時代は勿論のこと、大正時代に入つても、西洋古典學講座の創設などは殆ど考えられなかつたようであつた。

然し田中秀央が、京都帝國大學の榊亮二郎博士、波多野精一博士、新村出博士など、當時の文科大学の諸教授の特別の御配慮によつて、大正九年九月東京帝國大學文科大學講師から京都帝國大學文科大學講師に轉じ、十一月助教授となるに及んで、ここに初めて西洋古典語の専攻者が、本官となつて、ギリシア語・ラテン語を正式に教えることになつたのである。然し當時は未だ西洋古典學講座があつたのではなく、西洋古典語は言語學講座の一部として認められていたに過ぎず、従つて田中が京大へ赴任するまでは、新村出教授、田村初太郎講師、米田庄太郎講師などによつて、失禮ながら餘技的に教えられていたかに聞いている。田中は京都帝國大學へ就任すると、やがて同志社大學でもギリシア語・ラテン語を教えた。

田中が大正十一年七月から大正十三年九月の二カ年餘にわたつて、海外研究のため留學不在中は、第三高等學校の英語教師の英人 *Henry* 氏がラテン語を、菊池慧次郎氏がギリシア語を、何れも講師として教えていた。(菊池氏は自宅でも有志者にギリシア語を教えていた)。その後、海外研究を終えて歸朝した田中は、ただ一人でギリシア語五時間、ラテン語七時間を教えたが、これが、大正末期から昭和初期へかけての、京都帝國大學における西洋古典語の授業の全部であつた。田中は昭和六年三月に教授となつたが、その頃から、京都帝國大學に西洋古典學の講座開設の必要をと見える聲が自然にたかまり、文學部教授會は殆ど毎年そのことを、總長を経て文部省に要求したが、諸種の事情で實現をみるに至らなかつた。

文學部教授會は、昭和六年三月三十一日田中秀次教授と石田憲次助教授とを、當時擔當者のなかつた西洋文學第二講座の分擔者とした。

又梵文學講座は榊亮三郎教授が昭和七年四月停年退官せられてから擔當者を缺いていたので、昭和八年三月三十一日、田中がこの講座をも分擔することになった。昭和九年七月石田助教授が教授となるや、文學部教授會は、英文學教師 F. Clarke 氏が病氣退官のため、昭和九年四月以來擔任者を缺いていた英文學の講座を西洋文學第四講座と命名して、石田憲次教授をその擔任者とした。このような状態で、田中は獨立講座をもたず、言わば間借の身で、西洋古典語の灯火を點じながら、昭和十三年五月三十一日に至つた。

元來、京都帝國大學文學部では、東京帝國大學文學部と異り、西洋文學の講座を、明白に英文學講座、獨文學講座（佛文學講座）と命名せずして、ただ單に西洋文學第一講座、第二講座と稱し、その講座の内容には自ら傳統はありとは言え、その都度四圍の狀態によつて、内容も變じうるという融通性を認めていたが、これも京都帝國大學文學部の長所と考えられていた。

それで、この融通性によつて、田中は昭和十三年五月三十一日附をもつて、これまで擔當していた二つの分擔を免ぜられ、新に西洋文學第二講座（傳統的には英文學講座）の全擔を命ぜられた。然しその内容は勿論英文學ではなく西洋古典學であつた。そこで田中は西洋古典語のほかに西洋古典文學の講義を開講した。尙、西洋文學第三講座は昭和九年七月に創設せられ、その内容は佛文學であり、初代の教授は太宰施門氏であつた。

このような状態で、數年の歳月が流れたが、田中は、或る意味での借用講座・流用講座である西洋文學第二講座を、名實ともに西洋古典學講座にすることを教授會にはかつた。然し、この第二講座に最も關係の深い石田教授は傳統を重んじ、この提案に強く反對した。かくて、文學部文學科の教授が再三會合して、この問題の打開策を講じたが、双方の主張が強く、一時はかなり烈しい雲行となつた。そのうちに文學科の長老教授である成瀬清氏をはじめ

め御一同の御盡力と石田教授の思いやりある宏量と明察とによつて、田中の在任中は西洋文學第二講座は全く西洋古典講座と見なして運営して差支えないが、田中の退官後はもとにもどして、傳統によつて内容は英文學講座とすることの都合が成立した。田中としては、この一種の妥協案には不服ではあつたが、諸教授の御親切や御好意を考へ、更に成瀬教授の御忠言もあり、要は田中の退官後、西洋古典語・文學を教える教官の良否が、この問題を解決する鍵であろうと考へたばかりでなく、當時大東亞戰爭中のこととて、英語は一般に輕んぜられ、排斥せられるという状態であつたから、もし我が國が勝てば、従前通りに、英文學に二講座ということは認められないであろうとも推定したので、上述のような妥協案に同意して昭和十一年三月に及んだ。田中はその年の三月三十一日で停年制によつて退官したが、田中が出席した最後の教授會の席で、「よい後繼者を作つておいたから、皆様、この若い芽を暖かくそだてて下さい」の一言を附加して、その簡単な挨拶を結んだ。然るに敗戦という苦杯をなめると共に、英語は急に重要視せられ、都會も田舎も英語でなくては世があげぬという状態に立至つた。そればかりでなく先年の約束もあるので、西洋文學第二、第四講座は内容的に英文學の講座ということになつてしまつた。その後、文學部教授會や歴代の總長もこれに同情して色々御盡力下さつたし、田中自身も學都京都に西洋古典學講座の創設を見ることが、自分に課された使命でもあると考へていたので、退官後もその目的達成のために絶えず努力したが、一向に成功しなかつた。

昭和二十五年五月吉田内閣の文部大臣として幸にも天野貞祐博士が就任せられた。同氏は西洋の學問を研究するには西洋古典語の知識は絶対に必要であることを確信しておられ、ある隨筆に、若い時に西洋古典語をみつしりと學習しなかつたことは一牛の恨事であるとまで述懐しておられたほどであるし、かつては京都帝國大學文學部に教授として田中なども同席しておられたので、京都帝國大學文學部内における西洋文學の種々の關係についても、かなりよく知つておられた。そこで文學部教授會は、時の京都大學々長服部峻次郎博士を通じて、京都大學文學部

に西洋古典學講座の創設を文部省に要請した。又、田中個人としても友人天野氏にこれを心の *Kr̥j̥ma ēs ūei* とせられるようにと話した。その頃東京大學に西洋古典學講座が開講せられたということを耳にしたので、その由來について調べたところ、それは流用講座であつた。

その後、京都大學文學部教授會、京都大學評議員會、京都大學學長服部峻次郎博士の御配慮、特にその要請を迎えて立つ文相天野貞祐博士の在任中の特別の御盡力によつて、同君退官後約一カ年を経た昭和二十八年八月一日、京都大學文學部に西洋古典學講座が始めて正面から堂々と誕生したのである。

回顧すれば、田中在任時代、京都帝國大學で西洋古典語を教えていたのは、自分一人であり、一週間の授業時間も精々十二時間ほどにすぎなかつたが、退官後十年にして、西洋古典語を教えておられる先生は數名あり、各自その専門の分野においてそれを行われ、一週間の總時間數も三十時間以上にも及ぶようである。今の學生諸君はまことに幸である。願わくば、じつくりと落ちついて、いつまでも謙虛に、一生を西洋古典學の學生のつもりで、*Festina lente* と努力を續けられたい。この上とも、日本の古典的の古い都京都において、西洋古典學の研究と學習とが、益々盛んになり、名實共に、京都大學文學部がこの學問の *Mecca* とならんことを祈つて筆をおく。

昭和三十一年三月二十五日

Festina lente

「研究的、開放的」

天 野 貞 祐

明治三十九年わが文科學大學の創設に當り、何をその特色とすべきかについて開設委員の間に議論がたたかわされ

たが「飽まで學問的、研究的であつて、然も同時に自由開放的な學風を有すべし」ということは蓋し暗黙の中に一致した考えであつた」ということである。(『京都帝國大學史』六〇四頁) 學部五十年の歴史はこの理念の實現に終始したと思う。學問研究における學部全體の純粹強靱な精進努力は云うに及ばず、教授の銓衡において廣く人材を天下に求めたことは周知の如くである。わが學部をして世の光たらしめたものは創立の理念に忠實であつたことを信じ、今後この理念がわが學部を支配することを、私は今日の時勢において一そう痛切に希求する者である。俗化した大學はそれこそはいわゆる「味を失える鹽」にも比せらるべき無用なもの、否、無用に止まらず有害な存在となるであらう。まことに「聴く耳ある者は聴くべし」という時勢である。

私などの學生時代はもちろん教授時代にも學内に暴力沙汰などは聞いたことが無かつた。私は濱田總長の下に學生課長を勤めたが外部の暴力には配慮しても學内の暴力については全然考へたことがなかつた。學生はあくまでも學生であつた。ことに文學部の學生はその思想・人生觀の如何を問はず、すべて本來の意味における學徒であつた。私は西田先生の――

「此頃屢々マルキスト來りマルクスを論ず

夜ふけまで又マルクスを論じたり

マルクスゆゑにいねがてにする」

(昭和四年)

という歌を限りなくなつかく愛誦する者である。當時のマルキスト達の學究的理論的であつて、いかにも京大文學部の學徒らしい氣質と、若い學生を相手にしても、上から下に臨む態度ではなく、いつも若い人達と同じ平面上に立つて熱心に、時には情熱的に論議をされる先生の風格とが、この歌において實によく表現されているように私は思われる。また西田、田邊兩教授の特殊講義には學生だけでなく、他學部の教授も、京都はもちろん京阪地方在住の卒業生も集つて來たが、その求めるものは純粹に知であつて、知以外の何ものでもなく、こゝに愛知者たる學

徒の矜持と幸福とがあつた。京大哲學科に學んだ者でこの幸福を味わなかつた人はないであろう。私は停年退職するまで田邊教授の聽講者であつたことを感謝なしには思い起すことができない。

私は明治四十五年卒業、哲學倫理學研究室の副手を囑託されたが大正三年辭職、大正十五年助教として再び本學に歸り、昭和六年教授に進み、同十九年停年退職するまでその任に在つた。學生として私が最も幸福に感じたことは心から尊敬できる碩學を師とすることであつた。學生にとつてこれほど幸福なことはないであろう。當時は學生數の少ない關係もあつて、ひとり哲學科の教授だけでなく、史學科文學科の教授方に対しても親近感と尊敬とを持つていたことは、どれほど仕合せなことか知れなかつた。學生として教授として私が本學において學びとつた最上のものは學問への愛であつた。これはどんなに感謝してもきれない收穫である。卓越した師友を持つた爲めに彼等の純粹な學問愛、その倦まざる努力は私の如き者の魂にも知らず識らずの間に學問への深い愛を植えつけ、情熱をともしてくれたのである。この愛のために老境に入つても希望を失わず、云わば古今の天才を友として「太陽は日ごとに新しい」ことに勵まされつゝ、なんとか生きてゆけるわけである。

外 人 教 師

太 宰 施 門

境遇が幸いして私の在任した二十六年間、フランス文學科は秀れたフランス人の講師を相ついで迎えることが出来た。恵みを感じる悦びが非常に大きいので、想い出のままを何の順序も無く以下に列べて見る。

大阪の外國語學校（校長葉山萬次郎氏）側から寄せられた援助も極めて大きかつた。可なりの不便を忍んで相つ

いで俊秀のアグレジェ（教授資格所有者）を招聘し、同時にそれらの學者を殆んど無條件で貸し與えられたからである。何處かで或る外人教師の不平を聞いたことがある。國籍さえ同じであればその人物、學殖、識見は何も問わないで、同じ待遇、同じ職責が與えられる、と。そう言う疏ましい事例の頻繁に行われた中で、我々はフランスの最高有資格者、而も才幹に溢れた若い人達を五六名次ぎ次ぎに、實に乏しい待遇で招き、重要な仕事を依頼し得る喜びがあつたのである。

ともに散歩し、ともに打ち解けた食事を楽しみ、フランスの事を、日本の事を、また他のさまざまな感想を話し合うちに、私の得た悦びと利益はむろん數え切れぬばかりであつた。これが毎週數時間ずつ、教室で、熱誠溢れる講義の中で我々の學生に與えられたのである。

いずれもみな我が國、日本の文化に興味、好奇心を張りわたしての渡來であつたが、特にこの方向で三人の、境遇も性格もすつかり違つたニフランス人は、完全に、底の底まで日本を味い抜き、極めつくそうという意圖で、あるいは其處で自分のこの世の生を終わろうと願うまでの親しみで數年間、あるいは十數年、數十年間我が國に足を停めた。マルセル・ロベール氏と、ジョルジュ・ボノー氏と、カルドン・ド・モンティニー氏の三氏である。

ロベール氏は實に佻しい浦和の高等學校官舎に宿つていた。森（外三郎）三高校長と一しよに訪ずれ、京都へ轉任の口火を切つたのは私である。英文學に興味が深く、後にそのアグレジェとなつた氏はレフカディオ・ハーンの作物に心酔し、それが動機となつて永く、最近まで日本に在つて、京都日佛學館の重職に就いていた。

ジョルジュ・ボノー氏は詩人で、アルベール・サマンを好み、その業績で早くドクトルの學位を得ていた。日本に在つても和歌、俳句、また近代文藝一般に興味を傾注し、數多い勞作の翻譯、註解を世に示した。その一部の仕事は我が文學部にも認められて文學博士の學位が與えられ、錦の衣を着飾つて第二次の大戦以前にフランスへ引揚げた。

氏の語る片言隻句、仲々味の深い、いつまでも忘れられないもの二つ三つをここに擧げると、モリス・パレスに傾倒したらしい自然観察の天才が頭の中に閃めいて、「東京は淺緑り、京都は草色の町」と氏は言い破つた。また「日本人は同時に二つの物を眺めて居られぬ民族」という手厳しい批判も下された。明治以後の文藝家では、「だんぜん長谷川二葉亭と正岡子規と與謝野晶子の三人が光つている」とも。

カルドン・ド・モンティニー氏はノルマンディーの大貴族で、大革命の恐怖政治時代に、近親九人までギョティーンの處刑を受けたという家柄である。最近の戦争でもル・ルーヴル美術館の最高寶「イールのヴェヌス」がフランス中部にあるモンティニー家の地下室に運ばれて匿まわれたという。早くから舊貴族壓迫の共和制フランスを見限つてインド支那へ、それから日本へと足を運び、日本婦人を妻にして安らかに最近、南山大學の在る名古屋で瞑目した。氏も或いは多くのフランス人の言つた通り、「日本の女を娶つたフランス人は世界中で一ばん幸せな男だ」という提言にすつかり身を委せたのでもあつたらうか。(終)

生徒から學生へ

石 田 憲 次

私が京都帝國大學文科大學に注意を吸いつけられたのは、中學の大先輩赤松智城氏が五高を卒えて入學され、我等の校友會誌に近況報告の手紙を寄せられたのを眼にした時である。其處には盛澤山の講義が羅列してあつてどれも皆聴きたいものばかりという風に書かれていたと記憶するが、中學五年の私は殆どわくわくする思いしてそれを讀んだ。

併し事情があつて東京外國語學校の英語科に入學して、明治四十四年卒業と共に九州佐世保の中學校に教師となつた。東大英文科出の教頭兼英語科主任はその頃出始めた「藝文」を購讀して居たので時々それを見ることが出来たが、創刊間もない頃の聲價はすばらしく文運恰も西に遷つたかのように取沙汰された。私の京大入學の志望は教師生活の最初の年から動き出したが、私に嫁でもとつて早く安心したい老父の同意を得ることがむつかしく、二年あまり経つた大正二年の九月にやつと選科生として入學することが出来た。

私はそれに先立つて前記の赤松氏に色々御教示を願ひ、上洛後も何かと氣をつけて頂いたが、その他にも、思つて見れば、京大文學部とは因縁淺からぬものがある。というのは、私の中學時代に英語への愛を眼覺めさせて下さつた田坂正雄先生は後に京大に學ばれ英文科の第二回卒業生となられ、また同じ第二回の池田多助氏は私の出身中學の教頭となつて赴任され、私の氣がゝりの點をなだめ勵まして下さつた。更にいま一人、私が中學四年の時化學を教つた兼常清佐先生が哲學科を卒業して大學院に在學していられた。私は夏休の旅行の序に萩の土原に歸省中の先生を御訪ねして豫め御意見を伺つたのであるが、倫理學、社會學などゝいうことを考えていた私に英文科を選ぶことの安全を説いて下さつたことには今なお感謝を禁じ得ない。中學では赤松氏よりも更に一年先輩で私とは入れ替りに卒業された岡本清逸氏は英文科卒業はやゝの學士であつたが、入學早々の私を岡崎入江の上田敏先生の宅に同伴し、先生に紹介して下さいました。

私が入學した時は本部などの火災の後間もない頃で、正門をはいつたところには燒跡のガラクタがまだ残つていたように記憶する。教室は木造の二階建てで、法科の借物ということであつた。哲學科の普通講義などは今の本部の建物の後部邊にあつたかと思ふ大きな平家の木造建てで行われた。學生は角帽金ボタンの制服と和服とが略ぼ半々くらい。和服の者の中には大島や銘仙を着た人もいたが、綿大島、久留米紺の方が多かつたらう。下駄を禁ぜられていたので和服に靴の人が相當いた。それでない者は、麻裏や竹の皮の草履を新聞に包んで一々携帶するか、學校備

附の下駄箱に海老鏡をかけて納めておいた。

當時文學科必修の普通講義は上田教授の「英文學史」、藤代教授の「獨文學史」、藤井教授の「國文學史」、新村教授の「言語學」、吉澤助教の「國語學」、鈴木助教の「支那文學史」の他に、上田、藤代兩教授が隔年に擔當せられる「文學概論」があつた。英文科の者は右の外に上田教授の演習、第二講讀、特殊講義、ロンバード講師の第一講讀、島講師の第一講讀、田村講師のラテン語、オリアンティス講師のフランス語。第一第二兩講讀を履修する必要があつた。第二年目からだつたかと思うが、この他に厨川講師の「現代英文學」の特殊講義が一つ加わつた。私は人學當時桑木教授の「哲學概論」、朝永教授の「西洋哲學史」、深田教授の「美學概論」なども聽講しようとしてたが間もなく、こたれてやめてしまつた。たゞ私に成瀬講師の副科のドイツ語第二回講讀を教育學選科の村上瑚磨雄君と共にたつた二人で一年間頑張り通し、翌年は藤代教授のドイツ文學第一講讀に、獨文科の山本龜三郎君外一と共にずつと出席し、且つ當ても貰つた。その後やらぬので寧ろ後退したような私のドイツ語の力だがあのまゝ續けていたならと時折残念に思う。

その頃本科は學生、選科は生徒と呼ばれていた。學生相互の間には何の區別もなく、一様に親しくして貰つたが、選科生の私自身のひがみというか、目卑というか、教室でも前の方に坐つてみると、誰か「選科生の癖に何だ生意氣な」と言つてゐるのではないかという氣がした。その癖矢張前の方の聞きやすい席を占據することはやめなかつたが。そういう譯だから大正四年九月、三回生になつて餘り間のない頃、夏に仙臺の二高で受けた高等學校卒業學力檢定試験合格の通知が來て、上田先生と、前年一高で同じ試験をパスした菊池寛君とから喜びを言われた時は、心から嬉しく、肩身が廣くなつた思ひがした。

大正五年七月卒業と間もなく上田先生が急逝され、大學院ではクラーク先生、島先生、後にアメリカから歸朝された厨川先生の御指導をうけた。後に自ら教官の一人となつてからは四半世紀以上の間、學生諸君と共に、いや寧ろ

そのお蔭によつて自分のさゝやかな學識を養い得た。思えば奇しき因縁であり、誠に鴻大な京都大學の學恩である。

亡き先生と私

澤 瀉 久 孝

ある時狩野君山先生が教官室へはひつて來られて、郵便物を入れるボックスから一抱の雑誌パンフレットの類を兩手で上下を押へながら一つのテーブルの上へ持つて來られ、更に室の隅の竹籠の大きな屑入れをその傍へ運んで來られた。そしてその郵便物の一番上の一つを取つてその封を破り、中の冊子を開いてパラパラとめくられたかと思ふとそれを屑籠の中へ入れられた。次にその下のを取つてまた同じ事をくりかへされた。そのあざやかな處理を感歎して眺めてゐた私に

「僕のところへこんなもの送つてくるやつはばかだ」と云はれ乍ら次々に一山の小冊子は見事に片づいた。

今私の家の茶の間の片隅には封を切つたのやら切らぬのやら郵便物の山脈が出來てゐる。「ここはいつきれいなるのでせう」といふ家内に「萬葉の註釋が完成する迄はだめだナ。いや生きてるうちにはだめかも知れんナ」と答へる私なので、まづ屑籠を連んで來られた狩野先生の姿がいつも思ひ出されるのである。

○
榊亮三郎先生と教官室にゐた時に給仕が一枚の名刺を持ってはひつて來て「今この人が來ました」と云つて先生に渡さうとした。

「ナニ、君この人を知ってるのか」とするどく詰問された。まごついた給仕が「いゝえ」と答へるのを「さうか。君は知らんのだナ。ぢやこの人が來ました、ではいかんよ。このお方がお見えになりました、って云はなきや。さうだらう」とにっこりされた。給仕に對してもこの調子だから學生に對しては推して知るべしである。

先達私のところへ、ある茶道雜誌の婦人記者が客間まで外套をかゝへこんで來て、座蒲團の上へ坐つて、私のはひつて行くのを見ると頭も下げないで「先生けふはお願ひがあつて來ましたのよ」と云ふのには少しあぎれた。さういふことをさせないやうに、若い學生が來た時には私は自分の座蒲團の横へ急いで坐つて「いらっしやい」とお辭儀をする事にしてゐるが、その時はその婦人記者とにやゝ笑ひ乍ら話してゐたが、依頼の原稿は書かうとは云はなかつた。しかしもし紳先生であつたら叱るだけ叱つて記者の頼みは聞いてやられたのでないか、と思つた事である。

○

藤井紫影先生は教室へはひつて來られると黙つて黒板へ越人、不猫陀、阿難話などと人名書名を草書に近い字體でいくつも書並べられる。はじめて教室へ出た者はそれを寫せばよいのかと思つてノートへ書取る。先生は書くだけ書かれると机の處へ歸り椅子にかけられて——龍待（リューマチ）生とも號された先生は——時にアイタタと小さい聲で合の手を入れ乍ら、講義をはじめられるのであるが、黒板の固有名詞はそのうちぼつぼつ出で來るのである。さうとわかれば二度目からは注意するはずが、ともすると忘れて寫しかける事が屢あつた。しかし授業中先生の板書を眺めてゐたので文字の草體を學ぶ事が多かつた。

私は歩き乍ら講義をし、自分の字を眺めるのが不愉快で書いては消し書いては消しするが、やはり草體の文字を書く事が多い。此の頃は大學でも出席簿があるが、私はどこの大學でも出缺はとらない。しかし缺席して私の試験に合格する者はまづあるまい。第一問題がよめないだらうとすましてをれるのは先生の板書のおかげである。

○
内藤湖南先生の授業は午後にきまってる。それも一時といふのが一時に來られたためしは無かった。三高時代には先生によつては三分とたたぬうちにエスケープをやつたものだが、内藤先生の遅刻は十分や二十分のなまやさしいものでない。まづ一時間。二時頃になつて人力車でかけつけられて、紫の大きな風呂敷を開いて机の上へ何冊もの本をひろげられる。そしてその本のあちこちを見ながら講義をはじめられる。先生の講義は宵越の講義ではない。教壇に立つてから學生の面前で講義を作つてゆかれるのである。

私もノートといふものを使はなくなつてから久しくなる。しかし私の書齋にはいくつものカード箱がある。その中から適当なカードを引出し、新に作つたものをも加へて講義に出かけるのであるが、時にそのカードを忘れ、甚しい時は出掛ける前までかゝつて新に書入れたカードを机の上いっばいに散らかつた本の下敷にしたまゝ出かけて教室へはひつてから風呂敷をさがしても出て來ないといふ藝當を時々演ずる。内藤先生のはそのカード類を御自身の頭の中に持つてをられたのだから私のやうなへまをされる心配はなかつた。碩學といふ名にふさはしい先生であつたと思ひ出す事である。

史學科創設のころの歴史學を思う

西 田 直 二 郎

一
京都大學文學部は、ここに五十年の歴史をもつに至つた。五十年は半世紀である。これは人生の上に於いても、

また世界の歴史の上に考えても、短い時ではない。この間に歴史も變轉したが、歴史學もまた大きく轉換したことを感じる。

京都帝國大學に文科大学が設置せられ、それに新たに史學科が開かれたのは明治四十年（1907）であつた。私はその年の九年に、史學科の第一回の學生として入學したのであつた。今から思えば、ちょうどこの頃はヨーロッパにあつても歴史學が鬱興する時にも當り、日本にても日露戦役の勝利の後をうけ、諸學の盛んとなる一つの時期であつた。

私は京都の文科大学が創設せられた明治三十九年には、大學のすぐ向い側にあつた第三高等學校（今の京都大學吉田分校）の學生であつた。

その時文科大学では哲學科だけが開かれ、當時米國から來遊中のラッド教授の心理學の講義が行われたことがあつた。三高學生にても、文科を志す者には特に聴講が許されたもので、私達もこれを聴きに來たことがある。私が京都の文科大学を知つたのはこれが初めてであつた。その時に感じたことは、一には教室の廣やかなこと、（後でわかつたことであるが、これは創立早々の文科大学が法科大学の教室を借りていたのであつた。）そしてなお一つはこの講義には文科大学の諸教授も出席しておられ、學生も老若あり、日本人・外國人相共に親和の状が見られたことであつた。これは東京大學の文科大学に對して何か清新の氣が漲るように感じられたのであつた。

これが私等同期の三高生をして多く京都の大學を選ばしめたともなつたのである。

史學科が開かれ、その最も初めの講義は、教授内田銀藏先生の「史學研究法」であつた。今ならば「史學概論」とも言うべき講義である。この史學研究法の開講は京都大學に於いては特別な意味を有つていたのであつたことを先生から聞いたのである。

内田博士は、史學科の主任教授であり、史學科設置の前に歐洲の留學から歸朝し史學科開講に先だつて教授とな

り、京都大學の史學科なるものの組織、編制に實際參畫せられたのであつた。京都大學史學科の規定には、専攻科目とも言うべき「正科目」に、國史、東洋史、西洋史、地理學がある——後に考古學が加わつた——と共に特に「史學研究法」なるものが書かれている。これは、内田教授の發意によるものであると聞かされた。内田教授は、この「史學研究法」なるものを推し進めて「史學理論」または「理論史學」とも言うべきものとなし、やがては國史、東洋史、西洋史等と並べて獨立の講座とし、ここに歴史學または歴史科學なるものの新たな途を拓こうとする意向である、と述べられたことがある。

かようなことの中にも、この「史學研究法」についての教授の抱負が考えられるが、また京都大學史學科創置時代の學風が、自らにも窺われるのであつた。

この頃「史學研究法」については、學問的な論著としては、日本では東京帝國大學教授坪井九馬三博士の「史學研究法」の一冊が刊行せられていたばかりであると言つてよかつた。そしてこの著はドイツのベルンハイムの著作（第一版本——増補版でなく）に依るところ多いものであつた。——それほどにベルンハイムの歴史學の考え方は、日本でも支配的ともいふべきさまであつた。

この時、内田教授は、このベルンハイムの歴史學方法論に疑いを起し、その謂うところの實證主義的なものに満足せず、歴史學研究の究極するところとして、そこには理論歴史學、または歴史哲學のごときもののあるを考へていられたのであつた。史料なるものに、ベルンハイムが一等史料、二等史料などと客體的に等差を決めていたことにも、根本的な修正を加えられたのであつた。

かようにして京都大學にて史學科が開講されたころの、この史學研究法の講義は、明治末年、日本で歴史學が興らんとする一般情勢の上に一つの意味をもつていたと言つてよいのであつた。

私がこのことをここに云うのは、内田先生が史學科開講後間もない頃、京都大學文學會から發刊するに至つた雜

誌「藝文」の第一巻に「史學と哲學」という論文を連載せられたこと、ひきつゞいては京都大學哲學會にて「時」という題にて講演せられ、これが同じく「藝文」誌に載せられたこと、さらには大正三年、東京大學の哲學倫理學會大會で「世界」についての考えを發表せられたことを思い合わずからである。——「世界」についての考えは後に東京大學の哲學雜誌に連載された——まさにこの頃、史學からして哲學にと亘る研究が内田先生によつて拓かれて來ていたのであつた。殊に「時」や「世界」に盛られている考えは、その時代の歴史學——恐らく哲學の上においても——未だ嘗て見られなかつた獨自なものが展開されているのであつた。

これを思えば明治の最末期は、日本の歴史學理論發展の上の一つの時期であつたと云うべきであつた。この舊い都において新たに開かれた歴史の學科は、まず多くの點で清新さを見せていたのであつた。

日本の古代史を研究する者に、Fustel de Coulanges の *Cité antique* を讀むべきことを内田教授から奨められていたのも、やはりこの史學科創設時のものであつた。

二

またその頃の京都大學史學の特色とも言うべきは、文化史的な研究に進んでいたことであつたと思う。

内田教授は、かつて日本文化史を講義することを約束せられたが遂にそれを果されずに急逝せられた。しかし京都大學では國史といわず東洋史、西洋史、また考古學、そして新たに設けられていた地理學にあつても、文化史的な方面に多く關連し、それにおいて進みを見せていたと思われた。

此のころ京都の文科大学では哲學・史學・文學の三科を共通しての機關雜誌「藝文」の刊行が計畫せられた。私是最初の學生委員としてそれに加えられていたことを覚えてゐる。この「藝文」は、むしろこれを「藝文^{ゲイム}」とよんでもらいたく——漢書の藝文志^{セン}に見るように——それはドイツ語の *Kultur* にも當るものであり、「文化」を廣く意味する、と解してほしいと、ある教授から聞かされたことを今も覚えてゐる。

ちょうどその頃ドイツにあつては、カール・ラムプレヒト K. Lamprecht がライプツヒヒ大學にたてこもり、文化史研究を唱導し、北方のベルリン大學の政治史を中心とする學風に對して文化史の研究を立て、それがより高い歴史學の學問性を持つるものであると主張していた。その著「近代歴史學」は、京都に史學科が開設せられる年の前後にしきりに版を重ねていた。哲學科では桑木嚴翼教授が、史學研究會の講演において紹介し推奨されたことがある。大正八年には和辻哲郎教授によつて翻譯せられたのであつた。

かようなことにも考えられるように京都大學では文化史的な諸研究があつて、東京大學の史學が傳統的に國家、政治に關連をもつその學風と相對している觀があつた。しかし、内田教授はこのラムプレヒトの文化史方法論には賛同されなかつたのである。

三浦周行先生は史學科開講の後しばらくして來任せられた。最初の講義は「鎌倉時代史」と「古文書學」であつた。京都大學に來任とともに、先生の新史料の探求、隠れたる史實の新たな究明という面においての業績はまことに目覺ましいものであつた。その中にも近衛家の文書によつての南北朝和陸の條件の研究、壬生官務家の記録による元寇の新研究、近江の今堀日吉社の古文書によつて得たる中世商業の「座」の研究、青蓮院文書による愚管抄の新史料など、その頃の學界の注視を惹いたものであつた。今、京都大學國史研究室が所藏する貴重な記録、古文書、それは大學の蒐藏としては實に稀に見るものであるが、その大部分はこの初めの頃において三浦教授の力に依る蒐集であることをここに特に記して置かねばならぬと思うのである。

そして大學、史學科が、この歴史に富める舊都の地に開かれたことの意義深いことをも思うのである。

三

内藤虎次郎先生の來任も、開講からややおくれてであつた。内藤先生は大阪朝日新聞におられ、湖南の號によつて文名がすでに高かつた。大學教授として迎えられたことは當時にあつては異例のことであつた。その次の年、文

學科に文豪幸田露伴氏を國文學擔任の教官として迎えたことと共に、京都の文科大學の創立にあつたての特色ある人選で、野に遺賢なからしむ、とも謂うべき京都文科大學が創立の時からもつていた自由な精神のあらわれと云えるであらう。

私は内藤、幸田兩先生の、大學においての初めての講義を聴くことを得たのである。

内藤教授の講義は「東洋史概説」「清朝建國史」が初めてであつた。教授の初めての講義は極めて印象的であつた。本來法科大學の教室であるのを借り用いている廣い階段教室——そして國會の議場に見る議長席のような階段の付いている白い教壇——そこに背の高からぬ身を運ばせ、風呂敷包みから書物を取り出し、低い口調でゆつくりとお話するよう講義せられるのであつた。學生のいる高い階段坐席から見れば、教壇の先生は深い溪谷を隔てて向う側の青櫓を遠く望むようにも見えたのである。むつかしい滿洲語の多い清朝建國史はかようにして初められたのである。

ある時國史を専攻するMという學生が冗談交りに「先生の講義を聴いておりますと、五里霧中（この語を使うたのである）の感がいたします」というたことがある。——これは講義がわかりにくいという意味であるよりは、すべてが耳新らしく何か神韻の漂渺たるもののあることを、そのころよく五里霧中とシャレて云うたのである。内藤先生はそれでもこの言葉を氣にせられたか、後に「それではどの教授が講義上手であるか」と聞いていられた。

その後間もない頃、哲學科の大教室で谷本富教授の「教育學及教授法」の講義がある時、突然内藤先生が戸を開いて入り來られ、教室の中で焚いているストーブのところ椅子を寄せて教育學の講義を聴かれたのであつた。谷本教授はそのころ雄辯天下第一を以て自ら任じ、その教育學の講義そのものがそのままに教授法を具現している、と自ら稱していた。内藤教授は、即ちそれを觀に來られたのであつた。教壇上の谷本教授はいよ／＼得意となり、聲を一層大にしてそのままに教授法の範を示す教育學が講じられていつたのであつた。講義の間、ときどき高い教壇

から下をのぞみ見て言葉を夾んで「どうだ、内藤君！ 谷本の講義はうまいものだろう！」と云つた。内藤教授はストーブに手をかざしながらあの童顔をほころげせて、教壇を見上げつつニコ／＼としておられたこと——今も眼の前に浮び来るように思われる。

かようなほおえましい情景を、學生たちは心ゆたかに悦んだのであつた。ここにも京都文科大學創立ころの大學なるものの雰圍氣がよく窺われるように覺える。

當時東京大學から來た友人が、京都の文科大學の教室、教授、學生の生活を見て、「私塾」のような感があるというが、まさに一家のように和氣親愛の心濃やかな裡に京都の文科大學は伸びていつたのであつた。

四

なお思い出すことは、本學史學科開講のころ史學の諸教授の研究が、學界を動かしたもの多いことである。日本史關係について云えば、國史學講座擔任教授以外の諸教授による研究が日本史研究の領域を廣め、歴史の視野を擴大したことも史學科創設時期に見られた特色であらう。

内藤教授の卑彌呼考——邪馬臺國の本州大和所在説が學界を賑かにしたのは、史學科の創立期であつた。西洋史擔任の原勝郎先生の「日本中世史」第一冊は、明治三十九年京都文科大學開設の年、原教授來任少し前に公にせられたのであるが、それには西洋史に見る歴史敘述の技術が採り入れられてあり、我が國の *Historiography* 發展の上には、たしかに一の時期を畫したものである。また同教授が、國史研究室所藏の「三條實隆公記」寫本から「東山時代における一縉紳の生活」を考察せられたのも獨創的な着想があつた。後にはこれに倣うものが少なからず出たが、遂に追従を許されなかつたのであつた。

また言語學から水を疏して國史の領野を肥沃にし豊かにせられた文學科の新村出先生の諸研究も、ここに併せて擧げねばならぬことである。——京都東山の妙法院門跡の庫から、珍らしい葡萄牙文の羊皮紙の文書——豊臣秀吉

宛、ゴアの印度副王書翰——が発見せられ、その研究が學界の日をひいたのも史學科の發展期のことである。これら諸教授の業績は私らが學生時代、それにつづく頃、心につよく印せられたものであつた。

思い出はいつまでも盡きない。

回 顧

山 内 得 立

京都大學文學部は茲に五十年の歴史を語ることができるようになつたが、哲學科は大凡それを三期に分つことが至當のように思われる。第一期は創立以來から大正十年頃迄、いわば創世紀に屬するものであるが大正十年頃から急に學生の數が増加しこの頃から第二期に入つた。そして昭和二十五年に新制大學が発足して、現在に到るまでを第三期として見る事ができるように思う。哲學と哲學史とは固より密接に關係し、卒業論文の主題を見てもその間に確然たる區別はないのであるが、大正十四五年頃から哲學に志す學生が急増し到底一科に收容しきれない状態になつたからして二分されたのではないかと思うが數の上からはこの期が全盛時代であつて、現在の新制時代はそれに比してやや淋しくなつたように思われる。この三つの時期はそれぞれ特色があつて語るべき多くのものがあるが、私の學生時代は勿論第一期に屬し種々なる思い出もそれにながつている。その頃教授としては桑木殿翼、西田幾多郎、朝永三十郎の諸先生が居られ、新銳の潑刺たる氣風に満ちていた。今は毀されてないが、現在の法學部と文學部との中間に粗末な木造の一棟がありそこに小講義室と事務室とがあつたが、普通一般講義は大抵法科の第一教室をかりて行われた。西田先生の「哲學概論」は先ず本文の一節を筆記せしめ、次にそれについて説明すると

いうやり方であつたが、特殊講義は全く自由に、教壇を徘徊しながらしみじみと語られた。——今もその和服姿と靴の音が見え聞こえるようである——所謂雄辯ではないが、あれほど心肝に徹する講義振りはどこへ行つても聴かなかつた。フッサールの講義は餘りにくどくどしく、ハイテッカーは氣を負いすぎていた。淡々としてしかも心からにじみ出るような西田先生の講義は全く一つの藝術品であつたように思う。先生の講義を聴き得たことを一生の幸福に思う人は私一人ではないであらう。雄辯といえば教育學の谷本富博士が「我輩は教育學を講義するが教授法はしない。なぜなら我輩の講義そのものが即ち教授法そのものであるから」と豪語していられた。

その頃の大學教授は相當に裕福であつたと見え、桑木先生などはいつも自家用の車で登校されていた。朝永先生は私の二回生頃に外國から歸朝されたように思う。長身の瀟灑たる風采はいかにも洋行歸りという風に見えた。

學生には第一回卒業生に兼常清佐氏が居られ、今は音樂評論家として有名であるがその頃ギリシア哲學を専攻しながらソクラテスが最も嫌いだという人であつた。この人には種々な奇談があり、毎日その前を通りながら三高の所在を知らなかつたと傳えられているが、これは少し眉唾ものである。私より一回前に野崎廣義氏があり、非常な秀才として畏敬せられ西田先生も最も囑望せられていたが不幸にして夭折せられた。その一年前に立木俊夫という人があり、鋭い論理家であつて、そのヘーゲル研究は人々の矚目する所であつたが卒業後實業界に入り若くしてなくなされた。

「哲學研究」が「藝文」から獨立して創刊されたのは大正四、五年の頃であつたが、西田先生の「現代の哲學」がその巻頭に出て初めて獨乙哲學が我國に移入された感じがあつた。紹介ということも獨創的な人でなければ出来ないことがつくづく思われたものである。西田先生は一卷の書の核心がどこにあるかを看破することに特殊な天才をもつていられた。演習も末註には殆ど介意せられず學生に外國書を読ませながら大きな欠伸をして居られたことを往々見うけた。それでいて肝所は鋭くとらえて我々を啓發されたものである。精緻な註釋者でもなく精細な批評

家でもなく全く獨創的な思索型の先生であつたとつくづく思う。西田、田邊兩先生の指導の下に第二期の全盛時代がもたらされ所謂京都學派が誕生したが、第三期には學風も變り歴史的、註解的に傾いていのではないか。今後は再び哲學と哲學史とを合一して渾然たる——決して混然でなく——一科とした方が却つて自由にして活潑なる思索の道場が生れるのではないかと考えられもするのである。

懷 舊 片 語

那 波 利 貞

懷えば早くも四十五箇年の昔である。私が第三高等學校大學豫科第一部乙類を卒業したのは明治四十五年の七月で、京都帝國大學文科大學史學科へ入學したのは大正元年九月である。元號は相異なるも要するに西紀一九二二年の年である。共に史學科に入學した同期生は計六人で、その中東洋史學專攻生は私が本科生で一人、他に一人の選科生があつた。當時の京都帝國大學文科大學は勃興隆昌の勢天下に鳴り、正教授の碩學は大抵四十五六歳の方々、意氣軒昂、學問を以て天下を呑むの概あり、助教教授講師も新進氣鋭の一家の學者でこれ亦將來天下の學問を雙肩に荷うという意氣込みで活氣が横溢した。當時官立の帝國大學で文科大學の設置されているのは東京帝國大學と京都帝國大學とのみで、我が史學科にも東京の史學科との對抗意識が暗々裏に潜在した様で、時には東京の史學科の王座を動搖せしむる様な論文も機關雜誌の『藝文』に登載せられた。諸教授が斯く好學の意氣に燃え、世人一般も之を尊敬したのは、畢竟諸教授が碩學鴻儒で見識は高邁、學識は博洽であつたが爲である。かゝる雰圍氣であつたから、學生も亦その感化を受けて實によく眞摯に學んだ。當時の學生は學問を研究せんとする志に燃えて入學して、

現今の一般風潮の様にと就職の爲の職業を求める手段として入學したと謂う様な考は殆ど無く、そこへ諸教授の活潑鮮やかな學風が感化を與えたのであるから、大學は手を拱いていても學生は競うて聽講するといふ風であつた。卒業生は中等學校の教員の資格の免許狀取得が出来たが、資格ありながら申請せぬ者もあり、往々中學校教員には決して従事せぬと傲語する者すらあつた。現に私は遂に此の老年まで中等教員の資格は取得せずして來て居る。

右の如き學生の氣風は白から授業時間表の編成上にも現われていた。正教授の講ずる普通講義・特殊講義・演習がその専攻學生の必須科目で、受験もしなければならず、卒業の成績にもなるのであるが、その他に多くの講義が並び行われて、何れも副科目といふ名目であつた。副科目の聽講は學生の自由選擇に任せられ、聴かなくても宜しいが、試験も行わず、研究報告の提出にも及ばず成績表の上には現われぬ講義であるが、私などは第一回生の時は必須の普通講義が國史學・東洋史學・西洋史學・地理學で合計七種合計一週十四時間となるが、副科目の科目數の方が必須の正科目數より遙に多く、嘗に國史學・東洋史學・西洋史學關係の副科目のみならず、諸種の講義・諸外國語・人類學迄もあり、私の出席聽講した副科目は八・九種、十七・八時間で必須正科目と合算すると一回生の時には合計三十二時間に及び、それに一回生なるが爲に受験資格のまだ生じていない東洋史學の特殊講義をも陪聽したから一週の聽講時數は三十六時間で一日平均六時間であつた。外國語でも高等學校以來の英語、獨語の外に佛語・希臘語・露語・中國語も副科目で手ほどきを受けた。中國文學當時支那文學のいろ／＼の講義も陪聽した。

かく正科目數よりも副科目數の方が多くても、陪聽をも加えて學生は競うて聽講するのであるから、受験で成績が出来ると謂う餌を附せず、又なるべく廣く聽講せよといふ勸告をもせず、全く自由選擇に任して置いていても必須正科目同様の教育効果があり、大學の研究教育の實果が實るのであつて、此の氣風は貴いものであつたと思われる。昭和十年頃から學生の氣風が漸く變化し、なるべく逃れられぬ必須正科目ばかりを聽講受験して、出来るだけ最小限度にとどめて勞力を省いて卒業しようとする陋風が一般に生じたので、之に呼應して必須科目を多く指定する時

間割表編成法が採られ、副科目の制度が影をひそめる様になり初めたが、これも世風學風の變化である。但此の一年以來は漸く學生の好學の風が再燃し初めて來て居るらしいが、猶お私の在學時代の熱心な學園の風には及ばない。

右の様な次第で私は第一回生で必須の國史學・東洋史學・西洋史學・地理學の各普通講義計七種目、第二回生で東洋史學の必須特殊講義三種目、第三回生で必須の演習二種、それに七百餘頁の卒業論文一篇、計十三種目の成績で卒業した者であるが、副科目、陪聽で三年間に聽講した講義は二十六七種目に上り相當多忙であつた。當時は明治三十七八年戰役の大捷後七・八年目の頃で國運は隆々と伸び、國を擧げて勃興進取の氣風が旺盛で、教官も學生も此の原因からも奮勵發憤の風があつたのかも知れぬ。かゝる實情であつたから在學三年間は元より卒業後も、春花秋月に人生を樂しむなどの精神的餘裕などは有らず、又生來麴生と交際せず、碁將棋を樂しまぬ者であつたから浮かれ娛しむこともせず、今にして回顧すれば、あたらし生涯一度の青春時代を享樂せず、一向に學事のみ消費したと残念にも思うが、また一面には三箇年間に有意義に過ごしたと思つて満足して居る次第である。但これだけ有意義に學生時代を活用し、卒業後も長く大學院に在學して研究に従事したが、その割合に學問を大成するに至らず東洋史學の進運に貢獻する様な業績を擧げ得なかつたのは、やはり私の研究方針の拙劣であつた爲で、畢竟ずるに私の天賦の凡庸魯鈍なるに淵源し、畢生の努力を傾注して指導して下さつた先師諸先生の御誠意に對して相すまぬことと慚愧して居る。

詠 懷 一 首

追懷往事感無量。四十五年如夢茫。先覺恩師皆鬼籍。青春風骨老秋霜。

退休猶弄丹鉛筆。寤寐難遺卷裏香。物換星移身亦老。擧頭空望白雲鄉。

大正の初年の陳列館と史學科

梅 原 末 治

いまでは全く古びてしまつたが、大正三年の初に第一期の工事が出来上つた頃の文科大学の陳列館は、粗末な木造建築が松林の間に點在する當時の構内の北半では一きわ目立つたものであつた。文科大学の開設に當つて、それを特色づける施設の一つとして考えられたと云うこの陳列館が、當時の菊池大麓總長の配慮などもあつて、いち早く工事がはじめられて、その三月に出来上り、七月に支關左右の階下三室を占めた日本・東洋・西洋のそれ／＼の遺物の陳列と關係學科の移轉が終つて、九月の新學期からそこで史學科の講義がはじめられたのであつた。

その頃濱田先生は海外在留中であつたので陳列室の整備は留守をあずかつていられた故今西龍先生が専ら事に當られて、早くから蒐集された各方面の遺品に加えるになお缺けたものについては内藤・小川その他諸教授の奔走で京阪神諸家から出陳があつて、各室ともそれ／＼に整つた内容を示した。こうしてその翌年の大正天皇の即位式の際行われた開館記念展觀に於いて參觀の多くの人士の注目を惹いたのであり、翌五年一月露西亞からの學術使節のモザリアンスキ氏を満足せしめたのもあつた。

この陳列館の他の部分は階上の古文書室や書庫を除く他はそれ／＼關係の教授室研究室に當てられて、史學科の外に美學美術史の研究室が考古學教室と大きな一室を占め、また書庫の階上は貴重資料の保存室に當てられ神教授の骨折りで當時寺本婉雅師が齎し歸つた西藏關係の資料がはこび込まれ等したことであつた。

ところでこの陳列館で當時行われ出した講義なり研究は勿論史學科のそれであつたが、その頃はいまとは違つて

専攻の學生は寥々たるもので、大抵各科目二名と云う有様であり、大正七年に國史で五名の卒業生が出たのなどは寧ろ稀なことであつた。それが充實した諸教官——それは學生の總數を超えている——に依る講義なり演習を受けるわけであるので、學生としてははじめから連日出席することが必然的なものとされてゐた。諸教授の側では學生の多寡などの問題よりも、此の地に日本でのその分野の新しい學問を打ち立てる熱意を以て、他に兼務などされることなく、殆んど終日研究室での研究をつづけて、その成果を特殊講義で講ぜられ、またやがて學術雜誌に發表される。なおまた廣い視野からする知識の修得と云う立場から、専攻の學科ばかりでなく、他の學科の講義の聽講などに就いての指導などもなされ、それが學生の數の少ないことと相俟つて徹底することにもなり、こう云う學生の修學に備へて陳列館の圖書閱覽室なり研究室は午前八時から午後九時まで開かれて、圖書室には指導の副手がつめていた。原勝郎先生の如きは連日夜まで自分の室で研究をつづけて、時々各研究室を廻つて督勵すると共に學生の修學の様子を見られる。そして八時過ぎになるとその頃のこの建物の内で喫煙の出来る唯一の場所であつた小使室の爐を圍んで助手・副手や學生達と番茶を飲みながら身近な接觸をなされるのが常であつた。序に書き添えるが、陳列館はその當然の性質から室内の禁煙が規定されて、火災への考慮から宿直をも置かれな立前で出發した。然るにこの定めが行われなくなつたのは愛煙家の濱田教授が海外留學から歸られて、自己の研究室での喫煙に責任を持つことをあくまで主張されてからで、それがまた所謂カフェー・アルケロジャの生れる一因にもなつたことでもある。

當初陳列館を主裁された小川教授も固より毎日研究室に出て、その殆んど盡くる所のないいろ／＼な構想で特に助手や副手達に研究のテーマを示された。その日毎に新しい題目には戸迷つて俄かについて行けなかつたが、併し講義の場合と違つたその上手な話振りは聴くものに深くも印象づけられた。助手や學生達は同教授に導かれて石佛の調査を行つたり八瀬大原方面に民俗土俗學の調査に出掛けたのもこの頃のことである。

このように當時は、いまでは一寸考えられない様な状況であり、引いて學生なり助手副手達は自から緊張せざるを得なかつた。併し教授等が身を以て實踐されていることよりして、自からそれに従つて日々の學修がつゞけられたのであつた。そう云う雰圍氣の初期の陳列館の生活とそ四十二年を通じての私の學園の生活での最も印象深いものとしてしみじみと顧みられ、またなつかしまれることである。

戰 中 戰 後

落 合 太 郎

成瀬教授のあとをうけて、わたしが文學部長になつたのは一九四二年、戦争がはじまって一年後の十一月であつた。降伏の翌年の十二月まで、四年と一カ月のあいだ無我夢中でつとめた。わたしにはその時分の事を書けといわれるのではなからうか。なにもかも遠い昔のような氣がする。無我夢中だつた上に、荷がおりとすべて忘れてしまいたくなり、忘れてはならぬ大切な出来事まで忘れる。思ひ出すのはどうでもよい事だけになりそうである。

學部長になつてしばらくは、雜用がしだいにふえたくらいで、戦争は大學ほんらいの機能をそれほどゆさぶりもしなかつた。一舉に大量の召集があり、學徒、出陣を見るところからがいけない。それは四三年の冬が來たときだつた。出陣を前にして、農學部うらの運動場で、各學部からあわせて千數百名が、法、醫、工、文、理、經、農の順で、分列行進した。文の先頭は紫の旗をささげていた。たかく構えられた臺の上に、羽田總長は立ちつくした。行進がおわり、横隊にならぶと、總長は送別の言葉をのべた。かわつて、わたしが學部長代表で學生諸君萬歳の音頭をとつた。曇つて、風つよく、寒い日だつた。

毎日のように、教官室の圓卓の上には、名札のついた新しい日の丸がかさねられた。乞われるままに、わたしは署名した。若い人の腹巻となるものであつた。戦争もすでに三年目で、惨敗はすでに決定していたところだったのであろう。入隊して出征準備中の學生をなくさめるために、わたしは伏見あたりを手はじめとして、だんだんに輪をひろげ、時間と距離のゆるすかぎり兵營めぐりした。學生たちは喜んでくれた。多くは、つぎはぎのある、色まらまちで、寸法も合わぬ兵隊服を着ていた。おなじころ、京都府下の兵器工場や豊橋の海軍工廠へ、または琵琶湖周邊でおこなわれた開拓作業へも、學生はかわりがわり徴用されていた。わたしはその合宿所まわりもした。とまりがけで、驅けまわつた。

建物疎開、奇妙な言葉が通用した。空襲にそなえて、大學構内いたるところの松の大木が、およそ二本に一本くらしいわりで切りたおされ、そのつぎが建物のこわされる順番になつた。文學部では木造の心理學教室に目をつけられた。その全部をこわせこわさぬで、わたしは本部の營繕課長と激論した。けっきよく、近接の建物をまもるためにという理由で、西かどの大きく袖になつた一室だけこわすことで折りあつた。が、こわすには學生を使え、費用が無い、と營繕課長は言い張つた。木造の多い醫學部病院のどこそこも學生にやらせたという。よそはどうでも、これには最後まで、わたしは承知しなかつた。わたしは大學に無關係の大工二名を別々によび、教室の構造をしらべさせた。(二名のうち、一名は梅原教授の紹介。一名はわたしの信用する老大工職。) 兩名の報告はまったく一致し、とうてい素人の手でこわせるような建築でないことがわかつた。まことに誠實な仕事があつて、下から上まで無類に堅固なものだということだつた。わたしは獨斷で、梅原教授推薦の大工の手でさっさとこわさせてしまひ、こわしたあとの恰好もぐあいよくつけてもらった。工賃のかわりに古材木と屋根瓦などを提供した。國家財産をそんな仕方では處理するのは違法だと、またもや營繕課長はつめよつた。學生などを使って、もし怪我でもさせたらどうする。それを考えるだけだ。責任がどうこうと仰有るなら、むろんわたしが負うまでの話だと申しした。こ

わしたあとの床下の深いのをあんばいして、事務室の人たちが防空壕をつくった。

陳列館の屋根のおよそ半分はほんものでないと聞いていた。直撃弾ではひとたまりもない、地下までつきぬけると心配した。が、これはにわかはどうしようもなく、運を天にまかせるほかなかつた。だいじょうぶだという豫感がさいわいにあつた。中央館の書庫の書物を疎開すべきかどうか。寄り寄り話し合つたりしたが、正式に教授會の議題にはならなかつたとおもう。いいかげんな地方へもちだすよりもそのまましておくがよい、運ぶ途中も危険であるし、という考えが同僚のあいだを支配していた。

戦後、一年あまりの在任中には、いわゆるページなるものの審査に苦勞した。そのほかにも話題がないではない。思いだされてくる。が、これだけしておく。

四六年三月、アメリカ教育使節をむかえたときは、日本側の一委員として東京に詰めきつた。つづいて教育刷新審議會に加わり、ほとんど毎週、京都東京間に往復した。内を外にしていた。同年十二月に三高校長を命ぜられ、たまたま京大・三高の合併を處理する役まわりにもなつた。

京都大學の思い出

和 辻 哲 郎

わたくしが京都大學に呼ばれたのは大正十三年の春で、翌十四年の三月に講師として赴任し、同年の六月に助教授に任ぜられ、その後昭和九年六月に東京大學に轉ずるまで、足掛け十年在任した。わたくしの三十六歳から四十五歳までの間で、思い出すことは非常に多いのであるが、特に近年になつて強く感ずるのは、ちようどあの時期が

京都大學の文學部の初代末期であつて、創設時代以來の先輩教授たちの顔ぶれが、まだ大體揃つていたということである。この時期に同僚の席末に列なることが、いかに幸福であつたかということ、此頃はしみじみと感ずることが出来る。

尤も大正十四年といへば、文學部開設以來十六七年も経つてゐるのであるから、教授の顔ぶれは相當變つてもいい。しかし元教授でこの頃までに歿してゐた人は、上田敏、内田銀藏、厨川辰夫、原勝郎の四氏のみであり、他に轉じてゐた人は狩野亨吉、桑木嚴翼、松本亦太郎、谷本富の四氏位のものであつた。このうち上田、原、狩野、桑木、松本の諸先生には、それまでにいろいろと接觸する機會があり、谷本氏にも京都赴任後に時々接することを得たのであるから、元教授で全然接觸することの出来なかつた人は、たゞ内田銀藏、厨川辰夫の二氏のみである。特に内田銀藏氏に接することが出来なかつたことは、今でも残念に思つてゐる。

そういうわけで、大正十四年の頃には、京都大學文學部の初代の先生たちは、まだ大勢残つてゐた。哲學科では松本文三郎、深田康算、朝永三十郎、西田幾多郎、藤井健治郎、小西重直、高瀬武次郎、米田庄太郎などの諸氏、野上俊夫、波多野精一の兩氏などは幾分若い方であつた。若手教授として次の世代を代表してゐたのは、田邊元氏で、助教の故參者は、澤村專太郎氏であつた。史學科では、坂口昂、桑原隲藏、三浦周行、内藤虎次郎、濱田耕作、喜田貞吉、矢野仁一などの諸氏、ほかに小川琢治氏の顔も時々見受けた。次の世代を代表してゐる若手教授は羽田亨氏であつた。文學科では、藤代禎輔、狩野直喜、藤井乙男、榊亮三郎、島文治郎、吉澤義則、新村出、鈴木虎雄などの諸氏、助教の最故參が成瀬清氏であつた。以上三十氏のうち、今なお健在なのは、野上、田邊、矢野新村、鈴木、成瀬の六氏に過ぎないので、右の顔ぶれがいかに遠い過去のものであるかが解るのである。

わたくしは哲學科に屬してゐたので、その關係上、西田、藤井、朝永、波多野、深田、田邊等の諸氏と密接な接觸を持つてゐたのは當然であるが、しかしそれ以外の諸氏、特に史學科や文學科の諸氏にも、大抵は接觸すること

が出来た。そういう機會をおのずから作つてくれたのは、事務室の隣りにあつた教官の溜りである。大抵の教授、助教、講師は、講義の前後に、この溜りで休息するのを例とした。顔を合わせれば、世間話も出るし、また學問上の話も出る。話に油がのつて教場へ出るのが遅れることもあるし、また講義のすんだあとならば、時間二時間と話し込むこともある。わたくしの記憶に残つている老教授たちの意味深い座談は、そういう機會に聞いたものが多い。これはわたくしにとつて非常に魅力のある事實であつた。従つて教官の溜りがこの魅力を擔つているようにさえ思えるのであつた。

勿論このことは、誰にとつても同様であつたとはいえないかも知れない。稀れには、自分にあてがわれている研究室から直接に教場に行き、教場から直接に自分の研究室に歸る人もないではなかつたであろう。特に、研究室のある建物が少し離れている史學科の人たちは、比較的顔を見せる機會が少なかつたように思えぬでもない。しかし内藤湖南や喜田貞吉などの諸氏の氣焔に聞きほれたのははかならぬこの溜りでのことであつて、もしあの溜りがなかつたならば、わたくしはこれらの先輩の個性を今ほど理解することが出来ず、従つてその學問にも今ほど浴することが出来なかつたであろうと思われる。して見ると史學科の人たちも同じように溜りへ顔を出していたのである。

この溜りの傳統は京都大學の文學部に生きつづけ、今のコンクリートの建物の中にも、事務室の隣りに明るい氣持のいゝ溜りが出来ている。三十年前のは、今と比較にもならない、木造の穢ない室であつたが、わたくしはそこで狩野直喜先生の論語の文章の味についての示唆に富んだ話を聞いたり、西田幾多郎先生に對する田邊元氏の鋭い質問に耳を傾けたりしたのであつた。わたくしにはあの穢ない室がいつまでもなつかしい。

思 考 出

山 谷 省 吾

私は大正九年、第三高等學校法制經濟擔當教授として就任して以來、京大の文學部には度々出入して、あるいは聽講をしたり、講演會に出席したり、あるいは許されて研究室の圖書の利用をしたりしていた。またある教授たちとは親しく交際をし、學問上の指導を受け、訪問、歡談することを無上の樂としていた。特に波多野精一、田中秀央の兩教授からは、基督教學と古典學とについて多くの教えを受けた。

私は東大の法科出身であつたが、京大の法科との關係は極めて薄くあつた。

京大の講師になつたのは、昭和二年だと記憶する。ある日、その頃まで基督教學を擔當されていた波多野教授の訪問を受けて、自分は宗教哲學に専念したいから、二時間だけ基督教學の講義を受持つようにとの依頼を受けた。私は自分の學力の貧弱さをよく知つていたが、これによつて研究に深入りする機會の與えられたことを思うて、感謝して引受けた。それ以來、昭和二十一年まで二十年間、文學部の講師として働いた。

初めの間は、今の本館の東北に接していた木造二階建の粗末な建物の二階の教室で講義をした。日當りがよくとても氣持のよい教室であつた。聽講生は多い時が十三四名、少い時が五六名であつた。中には熱心に聽かれて、共同の研究をはじめた人もあつた。それがぎつかけになつて今に至るまで學問的な交際を續けている人々が、二三に止まらない。京都文學部の特徴の一つは、學問を媒介としての共同體を作ることにあつたと思うが、私も二十年を通じて、こうした喜びを味うことができた。これは、東京のような廣漠たる場所では持つことのできない賜物で

ある。この特徴が、文學部といつまでも生かされて行くことを望む。

基督教學はその當時はまだ獨立の講座となつていなかった。波多野博士が兼擔しておられた。私は大體、波多野博士の仕方を受けて、基督教の原始時代の歴史と新約聖書の原典の研究を講義題目として來た。二十年の間に、ユダヤ教からイエス、パウロ、ヨハネ、使徒教父、第二世紀後半までの文學や思想について講義をした。

その頃、西歐諸國の神學界では、バルトを指導者とする「辯證法神學」が非常な勢を得て、從來の歴史神學を中心とした行き方に、多大な衝撃を與えて來た。新約の研究もその影響を受け、次第に神學問題を中心として解釋し思索するようになった。從來、歴史主義的研究に中心的興味を覺えていた私も、この新しい傾向と對決せざるを得なくなつた。私の京大講師時代の大きな課題は、そこにあつた。私の講義題目は組織神學ではなかつたが、組織神學についても、可なり讀んだり考えたりした。恰度波多野博士が宗教哲學についても同様な問題にぶつつかつておられたので、私は月に一回位、博士を訪問してこうした問題について話し合い、教えを受けた。これは私の生涯にとつて、最も愉快な、忘れ難い出來事である。

その頃は、哲學流行の時代、哲學といえはだれでも飛びついて來る華やかな時代であつたが、京大哲學科には、西田幾多郎、朝永三十郎、波多野精一、深田康篤、若手では田邊元、和辻哲郎、天野貞祐、九鬼周造等の著名な哲學者がおられた。これら代表的學者によつて、京大哲學科の黄金時代が作り上げられていたのである。私もこうした雰囲気の中に入れられ、ある程度諸先生との交りも許されたことは、非常な幸福であり光榮であつた。しかし私は、元來門外漢的存在に過ぎなかつたため、文學部の研究的仲間にはいることもできず、二十年の間に何等の學問的貢獻もなし得ずにすんでしまつた。また、文學部そのものとも、親しい關係ができないまま終つた。就任の時は二十名以上の講師の一番下部に名を列ね、僅かばかりの給料を頂いていたが、終りの頃は初めから二三番目に名を記されるようになり、特別講師として給料も少しばかりよくなつた。教授も次々に停年で去られ、新手と代つて行

つた。世の移り變りを、私は京大文學部の中にあつて、強く感じさせられた。

昭和十四五年頃から、文學部の中にも強い嵐が吹きはじめた。マルキシズムの盛んな時代は過ぎて、國家の問題、歴史的現實の問題が大問題として論ぜられはじめた。ある時は、文學部が文部省精神文化研究所の出店のような感じを與えたこともあつた。學問と實際生活との激しい交渉、そこから來る煩悶、苦惱が京都の中にも見えはじめた。京大全體から見ると、その對決を誤つた數々の事柄があつて、甚だ遺憾であつた。しかし、文學部關係については、私は何も知らない。ただその頃の京都は極度の食糧難に陥つていたため、教室、研究室の前後、いやしくも空地のある所はすべて耕されて豆や芋が作られ、一同が飢死に對處したあの光景は、今でもありありと目の前に浮んで來る。戦争中から終戦直後の文學部は、相當の苦難を経、あるいは、混亂に陥つたとさえ見えたが、兎に角切り抜けることができて今日に至つたことは、喜ばしいことである。

私は二十一年以來東京に居を移した。が、東京に來て見て、文學部を中心とする京都における文化の研究の有り難さを、ひしひしと感じる。學問を中心とした交り、仲間を持つことは、京都のようなところでないと出來ないと思う。東京には京都の文學部を目的にかたきにする人々がいて、「京都學派」などいつて對抗意識を燃やしている。甚だ愚なことである。兎に角、東京の人はジャーナリズムなどに引まわされて、研究ができない状態にある。學問をするには、京都に限る。私は京大文學部がますます自重して、日本の學問の名譽ある擔い手となつて頂き度い。

創設當時の思い出

京大文學部の開設五十周年を迎えるにあたり、創設當時の想い出が夢まぼろしのようにわが胸裡に浮んでくる。わたくしの入學したその開始當時の状況と現在のそれとを對照すると、内のすべての面において、あまりにも轉變が甚だしいので、母校半世紀の歴史が非常に長いように感ぜられ、延いてはよくも今日までわが身が健やかに生かされて來たことだと有り難く覺えるのであるが、また時には極めて短いもののようにも思えてならない。けだし、此れはわたくし自身がこの半世紀を實にあわただしう過ごしたからであらう。

扱、わが文學部開始第一年には唯だ哲學科が設けられたばかりであつて、それも僅かに西洋哲學・印度哲學・支那哲學・倫理學・心理學・教育學の六講座が開かれたのに過ぎなかつた。従つて、教授も倫理學の狩野亨吉先生（初代學長）・教育學の谷本富先生・印度哲學の松本文三郎先生・支那哲學の狩野直喜先生・心理學の松本亦太郎先生・西洋哲學の桑木嚴翼先生の六指を屈するに止り、その他佛語のオリアンチス先生・佛教學の熱田靈知先生・英語の島文治郎先生・宗教學のギュリック先生の四講師がいられたと記憶する。そして第一期入學の學生も選科生を加えて僅かに二十名であつたが、選科生の中には當時すでにひとかどの漢學者として知られ、後宮内省御用係を拜命して、幾多重要な名文をものされた故吉田増藏氏や、晩年滋賀縣教育界の重鎮となられた故大西豐文氏や、中國人で寡黙濃厚な夏錫祺氏やなど、異彩を放つた人々がいられた。これらの諸氏はわれわれ高校出身者から看れば正しく「お父さん」と呼ぶにふさわしい年輩であつた。

新任の六教授はいずれも少壯氣鋭の學者であつて、東京帝大の文科に優るとも劣らない新鮮な異色ある學風を發揚せねば措かないという熱意に燃えていられたように見受けられた。狩野（亨）先生の全く型破りともいふべき獨創的體系に基づく倫理學の講義や、松本（文）先生の實に洗練された文章の朗讀的講義や、谷本先生が絶世の雄辯と巧妙な教授法とを活用して、興味ふかく講義されたことや、狩野（直）先生が訥々たる口調で屢々斬新な學說を發表されたことや、松本（亦）先生がウントの著書を自ら英譯された原稿を手にしたがら、それを和譯して講義さ

れたことや、桑木先生の非常にスピードの早い講義を筆記するのに閉口したことやなどは、深く印象されて、未だに忘れられない。

かように、少數の教授講師であつたから、各講座の普通講義は言うに及ばず、特殊講義をも凡て聴講し、演習にさえも参加し得る時間の餘裕が恵まれた。わたくしは印度哲學專攻であつたけれども、教育學・心理學・支那哲學倫理學などの特殊講義並びに演習にも缺かさず出席したので、卒業の間に谷本先生から「教育學の卒業論文も提出しては何うか。」と冗談をいわれたことを覚えている。従つて、諸教授と學生との間柄が非常に親密であつて、教授の學識を受容するにも、またその人格の感化を被るにも、實に理想的であつたと言ひ得る。殊に愉快であつたことは、毎月二三回教授學生が一團となつて、討論會が催され、先ず教授と學生とが夫々一名ずつ意見を發表した後、それを中心として討議を行い、往々教授同志が互に激論を交わされるのを、内心はらはらしながら、しかし感興をそそれながら傍聴して、多大の啓發を受けたことであつた。こういう情景は現在では夢にも見ることはできないであろうと想像する。當時の母校は實際明治末期における守小屋大學であつたと言つてよからう。しかし、當時のなつかしい恩師は皆すでに亡き數に入られて、一人として生きながらえていられないことは、年齢上止むを得ないこととけいえ、まことに心淋しい極みであり、且つ哀悼の情に堪えないところである。

創設當時の想い出はなお盡きないけれども、與えられた頁數を超えるから、母校將來の健全な發展を祈念しながら擱筆する。

夏草の跡

高田保馬

京大文學部學生のころを回想するといつも夏草が目には浮ぶ。この夏草の跡こそは文學部の高層建築である。

私が入學したのは明治四十年。哲學科の二回生である。親しい友人瀧正雄氏が是非京都の法科にゆくといふので私も京都に來たのであるが、初めは多くの東大行の友人にはなれて淋しい思いをした。當時の校舎としては心理學教室だけが元の位置に残つてゐる。その方角を考えながら、昔の木造教室の位置を思ふ外はない。一棟は平家で西方にあり、二階だての校舎は北東にあつた。校舎のめぐりは一面の草原であつた。それも茅すすぎの類ではない。クローバーに似た馬ごやしてある。(首蓨というのであらう。)柔い緑の敷物の中に小さな白い花が散在してゐた。休みの時間ごとに友人たちとねそべつたり、日向ぼっこをしたりした。吉田の大根畑をつぶしたので、あんな草が榮えたのであらう。一級上の詩人、澤村胡夷氏は話上手の人であつた。

私が入學したのが四十三年九月。一級上に羽溪、千葉という第一回生があつた。社會學は此年からの開講で擔當は米田庄太郎先生(當時は講師)。社會學概論として、講ぜられたのは社會學史である。それだけを必修科目としてきたわけである。哲學科の入學生は本科二十七名選科十名合計三十七名であつたが、教室は決して淋しいものではなかつた。外に講讀としてタルドの社會法則(佛文)が用いられたが、この方は出席者四五名、私以外は先輩であり、中に東大出身の小林照朗氏もあつた。私一人は米田博士の宅に於て毎週土曜にギディングスの『社會學原理』を讀まされたが、これが準教科書であつたと思ふ。

二回生のときには、社會學概論の講義がはじまつた。特殊講義は前年度の社會學史の續きである。後者はこの年からコント、ミルあたりに及び、それから後、幾年かに亘つて現代に到達した。概論の組織は此講義に於てはじめて展開せられ、年々改訂せられたわけである。後年『日本社會學院年報』に寄せられた社會學體系に關する論文は此概論講義の中の一節に當るものであろう。米田博士の著書は極めて多いが、大抵特殊分野に關するものであり、其體系の一部が公刊せられたのは、これだけであらう。ただ其講義案のノートが京大米田文庫の中に遺されていることは學界の至福である。

私は卒業論文として『分業論』を執筆した。これが縮約を大正二年に公刊した。當年のこととしては、學會と同窓の事を思い出す。二回生のときに、社會學會をはじめて、時々開いた。學内では谷本富博士、學外では日出新聞主筆大道和一氏なども出席もし講演もされていた。米田博士の講義内容の魅力によるのか他の學科の専攻者の出席も多かつた。この方は後年に至るまで續いて、心理の黒田源次、倫理の錦田義富の諸氏も熱心なる討論參加者であつた。同窓としては、一年下に水野和一、二年下に小林良輔の二氏があり、後は専攻學生のある年無い年まちまちであつたと思う。銅直勇（成城大學）、圓谷弘（日本大學）、山口正（大阪市）、黒川寛（醫博）などの諸氏とは親しくしていた。中にも小林氏は優秀の學生、卒業論文は優生學に關するもの。高文に通つて財界官界に入つたが、早く世を去つた。其後の卒業生については、間もなく臼井博士が入學されているので、大正十年以後のことは同博士が詳しい。

私が『社會學原理』を書いたのは、大正五六年であつた。その少し前までは米田博士上の講義、といつても社會學史の延長を引きつづき書いていた。その間に地理學的社會學、生物學的社會學、唯物史觀などいろいろの學派に亘り、終りに心理學的社會學という主流に及んだと思う。これの中心をなすものとしてタルド、ジンメルが考えられ、これに對立するものとしてデュルケムを重視せられた。結局タルド、デュルケム、ジンメルを現代社會學の絶

頂にある三巨峯として見るのが米田博士終生一貫しての評價であつたと思う。後年にはパレット、ウエエバアを講義せられたけれども、如上の立場からいえばこの傍流として扱われたのではなからうか。私共が最も屢々聞き得たのは、タルト、ギディングスの名であつた。デュルクムには個人的接觸がなかつたらしい。テンニイスの本をあげられたのは割合に後のことであつた。ただ博士ゆえに、ウエエバアやパレットに關する知識としても、其全著作をよんでから批評にまで眼を通すという徹底振りであつた。

大正二三年の頃であつたと思う。文學部勤務であつた千葉、植田二氏と誥し合つて哲學科卒業生の研究會を思ひ立つた。會名は月曜會。これが原動力となつて『哲學研究』が生れた。私は經濟學部講師となつてから縁が薄くなつた。大正八年廣島に去つてから愈々疎遠になつたが終戦前に兩三回思ひ出して會合したこともある。若いころでは山内、久松兩教授位までのところ。今は無期休會の形である。私の送別の會が今の樂友會館の北隣、當時のクラブに開かれた時には理學部の園正造、史學科の西田直二郎諸氏も見えた。廣島に二三年休養して來いというのが藤井健治郎博士の厚意の言葉であつたが運命は知りがたく、經濟學の畑に入りこんだ形になつてしまつた。ただ曰井博士の懇情によつて、同科の諸氏と格別の親交を重ねていることを深く幸福としている。

おもい出

春日政治

「おもい出」と言つても、已に半世紀、明治の昔になるから、大分おぼろげになつて來て、おもい出せない所が多い。私の京都大學文學部へ入學したのは、明治四十一年九月であつて、文學部創設三年目、文學科の初めて置か

れた時であつた。已に哲學科や史學科に先輩の學生諸兄がいて、我等は、その弟分として後輩氣分で這入つていつた。しかし思えばこの時が所期の文科大學が完成した時であり、従つて京都大學の綜合的體制も亦一應整備された時であつた。

さてそこに入つた文學科の學生は、選科を合せて二十名程であつて、うち國語國文のものは僅かに六名であつたと記憶する。その中自分は所謂傍系の出身であつて、殊に四年ばかり教員を勤めて來たから、恐らく最年長者であつたろう。同期に入つた哲學の富田君や史學の有高君などからは、常に「御老體」と呼ばれた程であつた。この時の入學は、諸種の學校の出身者に開放されたので、自然高年輩の人もあつたが、自分もその一人で定めて異色な存在であつたろうと思う。人數の少いことは自ら親近し易く、又講義を聞くことも專攻の別なく一しよになり勝ちであつたので、それら若々しい豫科系の人々にまじつて、再び學生生活にかえつた自分は、氣分をすつかり若返らせて、これら良き學友の爲に、常に楽しく過すことが出來た。早くから文科のものが一しよになつて回覽誌を作り、互に批評し合つたことなどはなかなか活動的でもあつた。國文の島田（後の有川）、支文の青木、獨文の年岡（後の尾島）などがよく書いたし、英文の服部（後の安井）という歌人もあり、同加藤という小説かきもいた。

專攻の國語國文は、初めに吉澤先生の日本文章語史、幸田先生の日本文脈論などいずれも珍しい講義から這入つた。吉澤先生の書かれた板書の立派なことは、今も見えるような私の第一印象であつた。露伴先生の起用は新設文科の特色として呼物であつたが、一年でやめられたのには少からず失望した。學生の代表が上京して留任を乞うたことなどもあつた。やがて四十二年の終に、新たに藤井（乙）先生が見え、近世文學史や連歌俳諧史などを講じていただくようになつて、我が國文は安定したのである。一方新村先生が四十二年から、言語學概論と共に、國語研究憲法という題の下に、我等の研究に資料や方法の新しいものを授けていただいた。當時の課目は專攻學科以外に、正副の講義があつて、狩野・鈴木兩先生の支那文學、徐先生の支那語、上田・島兩先生の英文學、藤代・成瀬・シ

フー諸先生の獨文學、松本（亦）先生の心理學、桑木先生の哲學、さては榊先生の梵文學史、濱田先生の日本美術史などまで、今も懐かしくそれらのノートが残っている。ここ新設文科に集まつた教授は皆新進氣鋭の學者、而も留學から歸朝し立ての方々であつて、學内がすべて潑刺としていたし、學生等も自然一種の意氣、ごみをもつていた。殊に自分に何よりの幸であつたことは、かつて東京に於て教を受けた先生が數名來られたので、最初から科に對して或親しみのもたれたことであつた。

思ふに京都という地そのものが亦よかつた。文科には早く學友會があつて、教授學生の懇親と共によく諸方の見學を行つた。大和巡り、竹生島詣で、天の橋立行きなど、今も記憶に残っているが、殊に御所拜觀といつて、舊皇居・仙洞から、桂離宮・修學院・二條城などの巡覽が出來たことは、その自然や行事などと共に、京都の古典的風趣を滿喫することが出來て、我々專攻學科の爲にもこの上ない環境であつたことを思う。自分は三年間田中村の地蔵前という所に農家の座敷を借りていたが、百萬遍から北へ行く路の兩側はまだ田や畑で人家も飛び／＼にしかなく、百萬遍裏には行々子の鳴くのが聞けたし、途中に水車屋のあつたことが思い浮んで來る。村の西は竹林があつて、そこに何庵とかいう小さい尼寺があつて、朝夕その鐘の音を聞いたものだが、その頃藤代先生がその庵近くに住まわれたことがあつた。想えばあの頃がこいしい。

追懷すると五十年の昔、茫々夢の如きものが多い。恩師の方々も多くは物故され、只新村先生・鈴木先生にお目にかかることが出來る位に止まる。去る五月中旬久しぶりに新村先生をお訪ねするや、談偶々往時の事に及んだが先生にはよく當時の學生どもの上を記憶され、私などの忘れていたことまでも、あれこれ承わつて、誠に感慨無量であつた。同期の學友これ亦亡きが多く、在る人にも年と共に疎くなつて、只青木正兒君に時々會う縁がある位の事である。福岡に於ける以文會員でも、明治四十四年卒業のものが最古で、哲學の藤井種太郎、同じく平島圓琳兩氏と愚老だけである。只百に近い若き同窓がこの地方に職に従うを見る時、京都文科の五十年の發展の大きさを思

うものである。(昭和三一、六、一五稿)

夜の圖書館

青 木 正 兒

明治四十一年文學科が置かれた最初に私は入學した。諸先生の専門的講義を拜聴して、急に自分も大人になつたような氣がして、大いに意氣込んで圖書館にも出入りした。其の始めて夜の閲覽室を覗いて見た折の印象は、今もまざまざと頭に残つている。晝間と違つて夜は閲覽者も少く、ひっそりとして不氣味なほど薄暗い。仰ぎ見れば机の眞上に天井から吊された電燈の列は、吊棚のような扉で下から遮蔽してある。ははあ、まだ時間が早いので扉を開けないのだな、と獨り合點してカードを繰り、書籍を借出して席に就いた。屢々天井を仰ぎ、何時になつたらあの扉は開くのだらうと、どうも氣になつて讀書に身が入らない。遂に閉館の時刻になつても電燈の扉は開かなかつた。後に聞くところに據ると、元來是は工科某先生の設計で、光が直射すると眼に良くないので、わざわざ遮蔽してあるのだとのであつた。それにしても陰氣で性來臆病な私には、怪物でも出そうに思えて、なんだか不安であつた。にもかかわらず、私は夜の圖書館に通う便宜の爲、寄宿舎に入ろうとして失敗した。

それは私の思い付ではなく、五高から一緒に來た友に誘われたのである。彼は云う「夜圖書館に行くのに便利だぜ」と。なるほど妙案だと同意して、私も一緒に入舎を願ひ出した。やがて通知があつて、何日何時に面接するから寄宿舎に來いと云う。其頃の寄宿舎は三高の舊物を襲用したものらしく、構内の百萬遍寄りに在つた。指定の日時に出かけて控室に待つたが、約束した友は來ない。不安の中に私の番になつて一室に召ひ出された。正面に學生監

を中央にして、役員とおぼしき學生が十數人二列に坐つてゐる。先ず第一問は入舎の目的である。私は躊躇することなく「夜間圖書館に通う便宜の爲に」と答えた。すると或者は云う「それだけでは吾が寮の貴重なる椅子は與えられない」と。或者は云う「寄宿舎では勉強は出来ませんよ」と。或者は云う「入舎後の生活に對する抱負は如何」と。學生監は私の專攻學科を問うた後で、「君は漢文をやるのなら何か意見が有るだろう」と云つた。學生監はたしか東大の漢文專攻の選科出身と聞き及んだが、彼は昔日大言壯語を事とした漢學書生の遺風の猶お存するを確信していたものらしい。私は馬鹿らしくて返事も出来ず、ただ黙々として苦笑するのみであつた。退出すると再び控室に友を捜したが、其の影は見出されなかつた。ああ、こんな所とは知らず、友に誘われて、のこのこ出て來た自分の迂濶を悔いた。後に友を詰れば、「いや、僕は人から様子を聞いたので、とても駄目だと思つて行かなかつた」と、平然として答える。腹は立つが仕方がない。咄々怪事。怪物はあの薄暗い夜の閲覧室には出ずして、この古ぼけた寄宿舎に巢くうていたのである。

そのころの思い出

内 田 寛 一

○もはや四十年あまりもたつた。

明治四十三年入學のころは、今の大學本部の處に理科大學の赤煉瓦建があつて、その後には木造の法科があり、またその後にも木造の文科の本部と教室とを含む建物があり、その東北に木造二階建の研究室があつた。ただ地理の研究室だけは、本部の東南、木造一棟一室が充ててあつた。

文科の北には空地を隔てて二階建の寄宿舎がいかめしい姿を見せて、故木下初代總長が力瘤を入れられたというにふさわしいものであった。

その後、理科の赤煉瓦建は焼けて、帝大本部がその跡に建てられ、寄宿舎は閉鎖され（やがて今の處に新築された）、陳列館ができた。陳列館は故小川琢治先生が地理學研究室で熱心に設計されたもので、そのころ京大切つて最も眼を惹く建物であつた。

○卒業して後分科大學が學部と改まり、文學部の建物も改築、擴張され、法學部も、それから分離された經濟學部も不燃質の建築となり、その他の學部の建物まではみ出してきて、いぜんの文科附近の閑靜な様相は一變して、わずかに陳列館尊攘堂の前の廣場が狭くはなつても、昔の面影を存しているだけである。

東方文化研究所も、農學部や理學部などと共に舊構外に陣取つて居り、もとの三高が教養部となつて、文科系の勢力範圍は一段と擴張されている。

○在學當時は文科は一ばんに學生が少く、その割に選科生は多かつた。史學科でも同様で、三年には有高・津田・中野、二年には岡崎・橘・楠田などの諸先輩があり、一年では河本・定兩君と筆者の外は選科の諸君であつた。

そのころは學年制であつた上に、共通の講義が多かつたので、同學年生は勿論、上級生とも教室でよく一緒になつていたので、教場では可なりに賑やかであつた。ところが講義ほどの先生方も早かつた。ノートがうまくとれないで、歌舞伎俳優數人の名前をのべつにノートに書いて、勉強振を装つたものもあるほどであつたから、筆者のノートは聴講後あちこちに轉々して、教場で顔は見せるが、手許には試験の眞前でなければ歸らなくて困つたことを今に記憶している。

地理學を専攻していても、國史・東洋史・西洋史なども概説の外、特殊講義の一部分まで、それぞれの専攻學生と同様に論文も書かされ、試験も課せられていた。それに隨意科があつた。講師濱田耕作先生の考古學、講師河合

弘民先生の朝鮮經濟史、法科教授神戸正雄先生の財政學、教授内田銀藏先生の統計研究などは、文科の教場や研究室で、醫科教授足立文太郎先生の人類學は醫科で、教授小川琢治先生の地質學は工科で聽講した。

「史學科の授業に差支なければ、他の分科大學の聽講は自由」という総合大學の利益は存分に受けられるようになっていた。法科で法學通論や經濟學や國際法などを聽講したのもそのおかげであつた。なお文科では公開連續の特別講義が夜間に開かれる時もあった。教授内藤湖南先生の支那論や清朝史や中國の書道畫道の講義、東大教授瀧先生の佛敎美術史の講義など、今も思出は多い。こんなことのために、朝八時から夜九時まで、食時を除いて十時間餘もベンを走らせることも少くなかつた。

○ただつ廣い地理學研究室では東北の隅に書棚があり、その南に小川先生のテーブルがあつた。書棚のそばには助手の山口學士の机があり、その横に廣い製圖用のテーブルがあつた。そこが入學當時からの親しい研究臺となつたのである。書棚の本は出し入れ自由、室には出入する學生も少く、靜寂で、いかにも大學生活にはふさわしい處であると思ふものである。

室内の空所には出土品が並べられて、考古學研究室の芽生が見られた。地理科の學生にも考古學に興味がそそられたのはそのためであつた。

○陳列館ができて史學科の研究室がそこにまとまり、圖書は各研究室にある外、書庫に集められて閱覽室が設けられ、一層勉強に都合がよくなつたが、午後五時で閉鎖される不便があつたので、その延長を原藤郎先生にお願いしたのがきっかけとなつたのか、やがて午後九時まではいられるようになってなうれしかつた。

○小川先生は講義の餘暇に、研究室でよく話しこまれた。そのお話の中に講義では聽けない先生の天外より落ちるような奇想が肝に銘するのであつた。地理科の講義は小川先生が大部分擔當されていたが、その外には廣島高師教授中目覺先生のラテン語のタンタスのゲルマニヤの講演や經濟地理の講義が隔週に開かれていた。石橋先生は在外

中で、先生の講義は卒業後に始まった。

小川先生の實地踏査は私の時から始まった。紀和旅行、二上山地方旅行、紀州旅行など、私一人隨行の光榮を得た。東京地學協會の小笠原旅行には助手として團長の小川先生に隨行した。卒業後大學院に一年、助手二年の間にも西都原旅行の外、九州四國の石佛旅行などにも一人隨行したが、最も肝銘の深かつたのは先生が行程を急がず、現地までできるだけ問題を解決せよとする觀察の仕方、未決の問題については夜中も熟慮されていることであつた。石佛旅行の折などは夜中一時間おき位に起されて、あれはどう思ふか、これはどう考へるかと思はれるのであつた。全く「寢食を忘れて」研鑽振を如實に示されたのである。

京大并に地理學研究室に對する感謝と歡喜とは私にとつて終生止むことはあるまい。

大正初年の文學部學生の想ひ出

須 田 國 太 郎

何分古いことで想ひ出にも不正確の點も多々あるうと思われませんが、詳しく調べ立てするより今尙腦裏に残つた印象の方が、生きているのではないかと敢て、筆を執つた次第です。先ず大正初年頃のことと御思召下さい。本館の時計臺は火災のため穴のあいたままでまだ再建に至らず、文學部、當時は文科といつていました。その教室、書庫その他皆木造で、大きい講義室は法科の方へゆく始末でした。教官達の部屋は夫々の書庫と隣り合つてゐることは今と同様乍ら専門違いの學生でもここへは自由に出入し、別にとがめられるようなことはなかつたのであります。ストーヴにあたり乍ら助手達と話し合ふのが非常な悦びでありました。書棚に並んだ書籍の表紙は冬にはこのスト

一ウの熱のため反り返つていました。文科が誕生したのは比較的新しかつたのですが、主要な書籍は先ず一應置かれてあり、今もその時のものが矢張り本體をなしているように思われます。教授方の意氣込みも大したもので氣鋭の碩學揃いというところでした。随分若かつたのでしよう。學生には年齢まちまちで随分年配のものがあり、退役陸軍大佐だの、もう入學以前に心理學の著書のあるなどというのがいました。一體に制服を着ているのは極めて少く羽織袴です。

先生は皆々大家であります、どうもその數に於て全講を充すわけにゆかず、當時まだ助教であつた西田幾多郎先生からは宗教學、心理學の普通講義をきくというあんはいです。特殊講義になると各分科の先生方は入り亂れて、それに當られるというわけです。私は美學美術史科なのですが、美術史の學問の教授はなく美學の深田先生がこれを兼ねられ、日本美術史は東京の瀧精一教授が夜間公開講義を以てこれを補するといふ具合です。哲學全般の當時の空氣は桑木嚴翼教授のカント派が大勢を支配するようでありました。然し、西田先生の特殊講義では、もう現象學派の研究が講義せられ、また先生自己の體系自覺に於ける直觀と反省を教科書として用いられたことがあります。それが隨所に訂正を加えられるので驚き敬服したものです。美學ではリップスの感情移入説の是非が大いに論議されたのです。その教授深田先生は稀にみる俊才でしたが、終生單行の著書をもたれませんでした。非常な語學の天才であり、大事をふまれ輕卒な著書など最もいましめられていました。五十一歳で他界され遂にこれを果されませんでしたのは残念の至りです。深田康算全集は、雜誌等に出された寄稿文などの集録ですが、これも先生の學殖の深さを知ることが出来ると思ひます。その他の諸學科にも傾學が雲集して文科の黃金時代でありました。然し學生は存外少數で僅か數人、時には只一人の學生のため特殊講義が續けられ、全く勿體ないといふも思つたことです。それだけに教授と學生との親しみも多く、學生にとつては全く幸福であり、かつ勉強家が輩出したのも當然であると云わねばなりません。

正月には、擔當の深田先生の私邸へ皆晚餐に御招待をうけました。一應は紋服を着用して列席です。前にも申し通り文科學生は和服が多かつたのですが、先生の方も西田先生の如き洋服姿は見たことはなく、その和服も木綿の紋付きに毛糸の長い紐、袴も初めは木綿でした。但し靴ばきで足元だけは洋装です。極めて質素を極めたものです。それに學校附近の散髪屋美留軒主人が先生は立派な鬚だからのぼしてはと度々すすめても、とうとうこれに應じなかつたという無精鬚がいつも延びていました。かと思ふと、朝永、深田先生などは獨乙仕立の颯爽たる最新洋装で現われるといつた具合でした。元日や卒業式には皆燕尾服で勳章を佩用、卒業式には名代の官が參列されるために陸軍の軍樂隊がやつてきました。式後その奏樂のうちにビールの乾杯等あり、一寸今からは想像もつかんことでした。豫餞會も各分科でもやりますが、文科全體のものを學生集會所で行い、餘興に先代茂山忠三郎の狂言や一流藝能人の所演をみることになつていたのです。

讀書會、講演會、研究會は毎月行われたのですが、初め公開でありましたが參集者少く各分科で夫々やることでした。只その機關雜誌が一つ「藝文」があつたのみです。これは中々内容の立派なもので、このような綜合雜誌は今日どこにも無いという出來榮えのものです。それが哲學研究が生れ、史林、その他の専門誌にわかれ遂に終刊となつたのは惜しいことでした。今尙そのバックナンバーを求めるものが絶えないのは當然であります。

今から思えば當時はいかにも悠々たるもののようにですが、決して象牙の塔などいうものに閉じこもらず大へんな抱負をもつて氣おつて學に熱中したので、教授達も講義を只繰返すのではなく自分も尙探究を止めぬ研究を發表するといふ意氣組を感じました。その意味では若く燃え上つていような當時が、忍ばれます。

私の大學回想

辰 馬 悅 藏

私どもが京都帝國大學文科大學の史學科に入學したのは大正四年の九月であつた。そんなに古いことも思われ
ないのに、はや半世紀に近い時の流れを經ている。

私は史學を志してその直前の三年を隣の三高ですごしたので京大殊にその文科には何かと親しき近しきを持つて
いたし、その上その頃の高校一部の卒業生ほどの帝大の文科へもすべて無試験であつたので今日のような入學受験
のくるしみもなめず、割合に心安く十三日の宣誓式には新しい角帽を手に欣然と列席することが出來た。然し荒木
總長の訓示を受け、松本學長の前で宣誓簿に署名したときには、さすがに自分も最高學府の學生となつたのだと
一種の感激を抱くのを感じ得なかつた。「文學部三十周年史」によると、同時に、入學したのは文科全體を通じて
本科四十六名、選科十六名、委託生二名となつているが、その内史學科を志望したのは十名内外で、勿論定員には
満たなかつた。

史學科は前年の大正三年に完成したばかりの眞新しい當時學内第一の善善な建築といわれた陳列館（増築後の今
の南半分）を獨占し、すぐれた設備のもと、われわれ學生はその内の教室で講義をきき閱覽室で讀書し陳列室で列
品に接し得たわけで、誠に恵まれたことであつた。當時はまだ考古學專攻という科目がなかつたので、私は一回生
としての普通講義を終えて二回生となつたとき、規定により正式に國史專攻と決めてその特殊講義を、次いで三回
生となつては演習をそれぞれ必修科目として履修した。その頃から文科は所謂學年制度ではなく課目制度で在學中

途の落第はなかつた。あの時分の京大文科は創設當初の潑刺たる新興の意氣なお旺んなる上、施設も漸く充實し日に月に隆盛に赴きつつあつた際で、大家新進肩をならべて教授陣に立ち研究と指導とにあたつておられた。私が在學三年の間に親しく教を受けたのは國史、内田銀藏、三浦周行、喜田貞吉、西田直二郎、朝鮮史、今西龍、東洋史桑原隲藏、内藤虎次郎、矢野仁一、富岡謙藏、史學研究法と西洋史、原勝郎、同じく西洋史、坂口昂、地理學、小川琢治、石橋五郎、考古學、濱田耕作、人類學、足立文太郎、言語學、新村出などの諸先生であつた。お世話になつた期間と度合とは一様ではないが、いずれも懐しい思い出のある方ばかりである。四十餘年の歲月は二三の方を除きその凡てを白玉樓中に拉し去つてしまつたけれども、當時のことを回想すると數多くの追憶が今もお眼底を去來するのを覺えるのである。愚かな私は以上の如き立派な諸先生から折角教えていただいたおき乍ら講義の内容などは申譯けなくも殆ど忘却してしまつたが、その風貌や講義振りなどは案外によく覚えてゐる。前記の如く學生は極めて少數であつたので、誰しも先生方に何かによらず知りぬかれて誠に以て都合のよくない場合も少くはなかつたけれども、その反面に親炙の機會も多く各自懇切な指導を受け裨益啓發するところ甚だ多かつた。級友同士が年齢上相當開きがあつたに係らずお互にすべて親しく出來たことと共に、何より幸だつたといわなければならぬ。教室での受業以外、時時の講演會や展覽會乃至讀史會の例會、大會、旅行なども種々の意味で有益であつた。また洛中洛外はもとより大和河内や近江路などに、休日なんかにも同學と見學に出掛けたことも今は楽しい記憶となつてゐる。

あの頃の京都はいろいろの點で近代化しつつも、尙古き面影を多分に残しておつた。例えば大學附近の様子にしても、電車も南は熊野神社前、西は出町までしかなく、本部のある一郭の裏の通りは今よりズツと狭く古めかしい家並がつづいていたし、西の通りは更に細くて淋しかった。又東北の方に當る今の農學部や理學部のある一帯の地は、殆ど田畑で散歩によいところであつた。北白川、田中や少しはなれた岡崎、黒谷、下鴨の邊りはまだまだ田舎

らしさが漂つていた。學友の多くはそんなところの素人下宿や寺などから通學しておつたのである。

何しろ世情もユツタリとし物價も安く、今日にくらべると兎も角も呑氣な時勢であつた。私如きも臨時格別の出費の際は別として、月たしか二十五圓か三十圓ずつを家から貰つて、九圓の食費と三圓の室代の他に光熱費を拂い日用品を求め、ときどきはスキヤコンパをしたり京極へ出掛けたりなどした上、なお参考書位は買えたものだけだつた。

大正七年七月、文科第十回の卒業生本科三十八名、選科十名、委託生一名の内に、私ども國史五名、西洋史二名地理二名の計九名が史學科を巢立つた。そして大した苦勞もなく己がじし向うところに然るべく身を落つけた。私は卒業後直ちに大學院に入れていただいたが、徒らにその席を汚すのみで何らなすところもなく、大學の寛容にあまえること多年に及んだのは今に慙愧に耐えぬところである。

卒業式に於ける御名代皇族の台臨、優等生への銀時計の下賜などの恒例が私どものときを最後としてなくなつたり、その翌年各分科大學の名も學部と改つたなどは、何かしら新しいものの胎動を暗示しているような氣がした。その後文學部の施設は愈充實し聲價は益高く人學生の數も激増したが、年を逐うて世は慌しくなり、凡そ二十年の後は遂に國を擧げて疾風狂瀾の時代に突入したのであつた。終戦十年後の今日、母校の様子も定めて大に變つてゐることだろう。

古い追憶は多くは美しい且楽しいものとして残る。私の古い大學の回想もその例外ではあり得ない。事實苦しいことや嫌なこと、つまらぬことも數多くあつたには違いない。そして又昔に比べるとこの新しい時代の今日の母校の學生生活は、ズツとより有意義で且つ楽しいものであらうと思われる。それにしても唯ハッキリといえることは私の貧弱な過去の生涯の内にあつてあの頃の三ケ年は尤も楽しい時期の一であつたということである。今の若い人たちから見れば、いかにも落莫たる青春の一齣であつたかも知れないけれども。

憶 び 出 嘶

橋 本 循

わたくしどもが當時の京都帝國大學文科大學に入學したのは、大正三年九月のことですから、四十三四年もの遠い昔になります。當時のことを、かれこれ憶い出して見ようとしても、茫乎として夢の如くであります。

專攻の支那文學關係の先生としては、狩野君山、高瀬惺軒、鈴木豹軒、富岡桃華、西村碩園、それに支那語の徐東泰の諸先生が居られました。今は鈴木先生が嬰鑠として御元氣で居られる外は、すべて鬼籍に入られ、うたた流水の感に堪えません。

狩野先生からは、日知録の演習、清朝文學の講義、元曲の講讀、又、一時は作詩文の授業を受けました。先生は學問の研究に關しては、極めて嚴格な方で、いわゆる學問的良心の旺盛な人でした。従つて先生の授業を受けるには、充分な下調べや豫習をして置かねばなりません。そうした準備もせずに授業に列した時には、いつ何時、名指されるか分りませんので、戦々兢兢薄氷を履むの思いで居るといふ風でありました。故事出典のことから、虚字の幹旋に至るまで、ともかく何とか一應の受け答えのできるようにして置かねばなりません。そのために往々にして一週間の大部分の時間を費すこともありました。いわゆる怖い先生でありましたが、またわれわれの受けた啓發は計り知るべからざる大なるものがありました。どうか學問の道を知ることができたのは先生のお蔭であります。清朝文學を講義せられる時には、いつも作家の文章を唐紙の全紙に幾枚も、墨痕淋漓と揮毫せられたものを携え來られます。それを黒板に貼りつけて、一々文章の妙所急所を指示して説明せられるのが常でありました。

西村先生は當時大阪朝日新聞の編輯を主宰していられました。傍ら一週一日、講義のために京都へ出て來られたのです。むかし「層屋の籠」という小説を書かれ、「福島中佐單騎遠征記」という西比利亞橫斷記を書かれ、「南曲琵琶記」の本文を朝日紙上に紹介せられた先生であることを知っていたわれわれは、先生の風貌に接するのは始めてでありました。どんな先生かと思つていました。たしか最初の時間には、狩野先生と一緒に教室に來られて紹介して下さつたと記憶しています。先生は六尺豊かな偉丈夫で、まことに明朗闊達の人でありました。それと共に忠信篤敬の儒者的な人であり、熱烈な忠君愛國の精神を抱懷して居られました。先生の講席に列つて、われわれは少からざる感化を受けたものであります。われわれは韓退之の「師説」に謂う所を、そのまま眞面目に何の疑惑もなく受け入れていましたので、師は道の存するところと固く信じていました。もちろん、今日も左様に存じています。古文辭類纂の講讀、漢文總説とか辭章論略の講義、それに作詩文の授業をして戴いたと記憶します。先生が漢文を讀まれる時は、音吐朗暢として讀まれるのです。抑揚頓挫につれて訴うるが如く激するが如く泣くが如く怨むが如く、半ば嗚れた聲で讀み上げられる。こういう風に朗讀してこそ、初めて漢文獨特の妙味が解るように思われました。そこで次ぎの番は學生です。勿論抑揚をつけて朗讀をせねばならぬのです。が今日から考えて見れば、まだ二十三四歳の若者であり、同時に聴講する仲間も兩三人という寥々たるものであり、それに何とも慣れぬこととて先生のように藝術的には乗りません。時に頓狂な節廻しをしたりするので、可笑しくて仕方がない。遂に辛抱しきれなくなつて、笑いこけるといふことになります。すると先生は不機嫌な顔をせられ、老眼鏡越しに、ぎろりと睨まれ、「何がおかしい」とお叱りを受けることもあつた。今にして考えて見ると、ああいう風に朗讀してこそ文章の妙趣もわかり、文字驅使の法もおのづから體得することができるのではないかと思ひます。それが癖になつたのか、私は今日でも黙つて書物を見ているのは、何だか頼りなく思ふので、時々聲をはり上げて讀むことにしています。先生は漢文を作られるのが實に疾い。黒板に二枚や三枚の文章は立ちどころに書いて見せて下さつたもので

す。作詩文と云つても主として文を作ることを指導していただきました。新井白石の俳優考などを漢文に直したり、又課題を與えられたりしました。特に漢文總説や辭章論略の講義は、漢文で筆記せねばならぬことになつて居り、時々ノートを提出して先生の檢閲を受けることになつていました。嚴格な先生であつたが、また慈愛溢れる方であつた。まことに昔懐しい限りであります。或る時先生が語られました。「常陸丸」や「臺灣征伐」の琵琶歌は俺が作つたのだが、今日多くの人は作者が誰であるかを知らない。しかし作者が不明になつた時こそ、歌は永久に傳わるものであるという意味のことでした。一方先生は桐城派の古文を極力推賞せられ、又みずからも義理、考据、詞章の三原則を具えた文章の大手筆であられました。軟文學も硬文學も共に達人であられました。

あの頃は市電は熊野神社までしかありませんでした。わたくし共は始業時間が迫ると、よく熊野神社から學校まで走り續けたものでした。小倉の袴に下駄履きて重い風呂敷包みをかかえて、よくも走つたものだと、今日は腰が痛い、脚がだるいと知らぬ間に年は寄つたが、それでも若かりし頃もあつたのかなアと嘆息を長くしています。

今の本部のあるあたりと思ひますが、東西に長い木造の二階建の校舎がありました。たしか淺黄色のペンキも剥げて、あまり美しい建物ではなかつたようです。中央のところに南北からそれぞれ入口があり、東の半部は文科大學、西の半部が法科大學で、南の入口には左右に一枚ずつ看板が掛けてありました。東の半部の文科の階下が事務室、學長室、教官室という順序で、東へ並んでいました。階上は教室で、他にも一二の大教室はあつたが、大體この階上の教室で、われわれは諸先生から教育を受けたのであります。文科の東端から北に向う廊下があり、それが研究室の校舎の西端に繋がつていました。これも東西に長い木造の二階建で、上と下とに研究室が並んでいました。階上の支那文學と國文學は教授の室や書庫は別々であつたが、學生の研究室は共同でありました。尤も當時は學生の教も少く、別に不便や不自由を感じたことはありません。お蔭で當時の國文の學生諸君にも親しくなり、今日でも猶お舊交をあたためています。今はどうか知りませんが、當時は支那文學の學生も多く國文の授業を受け、國文

の學生も漢文の授業に出ました。こういうことが、いつまでも大に裨益するところがあつたと信じています。當時の學生には相當の年輩の人がいました。地理の藤田元春君も同じ頃の文科の學生でありました。堂々たる體格で背廣を着て廊下を歩いて来る。これは何れ教授先生であろうと恭しくお辭儀をする。他日某先生の休講の時などに、皆が芝生の上で雑談をしていると、あの教授先生も一緒に出て来て雑談の仲間に入る。さては教授先生では無かつたのかと大に笑つたこともありました。ともかく文科と云つても學生數が少かつたので、直ぐ顔見知りとなり、専攻は別でも、何時とはなしに親しい間柄となつたものであります。

そ の 頃

安 藤 俊 雄

私の入學は大正五年九月、松本文三郎先生が文科大学長の時であつた。その頃學舎の外観は頗るみすばらしく、もと三高本館の燒跡に立つバラック造りの法科大学の講義室の北側にペンキ塗り東西に長い木造二階建二棟と附屬平屋建の心理實驗室が田舎の中學校然とあり、別に今の陳列館の半煉瓦建の部分が、文科大学校舎の全體であつた。併しこの貧弱な外容に引きかえ、そこに溢れる清新潑刺の氣に充つる教授陣容は哲、史、文三學科にわたり、東大文科大学の官僚的傳統學風に對抗して異彩を放つていたことは、藝文、哲學研究、その頃創刊の史林の前身、史學研究會講演集所載の諸論文、隨筆が、それを有力に物語つてゐる。澤柳騷動、谷本博士退職事件の後間もない頃とて、法文兩分科大学に自主自由の氣概が充ちて、總長荒木寅三郎先生の巨大な禿頭が學會講演の席上居睡りされるそのうちに、全學統御のお疲れを思わせていた。又かような嚴しい雰圍氣が反映してか、文科の事務室にも寡黙で

硬骨の伊津野さんを筆頭に、負けん氣強い闘士田鐵さんが、若手の教官など眼中になく、當時新入りの吉田良馬さんは袴の裾を捲くし上げて文字通り奔走の姿であつた。

その頃の學生數も洵に少數で總勢約四十内外だつたるうか。しかも高等學校大學豫科から眞直ぐにきた「三四郎」然たる青年は僅少で、その他高師出身教職から志を立てて馳せ参じた人が多く陸大出の豫備將校、時には元將佐官級軍人も聽講していた。年輩者の多いせいか、青年學生も金ボタン制服よりも和裝袴穿きの姿が大部分でインキ壺を袴の紐に釣り下げた八字髭の老壯書生の中に青二歳が筆記のペンを走らせていた。世は第一次世界大戦の最中で中立國同様の日本社會は戦争産業ブームの大小成金横行、物價狂騰の相をみせた頃とて、親がかりの青年學生は別として、中年立志傳組は年來の稼ぎで用意した學費豫算が狂うて、妻子を郷里に送り返えし、世智辛い孤獨の生活苦を訴えていた仁が多かつた。學生數の少い文科であるから、各専攻科では、學生數よりも教官側の數が多いところも珍らしくなく、時には學生の無い學年すらもあつた。従つて學生個人の研究内容はもとより、性格、勤惰の狀態、一身上の惱みまでも親近の指導教授はもとより、文科一般に略ぼ知られていた。學生が所屬研究室以外の諸先生にも親しみ、私宅をも訪れて教をうける機會が多くあつて、文科全體一家族の雰圍氣に充ちた潤いのある學園生活に恵まれていた。

史學科學生にとつて陳列館地下室の爐邊は正規の講義演習、研究の外にある滋味溢れた教養場をなしていた。こゝは小使部屋の一隅、便所や下駄箱に隣る湯沸し場で、天井の低い小窓からの光線乏しい薄暗い土間であつた。釜から立騰る湯氣に眼鏡の曇る冬の日、午食の濟んだひと時、或は冷い霜夜、疲れを休める助手副手や學生の溜りをなした。講壇上謹嚴な先方も紋付羽織袴姿で、爐を圍む車座の仲間に入られた。他愛もない漫談や諧謔皮肉まじりの批評警句で鋭い政治社會批判が出る間に、研究調査發掘旅行先々の土産話が豊富に持出され、固苦しい報告でない珍談、笑話に近いゴシップが談られ、時には學會誌上發表される論文、講演で取扱われた學説、史料、報告に

就いて論評が飛出し、討論が始まる。これが講義や講演演習時の窮屈さを離れた気分は、われわれ若冠の學徒の情熱を沸かせ、胸中の琴線に觸れるものがあつた。小倉袴に木綿紋付羽織で明治書生然たる喜田貞吉先生、今西龍先生の姿は今に彷彿とする。喜田先生の法隆寺再建論、内藤湖南先生の邪馬台論などは、この地下室壚邊で拜聴したもので、内田先生のシラ鳥ゴールス、桑原先生の貴山城論と共に、恩師の面影が躍如として、それぞれ特徴ある音聲と共に眼耳の奥底にのこる。板書の文字をもう一度一字宛白墨で押して確められた上で口を開かれる慎重な内田銀藏先生が講義の始終時を超越されたことは、湖南先生と同じく學生を惱ました。謹嚴規張面の坂口先生、青天霹靂の叱責で知られた原勝郎先生、博引旁證の揚句、紙面一杯に書き詰めたノートを頭上高く差し上げられ『林則徐は孔明以來の第一者』と叱咤された矢野仁一先生、學生の眼の届かぬ教卓面に解説圖を描きつつフォーリング・ムーンの理論を説いて學生を烟に巻く小川琢治先生、いずれも忘れ得ぬ諸教授のスナップとなつている。研究室で一枚の廣さの机を常に獨占し自由に参考書を積み上げた中で卒業論文をつくり得た程におお様な當時の陳列館閱覽室にて、まことに恵まれた學生生活を送り得たわが身の幸福を想わずにいられない。

大正中期のころ

山 本 修 二

私が英文科に入學したのは大正五年九月のことで、その二た月前の七月には上田敏先生がなくなられ、そのためクラーク先生と、當時アメリカに留學中の厨川先生とが、後任にお就きになり、それと前からの島先生とに英文學を教えていただいたが、この御三方は、矢野禾積、石田幸太郎兩氏とともに、私は三高時代から英語を習つてい

たために、安心のようでもあるが、一方ごまかしが利かないので都合の悪い點もあつた。

當時の英文科には、それでも一學年に六七人は在籍していたのであろうが、ドイツ文學などは、三四生は一人もいず、二回生に一人、一回生に一人という時代もあつた。その時の藤代先生の二回生へのお講義は「寫實劇沿革」という結構なもので、たつた一人のK君に聞かせておくのはもつたないと思つて、われわれ英文學の連中が二三人で聴講していた。ところで肝じんのK君が缺席してわれわれ聴講生だけという場合もあつた。

そんな時など物がたい藤代先生は、われわれにむかつて、今日はどうしましょうか、とお尋ねになるのだが、ぜひやつて下さいとお願ひして、お講義をしていただいて、そのノートをK君に逆に貸してあげるといふ滑稽もあつた。このお講義はレッスングの市民悲劇に始まつてクライストに終るのだが、モリエール劇との比較があつたり、精神分析的な研究法を示されたり、今から見ても思ひきつて新らしいものであつた。

これだけの御研究が御著書として傳わらないのは何としても残念だが、どうした譯か、當時の私たちの先生方は著書をお出しにならなかつた。本を書くだけの暇があれば、もつとよい講義をしてやろうというようなお氣持が、どこかにあつたのかもしれないと思う。だから新村先生だつて、當時はまだ絶版のままの『南蠻記』一冊だつたように思うし、西田幾多郎先生が『善の研究』だけ、藤井乙男先生だつて『諺の研究』一冊だつたように思う。

妙なことを思い出したが、當時の文學部の試験といへば甚だノンビリしたもので、ノートや参考書を持參しても構わないということで、中には試験問題が出てから、圖書館や研究室へ借りだしに出かけたものもいたし、又は兩手で持ち切れないほどの参考書を持ちこんで、口のわるい厨川先生から「試験場と古本屋を間違つては困るね」と皮肉を言われたものもいた。語學の時間以外は、監督者などどこにもいず、時間といへば事務所のひける午後五時までに出席せよかつた。

中には嬉しがつて菓子を持ちこんだものもいたが、これはもとより例外であつた。しかし正午ともなれば、やは

り、晝飯をたべる必要があり、皆で相談して、當時三高の東にあつた學生食堂のいずれかへ出かけて行つた。こうなると話は自然と試験問題のことに及び、成龍軒の二階で、同級の野淵昶君と、近松とシェークスピアとの性格描寫のことについて、いわゆる口角泡を飛ばして論じあつたことがあるが、どの先生の試験であつたかは忘れてしまつた。

前にも言つたとおり、學生の数が少なかつたから、君臣水魚とまではゆかないとしても、先生との關係はかなり密接なものがあり、學生集會所で行われる卒業生の豫餞會は、先生も學生も一緒になつて飲みきれないほどのお酒が出たし、その上にこれも文學部全體の催しで一年一度の修學旅行が和歌浦で行われた時の幹事になられた内田銀藏先生など、根が謹嚴な御性格の行き届いた御接待には、學生一同が恐縮した次第であつた。

しかし何といつても一番お世話をかけたのは厨川先生とクラーク先生にちがひなかつた。厨川先生がアメリカから歸られた年の最初のお講義はたしか文學概論とラテン語であつた。當時は西洋古典文學の講座がなかつたために、文學部の先生方が交る交るラテン語を擔當されたが、厨川先生のお仕込は例のとおり嚴しいので、前年のお優しかつた米田庄太郎先生の時に合格しておかなかつた事を私はつくづく後悔した。

足が御不自由であつたクラーク先生はいつも人力車で登校されたが、その間もお好きな讀書がやめられず、いつでも何十冊の本が車の上に積んであつた。先生がお歸りになるまで校庭で欠伸していた車夫君の話では、クラーク先生のたつた一つの道樂というのが、二週間に一度だけ、當時京都驛の構内にあつたお氣に入りの理髮店へ行き、歸りに二階のレストランで食事をとられるだけだということであつた。

どれもこれも大正中期の今は色あせた、しかしいつまでもなつかしい文學部の風景である。

私の在學時代の想出

大 脇 義 一

私が文學部に入學したのは大正六年九月でありまして九年七月に卒業、それから大學院に入學、十二年三月まで前後七年間在學していました。入學した時には野上先生はこげ茶色の服に頭髮を美しく分けられた洋行歸りのフランス風の少壯助教教授であられ、普通講義にはいつも圖表と器械を、時には幻燈を用いられ、助手檜崎さんの補助でデモンストラチオンをされました。私は一番前の席に居たせいがこの實驗供覧によく引き出されたものです。その野上先生の方が若々しくて檜崎助手の方が髪が薄くてどう見ても十歳近く歳上だと皆は思っていました。檜崎さんは白ねずみの學習や、知能検査などに熱中していられたようです。特殊講義は感情の心理という斬新な講義でヴントとシュトゥンプの對立やリボーの學説を講ぜられました。その後の學年には精神分析學、動物心理學、青年心理學などを聴講しました。演習はリボーの「感情心理學の諸問題」で檜崎助手、深田武、岩井勝二郎、福富一郎の諸先輩の末席をけがしてフランス語の下調べに時を移したものです。次の學年には、ビネーの *Les idées modernes sur les enfants* を、三年にはスタンレー・ホルルの「青年期」を、私の大學院の頃にはジェームスの「宗教經驗の諸相」の大冊を三ヶ年連續用いられ、讀了しました。千葉先生は五分刈り頭でねずみ色の服に黒のネクタイ、見るからに地味で質實、エネルギー的な方で講師として「心理學の對象論」と題して意識についての多數の心理學者の見地を解説し批判されました。吾々學生にとつては相當に難解であつた上、早いのでノートをとるのに誰でも骨が折れました。演習はプレントナーの「經驗的立場からの心理學」でしたが哲學の濱田與助君や三木清君も出て

いました。翌年にはヒュームの“Human Nature”でありました。實習も千葉先生の擔當で教育學專攻の學生と合せて四人ほど出席しました。岩井さんが副手として器械器具の實驗準備に當られます。千葉先生は私の卒業した時に助教授に任ぜられ、文部省在外研究員として渡歐されました。そして在外中に、新設された東北大學法文學部の教授に轉任されることになりました。

岩井さんの名前は入學する前から知っていました。それは卒業式に成績拔群で恩賜の銀時計を授與された人として新聞に寫眞入りで出ていたからであります。卒論は精神物理學の研究です。岩井さんは丸刈りの大きい頭で和服に袴を着用、いつも本やノートを二三冊懷中して歩かれ、ふところはいつも膨らんでいました。よく談じ、よく食い、數年後講師になられても相變らず洒々落々たる學生氣質です。廣島高等師範の數學、物理學科を出られたのですから數學の得意なのは當然であります。また語學も實に達者で American Journal と Psychological Review などは Zeitschrift や Archiv などが新着するや否や二、三日で繙讀され、晝食の時や研究室の廊下で、或は讀書會の席上や歸宅の途上で歐米心理學界のホット・ニュースをば愉快げに披露されたものです。岩井さんが割合に早く逝去されたことは京都大學の心理學科にとつて實に大きい損失であると思ひます。

哲學の西田幾多郎先生は私の入學した頃は心理學講座の分擔をして居られ、土曜日午後の特講は後年までずっと引き續いて聽講しました。先生はヴントの心理學によく精通して居られ、ジェームスその他の心理學書を廣く引用、批判せられ、吾々に少なからず刺激と暗示を與えられました。隔年には石川日出鶴丸先生の生理學、今村新吉先生の精神病學を聞きに醫學部に通つたものです。

「心理學讀書會」は隔週に開催せられ、これには教官や學生の外に市内在住の先輩方が参加され、研究發表に、討論に饒かなことでした。藤澤乙夫、石神徳門、黒田源次の子三氏は殆どいつも出席され、石神さんの宗教心理學や民族心理學、黒田さんの色彩心理學に兩眼視現象、藤澤さんの兒童、青年心理學についての發表によつて私達は得る

所少くありませんでした。野上先生の假名とろーま字の読み易さの比較實驗、天文学の新城新藏理學博士の「曆の話」なども聞きました。第三高等學校の須藤新吉教授、奈良女高師の本庄精次教授、哲學の務臺理作氏も時々見えます。圖書室には「大福帳という商店用の長い帳簿が懸けてあり、その第一頁には「心理屋が平八茶屋で散財し」とあつて、松本亦太郎先生の署名が見出されます。讀書會の度毎にみんなが落書きをしたものです。

私の在學當時は心理學專攻の學生はまことに少く、大てい毎學年一人で私の一年前の級は誰もありません。深田岩井、福富と各々一人ずつ續いて、私の級も唯だ一人、次の年も増田正君だけでしたか、その次の級から増え始めて、岡道固、笠達恵、堀口潤一郎の三君となり、その翌年は根津義雄、有馬良治、林一清、鄭伯奇の四君と段々増えて行きました。

文學部學友會は毎年秋に遠足をすることになつて居て、天橋立、和歌浦、大垣と名古屋、高野山などに遊びましたが、車中や旅館で西洋史の坂口昂、梵語學の榊亮三郎、國史の喜田貞吉、内田銀藏、言語學の新村出などの史學科、文學科の諸先生に接することの出來たのは大きな喜びであります。

爾來、迅くも四十年の歲月は過ぎ、恩師の方々多くは他界せられ、先輩の方々もまた少なからず亡くなられたことを想えば寂しさに堪えません。それでも實際、回想は何人も追わることのない樂園で、當時の隆々たる文學部に學ぶことの出來た幸福を想えば今更ながら喜びと感謝の念が胸にあふるるのを感じます。終りに臨み文學部と心理學科の今後、益々發展せられんことを祈つて止まない次第であります。

回想録

藤田元春

京都大學文科大學に史學科が創立された當時私は京都市下京區第二高等小學校の訓導であつたが、一般の市民として大學の諸先生が京都市に在住され始め先生方の起居動作を附近に見始めたことは市民に對する教養の一助ともなつたと思う。大學の諸先生の講義を直接にまた容易に聽聞し得るといふ幸福が降つて湧いた。市民は競うて講演を待望し、諸先生の警世の議論に耳を傾けて人いなる啓發を受けた。就中、谷本富博士の教育論は素晴らしい感動を呼ぶに充分であつた。その頃大藏會の催で市會議事堂で弘法大師の事蹟を講演された時には滔々懸河の快辯で一滴の水も飲まないで前後四時間一千の會衆一人も離席したのもなく博士の辯論にひきつけられて時を忘れて聴き入り、終つて始めて會衆が息を入れた程の成功をおさめられた。かくて博士の名聲も上り各地から講演の申し込み絶えず長短大小時と所に應じて啓蒙の實を擧げられた。明治の末年になつて乃木將軍の殉死を批判して失言問題をひきおこし、遂に退官の餘儀なきに至つた。それは誤りをおかした議論ではなく、些細な失言をとがめ立てた嫌いなぎにしもあらず、それが今日ならば恐らく不問に附したであらうと思われる程に博士に對しては氣の毒の感が深い。博士はその後龍谷大學に教鞭をとられてなお活動を續けられ、芦屋の寓居で靜かに老を養われ、我々も時折お邪魔をした。當時大學の諸先生は、谷本博士のみでなく市内の有志を集めて何くれとなく指導せられたが、工學部の比企忠先生は中等學校の教員二・三名のために自宅で週一回礦物學の講義を一年以上も續けて下さつた。それは私が府立第一高等女學校の教諭で多くの諸先生の令嬢方の擔任でもあつたから比較的容易にお近づきになれ、恩師

小川琢治先生の如きは小生のためにロンドンタイムスの週刊を、これも週一回講讀して下さつたのである。そこで向學の心止みがたく大正五年になつて府立第五中學校を八月に退職し、九月に史學科の選科生に入學を許された。後任には魚澄惣五郎氏が勤めてくれた。かくて三十八歳妻もあり子もある老學生が角帽をかぶつて通學を始めた。同期の學生は、日本史の鈴木登、桑原親通、西洋史の安藤俊雄、東洋史の横地得三、支那史學の丹羽正義の五名であつた。一期前の先輩は古田良一、牧健二、辰馬悅藏、下川潮、富森大梁等の人々で、いずれも陳列館の樓上講義室で共學した。當時の教官は、巨儒碩學の淵叢で空前の偉觀を示した。即ち日本史の内田銀藏、三浦周行、喜田貞吉、東洋史の桑原鷺藏、内藤湖南、矢野仁一、羽田亨、今西龍、西洋史の原勝郎、坂口昂、考古學の濱田耕作、地理の小川琢治、石橋五郎等の諸博士が肩を並べ、同じく助手としては、日本史の岩橋小彌太、考古學の島田貞彦卒業した方々のうちで羽溪了諦、西田直二郎等の直接間接の指導を受けた。當時我國における鬱然たる當代第一の學林ともいふべきここに學ぶことの出來た我々は誠に無上の幸福であつたと思う。當時陳列館では、地下の小使室においてのみ喫煙を許されたので、自然學生はここに集つて爐邊閑談に時を過すことが多かつた。小使は袖岡、森口の二名、圖書出入係安田青年などがいて、この爐邊の賑いとなつた。教授の中には寄りつかぬ人もあつたが内藤先生や濱田先生は爐邊の漫談に参加され、陳列館はために洋々たる春の海の如き朗らかさを示した。もしそれ一度講義室に入つて原勝郎先生の大喝をくらつてちぢみ上つたことを思うと今昔の感にたえない。内田先生の諄々謹嚴な講義には學生全て頭を下げたが、先生は國史のゼミナールに地理科の私を特に指名して和蘭のノリスの探檢記録の研究に参加することを許された。極めて未熟な卑見を開陳すると、先生はその創意の部分指摘して激勵せられ、經濟雜誌などに投書することをすすめられたりした。卒業と同時に地理教室の助手となり、辛に學問を續けることが出來、やがて三高の地理科の講師に任命された。さてこの地理科助手時代には京大經濟學部を卒業した小野鐵二君が地理科に入つて勉強するし、同じく黒正巖氏が小川博士のもとで、地理科を聽講するようになり、教室は

大いに榮えたが、大學も追々と年がたつにつれて先生方も次々に永眠され學者の壽命は短いと思うこともあつた。恩師小川博士は第一次世界大戰前後にあるいは支那に旅行し、或いは戦後のドイツに出張して内外の書籍を蒐集された。お陰げで京都地理教室には、珍奇な資料が集められたのであるが、これはただその旅行の時だけでなく創立以來先生の努力が現われた結果であつた。やがて先生は理學部に地質教室を創立することに努力されて、地理教室からは自然に遠ざかつたけれども、中村新太郎教授の参加を得て地理教室の方でも「地球」という雑誌を公刊しはじめた。これに先だつて西田先輩を中心として史學科卒業生の機關紙として「歴史と地理」という雑誌も出た。東京に刀江書院という本屋が出来、濱田教授に交渉した結果私の「日本民家史」が約束され、博士は島田君と僕とを連れてわざわざ飛驒の白川の御母衣の遠山家の調査に向されたのみでなく、いよいよその本の出来るに先立つて八瀬のスケッチ、奈良の傳法院の寫生を作つて僕の出版物に花を添えるという好意を示された。おかげで、この書は二回三回と版を重ね、この書以外に「支那紀行文」（西湖より包頭まで）には内藤博士の序文がのり「尺度綜考」にも兩先生の序がのつてどこまでも門弟の面倒をみるという好意を示されたことは誠に頼もしい學園の光であつたと思う。随つて今後に於ても大學における子弟の契りが美わしく展開されることを期待してやまない。恩師石橋五郎先生は肺患であつたために講義をすることも容易でなく時には學生を病床によんで講義などをした。ために一・二の地理科の學生で不治の病を得たものがあつて、あるいは傳染したかとさえ疑う。このことを考えると、大學教授は健康體でなくてはならない。我々は二度とその誤りを繰り返したくないと思う。回想して見ると大學の學生時代程愉快で楽しみに充ちた生活は他にはないと思う。我々の東洋史の先輩として岡崎文夫君が盛んに研究報告會をおしとおされた獅子奮迅の勢いは、今もなお、敬服に絶えない學者ぶりであつたと思う。殊にその論ずる所が極めて多方面にわたつたことは特筆しておきたい。曾我部、宮崎兩君の如き特色ある大家がその後繼者となつたのも當然だと思ふ。老の繰言めくが大學はどこまでも若々しく潑刺とした氣風が滿ち満ちておらなくてはならない。

そして人材を集めてこれを大成するという大目的を忘れないようにしたいものである。

陳列館の地下室

神 田 喜 一 郎

わたくしが文學部に入学したのは大正六年の九月で、その頃はまだ京都帝國大學文科大學といい、毎年九月に新学期が始る時代であつた。かれこれ四十年近くも前のことである。いま當時のことを追憶してみると、いろんなことが思ひつかぶが、わけても忘れられないのは陳列館の地下室である。

現在の陳列館は、わたくしの在學時代よりも、奥の方が建てまされて廣くなつてゐるが、大體の様子は變つていない。最初いつ建築されたものか知らぬが、わたくしの入学した頃はまだ極く新しい建物で、大學の多くの建物の中でも特に目立つてスマートな姿をしてゐた。そうしてこの陳列館は、現在でもおなじであるように、文科大學の他の建物とは少し離れていて、一種の別世界の感があつた。ここでは史學科以外の講義は行われぬ。したがつてここに入出入するのは、おのずから史學科先生と學生とに限られ、これがまた一層別世界の感を深うせしめた。この陳列館に地下室がある。これはまつたく史學科の先生と學生とのサロンで、いつ行つても何人かのひとがよつて、それこそ談論風發、じつに賑かであり、また和やかなことであつた。史學科に在籍したわたくしなど、この地下室で先生や先輩から何れほど教育をうけたことかわからない。

先生の中で、もつともよく地下室に來られたのは内藤先生と喜田先生とであつた。兩先生はいつも和服下駄ばきで陳列館に見るので、いやでも草履にはきかえられる。その草履のいれてあるのが地下室の下駄箱である。そん

な關係から兩先生は、ゆきかえりに必ず地下室に降りて來られるのであるが、おかえりの際には、よほど急がれることでもない限り、大抵はサロンといつても、極く粗末な長い床几が爐の周圍におかれていただけである。先生もそこに學生と一緒に腰をおろされるのである。そうして短かくしても一時間、長いと三時間くらいも話してゆかれる。喉が乾くと爐にかけてある大きな藥罐から茶をついで飲まれる。煎餅一枚あるわけではない。それでも話のはずむことといつたら、じつに面白いほどで、内藤先生と喜田先生とが一緒にでもなられると、わが古代史上の問題について、ときに花花しい論戰が展開せられたりして、われわれ學生は思わぬ儲物を喜んだものである。このサロンでは學問上のこと、社會の出來事、その他ありとあらゆる事柄が話題になつた。先生も學生も、心から融けあつて、まつたく一家團樂とでもいうか、お互に言いたい放題のことをいつて、しかもその間にいろいろ益をうけたことは、かえつて教室以上のものがあつたように思う。

もつとも當時は今日とは違つて、何かにつけて極めてのんびりしていた。内藤先生の御講義は、定刻より三十分以上おかれて始るのが普通で、ときには一時間以上もおかれて教室に來られた。何事につけても几帳面そのものようであつた内田銀藏先生でさへ、時間については殆ど無頓着で、わたくしの入學した年の國史概論の御講義など午前十一時から正午まで毎週一時間といふことになつていたが、先生の教室に見えるのは大抵十一時半過ぎで、正味二十分位で終ることも稀ではなかつた。その代りに内藤先生でも内田先生でも、晝食の時間などにはおかまいなく、午後一時位まで御講義をつづけられることがあつて、われわれ學生は晝食抜きで、午後一時から始る他の講義に出席したようなこともあつた。これは單なる一例に過ぎないが、一事が萬事、まつたく悠長な時代であつた。それでこそ陳列館の地下室サロンの花も咲いたのである。

わが師わが友

張 鳳 學

黒谷北門を出ると、右側に石屋があり、そのすぐ隣りの露路に平井おばあさんが獨息子の中學生と住んでいた。その二階の一間を借りてお世話になることになった。大正八年八月の末か九月の始頃だったと思う。

私は東京高等師範から入るのでいつ語の検定試験が始業式の前にあつた。いまはきれいに忘れてしまつたが京都へ来る二三年前から當時本郷西片町に住んでいたカール・グセルという人のところへ通つたり神田のドイツ語補習班の夜學校へ行つたりして、しまいにはわれながら何時の間にかゲーテやニイチェの千(?) 載後の知己になつた顔をするように陶然とし始めた。

で、検定試験はものの見事に及第し、そこで始めて慈祥そのものの感じを何時でも周圍に漂わせられた藤代先生にお目にかかつた。

始業式に、大學は職業を教えるのではなく真理を求めるところである、という意味の一節が荒木總長の訓示の中にあつたことはいまなお記憶に新しい。旁徴博引された總長のお言葉の中にはかなりゲーテやシレルなどの名句が入つていたようだが、残念ながら例のどいつ語だからこれもきれいに忘れてしまつた。ともかくこの一場の演説で、すっかり總長を崇敬するようになった。

脚氣にかかつていたので、検定試験受験の時もそうだったが、始めのうちは抱え車みたいに人力車に乗つて學校へ通い、それから後は、一日四回ずつ三か年間ほとんど毎日吉田山を越えることになつた。

私の郷里の近くには山というべきほどの山がない。中學時代を過したところも、みな平原だつた。東京から来て先ず氣に入つたのは、山に圍まれた正に山紫水明のこの都の景色だつた。そしてお寺の多いことだつた。國へ歸る年には、とうとう半年ほど泉涌寺の坊様に宿を借りたが、いまから考えると、あるいは眞如堂前に居を卜していたわが友沈尹默さんがその時すでに北京へ歸つた後で、あの邊が急に寂しくなつて來たせいでもあつたかも知れぬ。

私が京都へ來た最大原因は、私の後を繼いだ幾人かの友人達のそれと同じく、厨川白村先生の門牆に列したい心切ない念願にあつた。いまこそあまり讀まれていないようだが、しかし先生の不朽の名著「近代文學十講」は、大正時代を通じて、すべて當時の文學に志す青年が必ず讀まなければならなかつた座右寶だつたのみならず、實際、今日においても、同じ性質の著述として、その右に出ると云えるほどのものが、果して現れているかどうか、私にはわからない。歐米人にとつてさほど必要でないかも知れぬが、とにかく無學の私がその後見たところでは、西洋の近代文藝一般に就いて、これほど叮嚀にまた簡明に若いもののために書かれた啓蒙書と云うべき書物がついぞなかつたし、またいまでもないような氣がしてならない。またそういう書物が、あちらのわかいものには必要でないとも思われない。

熊野神社からほど近い岡崎町にあつた白村先生の御宅、Poussez, sil vous plait と書かれてあつた小さく無造作に切られたはり紙の上の門鈴を押して、始めて先生の書齋へ伺つたのは、何時だつたか、いまは覺えない。それより先に、ある日和の午後、吉田山麓の古本屋をひやかしていたところ、そこへひよつこり先生が入つて來られて「ああ、張君か。君が來てるからきつといい本があるに違いない。」と不意打されて赤面したことだけが、いまでも目の前にあるようで懐かしい。それ以來、大正十一年先生がなくなられるまで、なにくれと御鞭達を受け御世話になつたことは、いまさら云うまでもない。小包郵便で文學部研究室の圖書の北京までの借出しを許されたことも空前絶後と云つてよからう。上海九華堂の彩箋で書かれた先生の御手紙など、いまでも天壤間のどこかに残つてい

るはずだが――

せめては一度だけでも、北京へ先生を御迎え申したかつたのである。

東京できびしい四か年を過して来たかいがあつて、京都の月日は、それこそ「日日是好日」だった。京都が私の心の第二の故郷となつた。私が入つたあくる年から、徐祖正君、溥書邁君、私の従弟張定釗(ていせう)などが相次いで来た。

三高に行つていた鄭伯奇君も、東大へ行かないことにした。沈尹默さんが来てから、ときどき二人で狩野君山先生と野上先生の門を叩くようになった。みつしり勉強し、思う存分怠けた。

植田先生の講義に幻燈の映寫が陳列館にあつたので、それを見に行くとき、廊下で濱田青陵先生にお目に掛るこゝが偶にあつた。その度ごとに先生のお顔がなんとなくこわかつた。後年先生のお伴をして、北京から包頭へ向う汽車の中で長城の夕照を眺めながら、中國のべれー、黒どんすに赤いふさの瓜皮帽姿の先生から何時ものどらい、ゆーもあに富んだあのお話ぶりで語られるいぎりす皇室の存在がいぎりすという國にとつての有難さを謹聴したり、八達嶺の途中、先生の目の前で、落馬の醜態を演じたりして別に叱られることもなかつたが、なぜ在學中先生のお顔がそんなにこわかつたか、つい何わずじまいになつてしまつた。上海が共産黨に取られてから、それまでに大事にしていた先生の御著述もいまだに行方不明――このことを昨秋小川環樹さんに申上げたところ、早速快く初版本の「考古游記」一冊を割愛して下さつた。小川さんの御盛情に對してはお禮の申しようがない。

その時は佛語學佛文學がまだなかつた。ごく少數の選ばれたものが、野上先生に教えを乞うた。私にとつては、白村先生のらてん語の時間より、Hugo の *Les Misérables* を脚本にしたものの佛文講讀の方がはるかに楽しかつた。人数は三四人位がつたと思う。

一番おもしろかつたのは、しかしやはりある時の白村先生の講義時間だった。それには先輩の石田憲次さん、黒田正利さん、矢野峯人さん、山本修二さんなどの顔もときどき見えた。山本先生から持出された話題が一番多かつ

たように思われる。菊池寛の名前がちよいちよい聴かされたりした。「眞珠夫人」が出た。

西田先生のときには、さすがに教室中ぎつしり身動きもならぬほどだった。

歸國間際に、もう一人の恩師から「先生に招かれて、矢野肇人さんと一緒にお茶を飲みに行つて愉快な一時を
過した後、いよいよお暇乞いすると、先生から大きな手が出され、懇ろに握手された。

「君、このことだね、こーちいあるというのは。」

先生の門を出てから、矢野さんが云われたこの一句は、いまでも耳に残っている。

こーちいある、これは京都のすべてが私に與える感じでもある、昔も、今も。

今の文學部の建築は、なるほど素晴らしい。しかし人と時と一緒に去つてしまつた、あのうすぎたない寺小屋を大きくしたような木造もどこか田舎の博物館へでもいいから保存して置きたかつた。あの中に、わが酒友、あの豪傑
肌の中鐵さんがいたはずだ。

思 い 出

高 坂 正 顯

私が京都の大學に入つたのは大正九年の三月、西田先生の「自覺に於ける直觀と反省」が出版されてから三年後であつた。西田先生はヘーゲルのエンチクロペジィを演習に使つていられたが、死んだ三土興三君などはこのエンチクロペジィの演習の時が一番面白いといつていた。

田邊先生は大正八年の秋に京都に見えられカントの純粹理性批判を演習に使つていられた。その時にはアルゲマ

イネロギークという特殊講義をしていられ、ロッフエやシグワルトがよく引合ひに出されていた。その次の年であったか、無限連續の論理という特殊講義をやられた。その二つの講義はいまでも深い感銘を以て思い出す。私の在學中に田邊先生はドイツにゆかれ、歸國後カントの判斷力批判を演習に使われ、ひきつづいてフイヒテの知識學からシェリング、ヘーゲルと先生の在任中ドイツ觀念論の諸體系を丹念にあとづけられていたのである。

私が學生であつたころに非常に印象につよのこつているのは、左右田喜一郎博士が東京商科大学から二年ぐらゐにわたつて、今でいえば集中講義にみえられたことである。講義が終つたあとで教官室で左右田博士と西田先生、田邊先生との間にはげしい議論が交され、それがかなりおそくまで教官室からもれてきこえるといつたうわさを一種の感激を以てきいたものである。

朝永先生は一人で古代ギリシヤからカントに至るまでを普通講義で講じておられ、カント以後は特殊講義の形で話していられたが、ずい分と大變なことであつただらうと思う。

今はすつかりとり拂われてしまつた木造の古い建物が教授たちの研究室のある處で、廊下にはデカルトやヘーゲルなどのやや大きな額がかかつていた。たしかその二階に圖書室があつて、務臺理作とか世良壽男とかいつた先輩たちが助手としてその部屋に居られ、いろいろ親切に書物のことで助言を與えられたり、又時にはいろいろな問題を論じあつてくれたりしたものである。今の心理學の實驗室の西南の側が一寸した芝生めいた斜面になつて、特に西田先生の特殊講義の時間のまえなどには、夫々に小さなグループをなして、雑談やら學問上の議論などに耽つたものであつた。

なお一言つけ加えておきたいが、哲學科を卒業された諸君は、一中とか三高とかあるいは高等工藝とかそうした所で英語の先生などをいわば代用教員のような形でいられるのが多かつたように思う。むろんそうした職にもつけず、ぶらぶらしていた諸君も少くなかつたと思うが、就職ということとは第一の問題ではなかつたようである。結局やむ

をえず地方の學校へ田舎おちをする人もあつたけれども、出来るだけ京都で苦勞するのが當然のように思われていた。現在といろいろ事情の相違もあつたに相違ないが——いよいよとなれば何とか始末がつくという餘裕があつたからかもしれないが——何とか勉強をつづけて行こうというのが一般の氣風であつたように思い返される。私が入學した頃はその一二年前から哲學志望の學生の數がふえ數年前には二三人にすぎなかつた專攻の學生の數が私たちの頃から十人前後にまで急に増加するといつた時代であつたがこのような一種の哲學熱が一方にあつたということもわりに就職の問題に對して吾々を無頓着にさせていたのかも知れない。それが後には三十人も專攻の學生が出來定員を十五人に制限するとか論文の枚數を五十枚に制限するとかいう状態にまでなつたようであるが私たちの頃には多分二百枚位の論文が普通ではなかつたかと思う。土田杏村氏の卒業論文は十冊近くの大版のノートであつたなどという話が傳わつて居りしかも別に論文の枚數に制限のなかつた時代なのである。

想　　い　　出

塚　本　善　隆

五十周年の文學部にもう一つ嬉しいことは、美術史講座開設という久しい願がなつたことであろう。この講座申請當初のあて馬は、故澤村助教授だつたととき。印度哲學專攻生となつたわたくしは、先生の佛敎美術史の講義を半ば楽しみに、半ば研究分野の補助學にもときいた。當時ずらりとそろつて居られた教授の大先生方には、ちよつと簡単に話しくかつたが、若いはりきつて居られる先生は、氣輕にわたくし共に話しかけられるし、氣樂に質問も雑談もできた。日曜にしばしばリクリエーションをかねた近郊社寺見學に誘われたし、宅へも遊びに來とい

われて、北白川の上り口にあつたお宅の二階で紅茶や菓子をいただきながら談笑を楽しんだことも度々あつた。

「君、勉強には僕の研究室を自由に使いたまえ」といわれたのを幸に、夜の九時まで誰も来ない先生の研究室を獨専使用する恩恵をうけた。何でも御大典後に下賜された木造平家建だが、室が廣くて大きな机に當時續々と出ていた各國の中央アジア學術の探險報告書などの大型の本を築きんで見ることができた。冬の夜などは寒い下宿とはちがつて、ストーブを焚いて安樂イスで先生になつたような氣持で十分暖まる讀書をして、後しまつを小使さんに頼んで下宿へねに歸つたものである。そのうちに先生が佛教美術をやらんかと度々勧められたが、自分に美術眼のないことはよく知つているので、ハイとはどうしてもいえなかつた。だが三年も講義をきいてみると多少興味も湧いてくるし、先生の熱心と親切に對しても何か書かぬとすまぬ氣もするので淨土教の發達を美術に結びつけて論じてみようと考えた。恐る恐る指導の松本文三郎先生——無口な老先生は學生時代には中々とつき難かつた。卒業後は随分氣樂にお伺いしたのだが——に伺つてみると、即座に「そりや面白いぞ。やつてみ給え」と同意せられた。澤村先生に報告すると、先生わがことのように喜んで、「是非やつてくれ給え。僕もできるだけ後援する」とたきつけられる。「粟生の光明寺の管長は西山派の當麻曼陀羅教學の大家だ。僕がつれて行つてあげるから」といわれて、一日泊りで光明寺の老管長の講座に陪侍したり、「比叡山の夏期講座に出講するからついて來給え、いろいろ見學することもあるから」と引つぱつて行かれたりもした。そしてわたくしは、印度哲學の卒論に日本の淨土教美術を書いたのだが、佛教の發展を廣い視野から綜合的に研究してみたくなつてきた。それをまた巧みにおだてられたのが若い羽溪先生（多分まだ講師でおられたと思う）である。支那佛教史の講義で、「大日本續藏經」というシナ佛教研究の大資料が出版された。シナ佛教の研究はこれからであり、新分野は無限であり、これこそ日本の若い學徒の義務でもある……。先生はおだてる心算りではなかつたであろうが、感激をこめた先生の語に、わたくしの若い心は大におだてられた。そして大學入學前に佛教東漸史を教えられた羽田先生に相談して、内藤・桑原・矢野・今

西それにかねての近づきの羽田先生などの専門家がずらりとそろつてゐる東洋史學に進んで、とうとうつぶしも
きかぬシナ佛敎史の本の虫になつてしまつた。但しくいはない。今はなき多くの恩師への懐しくも楽しい思い出が
數々つまれている。

あの頃の木造の研究室も教室も姿をけして堂々たる鐵筋に代つたし、それが更に擴大されようとしてゐる。嬉
しい發展ではあるが、木造の研究室も忘れ難い懐しいものである。楽しい思い出といへば、年一回の文學部の一泊
或は二泊の懇親兼修學の旅行がある。會費はとても安いし、行先では先輩が歓迎してくれるし、また大學の先生方
が見えるというので、個人では見せてもらへぬ祕藏資料が見せてもらえる。殊に教室とはちがつて、汽車の中でも
更に夕食の懇親席上で一杯きこしめた大先生方の愉快そうな放談を氣樂に承れる。高野山で國寶の聖來來迎圖や
殊に祕佛とされている赤不動の豪華な大幅を特別に出してもらつて、澤村先生得意の一席を承つたことなど、名畫
の印象と共に楽しい思い出である。全文學部の旅行は復活したらと時々今も思うのである。

昭和の初めごろ

原 弘 二 郎

私が在學したのは、大正十三年から昭和五年まで、學部と大學院の六年間である。それは、ちようど日本の大き
な變動期に當るが、京大史學科にとつても一つの轉換期であつたかも知れない。名簿を見ると、文學部の各學科と
も、昭和二年頃から卒業生が激増している。高等學校増設の結果がここに現われたわけだが、それはただ學生が増
えたというだけではなく、今までの教授一對學生一、二という云わば師匠と弟子という形から、もつと量産的、組

緻的な授業への推移を意味した。同時に、この六年間前後に、學部創設以來の老教授の勇退され、または逝去された方々が少なくなかったので、教授陣の入れ替りもあずかつて、研究室の氣風も一新されたのではないかと思われる。そういう過渡期が私の六年間である。

いま京大風景の中心になつている時計臺は私共の一回生の頃に建てられたと思う。その時計臺の北裏の、灰綠色のペンキもはげた木造二階建てが、わが文學部であつた。その二階の教室まで下駄ふみ鳴らして罷り通つて、事務室から叱られたのは曾我部靜雄君であるが、多分階下の事務室の、オールバックにマドロスパイプの伊津野事務長殿の頭上に土埃でも落ちたのであろう。その事務室に、三月ともなれば、成績簿の(通)をたしかめに押しかけたことであつた。いまはそのぼろ校舎は勿論ない。

大正十三年の史學科一回生は凡そ三十名、にぎやかな教室だつた。中でも山根徳太郎、肥後和男、木島誠三、曾我部靜雄らの諸君は既に人家の風格をそなえ、西田先生の史學方法論の時間には、甲論乙駁はまずこのあたりの専らにする所であつた。お教え下さつた諸先生は、いまは皆故人である。プロフェッサー、ステーツマン兩型を兼備された坂口先生が、説教壇のような、脚の高い見臺の端を左手でぐつと掴まえ、「諸君！」と講じ始められる姿は印象的であつた。アウスアルリッツの戦であつたらうか、幼き日のランケが友達と土に穴を掘つて遠い砲聲を聞いたというお話のとき、首を傾けて「聞える！」とささやかれたのも忘れ難い。内藤先生は時には一時間ばかり學生を待たせてから、にこにことお出でになつた。遂に待ち呆けということもあつた。桑原先生は、終鈴近くなると、講義されながら書物やノートを段々に積み重ね、そろそろ風呂敷に包まれ、最後に兩端を結ばれると、ちようど講義も終りベルも鳴つた。西田先生はいつも右手の窓を向いて講義され、ほとんど正面を向かれなかつた。怠け者の私にはそんなことばかりが思ひ出される。二回生になつて専攻にわかれ、陳列館で勉強する様になつたが、私共西洋史専攻生は十二名であつた。そのうち森瑞樹、岡嶋誠太郎、大館宗憲の三君は既に故人となり、殘る九名が昭和

三十年の秋、京の宿に相會して昔話に一夜を送つた。半白も光頭も酒杯にうつる面影は三十年昔のそのままであつた。

その頃經濟學部では河上肇教授が嵐を呼び起しつゝあつたが、陳列館にはなお昔ながらの僧院的静けさが保たれていた。私の同級生でその頃社會經濟史に指を染めた者はまだ無かつたと思う。晝休みには教授も學生も地下室の爐邊に集つて談笑したものである。この爐邊の花形は先生側では小川、喜田、濱田の諸先生や梅原末治、那波利貞、藤田元春などの大先輩諸氏で、學生側では例の論客諸君であつたが、必ずしも君子の清談とばかりは限らず、まことに楽しい集いであつた。また陳列館北側にも教授、學生が集つて煙突クラブと稱していたが、やがて私共西洋史の學生から軟式野球チームが生れ、バットなどかつきまわつて僧院的静寂をみだし、矢野先生のお叱りを蒙つたこともあつた。

卒業の翌年の昭和三年には、西洋史研究室に不幸が相つぎ、坂口、植村兩先生を失ない、時野谷先生の外遊中は副手だけという淋しさ。大類伸、中村善太郎など諸大學の先生の應援によつて辛うじて授業の缺を補う有様で、圖書豫算の消化も容易ではなかつた。そうした中から坂口先生の遺稿出版のさきがけとして「ルネッサンス史概説」が出たのも、哀しい思い出である。しかし昭和五年の春には研究室の扉に眞新しい原助教の名札が掲げられ、外遊から新歸朝の原、時野谷兩先生を中心に、研究室はより若く新しく再建された。西洋史研究室の現代史がここから始まつたと云えるであろう。その春私は松江に移つたので、研究室へは全く御無沙汰してしまつたが、その翌年には滿州事變が起り、日本の不幸な曆が始まつた。思うに私共の在學時代は、日本のいわゆるグッド・オールド・デイズの終幕に當つたようである。

地理學教室の想い出

村 松 繁 樹

京都大學文學部に史學科が創設された際、内田銀藏先生の御深慮によつて地理學教室が開設されたことは、わが國の大學においては劃期的なことであつた。東京大學においてさえ理學部に地理學科が設けられたのは大正八年のこと、それに遅れること十二年であつた。したがつて當時なお純粹に地理學を専攻した學者はなかつた關係から講座擔當の教授としては東京大學地質學科出身の小川琢治博士が、助教として東京大學史學科出身で神戸高商の教授であられた石橋五郎博士が迎えられる。その後京都大學理學部に地質學科が開設されるに當つて、小川博士がその主任教授として御轉出になり、石橋博士が主任教授となられても、わが國地理學のあらゆる領域における開拓者であられた小川先生は依然として文學部の地理學の普通講義ばかりでなく、特殊講義も御擔當になり、卒論をも御指導頂いたことであつた。私が文學部に入學したのは大正も終りを告げる頃のこと、初めて訪ねた時の地理教室は陳列館の玄關を入つて東の廊下に沿つた所にあつた。當時地理教室は二室から成り、一つは教官室と本棚で區劃された實習室、今一つは標本陳列室と教授室とであつた。他の教室でもさうであつたように、文學部には天下の碩學が集まられた感であつたが、われわれは今でも自然地理學を小川教授に、人文地理學を石橋教授に御指導頂いたことを誇りとしている。

大正までは地理學専攻生は少なかつたが、私どもの頃から次第に數を増して來て、地理學談話會も定期的に行われ、これには教官・學生のほかに、毎回卒業生も參加した。そうしてその中から田中（秀作）、小牧、小野、内田

(寛一)ら諸先輩が次々と歐米に留學されて、その歡送迎會も行われ、學生津を刺激すること多大なものがあつた。それに地理の教室では見學旅行が毎年行われ、相互の親密さを増すことが著しかつたが、學生として參加した北陸や四國さては丹波路への旅行は、私の研究旅行としては初期のものであつただけに、今なお忘れ得ない想い出である。また日曜などを利用して友人同志で近郊の調査に出かけたものであつたが、小川先生の御慇懃によつて大和へ行ったことが多かつた。出發に先立つて先生のお宅へお伺いすることを例とし、いろいろと御指導に與つていたが歸途にはいつも少しづつ學問のやり方というものがわかつたような氣がしたものであつた。

御病氣勝で學生との遠出をあまりなさらなかつた石橋先生が珍しく研究旅行に御參加になつて和歌山に行つたことがあつた。三溝先輩の御肝煎で和歌浦の望海樓に宿泊したところ、その夜學生の就寢した大廣間は梁上の君子に見舞われて、翌朝制服に至るまで見當らず、一行は全く以て大弱りをしたことがあつた。その時巡查を呼び、その活動振りの緩慢不誠意なるに憤慨、大聲叱咤された石橋先生の御姿は未だに忘れられない。宿から提供の既製服を借りて、調査研究もそこそこに、蓬々の態で歸つたことは、當時の學生の今に語り草となつてゐる。

陳列館の増築が成り、一階は考古學教室に、その二階が地理學教室となつて、室數も増し、教室も大いに發展するようになった。その頃専攻の學生がふえたばかりでなく、第一回の日獨交換學生として來朝したフッパ―君が、石橋教授の御指導を受けて地理教室で勉強することとなつた。彼は日本文化と自然との關係をテーマに研究したいと希望したが、學生の一年間の滞在では論文の作成までもつてゆくことは無理だろうとのことで、石橋先生御専門の經濟地理學の領域から、日本の國有工業について研究することとなり、先生は彼のためにドイツ語で毎週講義をされた。私はその傍聽を仰せつかり、臨地研究には附添つて案内見學せしめることとなつた。スポーツマンで元氣なドイツの學生と、京都の町々を見學したり、またある時は丹波へ、ある時は伊豆から静岡などへ旅行したことは懐しき思い出である。同じ頃地質學教室に席を置いたドイツ人學生レオ君が、殆んど毎日のように地理教室を訪れ

講義も聴講していた。兩人とも日本を愛し、戦争になるまでずっと日本に滞在していたが、その後はどうしたことだろうかと時に想い出してはその消息を気にしている。

卒業後の三年を教室に勤務したお蔭と、その後東京に赴任して、彼地で上京された時の小川先生、石橋先生を圍んでもつた會合を機縁として、第一回卒業の寺田先輩以下の諸先輩にお親しく願え、戦後再び關西に戻つて來て、若き人々と交り、教室卒業のすべての方々を存じ上げ、御交際を頂いていることは、私の終生の喜びとするところである。よき大學に學び、良き師、良き先輩、よき友を得た人生最大の幸福に、日々の感謝を捧げている次第である。

濱田先生と考古學教室

長 廣 敏 雄

大正十五年四月、私が史學科に入學したときは陳列館がいまとちがつて、北側の建物がなかつた。いま北側に大陳列室となつている場所には木造の寫眞室一棟がたつていたのである。考古學研究室は大體いまとおなじ位置であつたが、奥の實習室がなくて、濱田先生の室と助手の島田さんがいた研究室の二室からなつていた。陳列室の配置はいまと全くちがつていて、陳列館一階、いまの東南隅の室、西南隅の室、東北隅の室の三室だつたと記憶している。つまり陳列館の四隅が考古學の領地であつた。當時の學生は二階西南隅の閱覽室には自由に入出入りしたが、あまり研究室へははいらなかつたようである。殊に私は學生時代三年間には圖書を借りる以外はほとんど研究室へははいらなかつた。なにしろ、私は大學にはいるまでは、考古學など全然頭になかつたのであり、しかも入學してみ

ると第一回の専攻學生だつたので、馬鹿な話だが先輩にいかなる人がいるかも知らなかつた。いや、自分が第一回専攻學生だつたから先輩がいるとも氣付かなかつたうかつ者であつた。この第一回學生は本科四名（選科一名）であつた。選科の山口隆君は終戦後氣の毒にも北京で死んだ。

考古學の講義は濱田青陵先生が普通講義、特殊講義、演習もやつておられたが、別に東大から原田淑人先生が出講されたり、石田幹之助先生がこられたりした。當時、専任講師はなかつたのである。地理學教室からは當時講師だつた小牧實繁先生がヨーロッパの湖上住居址の講義をしたり、醫學部解剖學教室講師の金關丈夫先生が人類學の講義をされた。どの先生の講義ものんびりしたもので、氣負いたつ學生にはどうも食いたらないことであつた。これはいまでもそうかも知れないのだが。

考古學談話會は多く近衛通り北の學生集會所でもたれた。いまのように電車がまだ通つていない時代だつたが、集會所はあの當時すでに古色蒼然としていた。この談話會で私たち學生は考古趣味の諸先生がたに、はじめお目にかかつたわけである。國史の喜田貞吉、解剖學の足立文太郎、病理學というよりは人類學の清野謙次、地理の小川琢治などの大先生が濱田先生と快談されているのを、學生はかたくなつて傍聴していたわけだが、史學科のほかの科の先輩たち、すなわち國史の山根徳太郎、肥後和男、西洋史の岡島誠太郎、東洋史の水野清一などの諸氏がさかんに論陣をはるのもこの談話會であつた。濱田先生はこの多方面にわたる學者たちの中心にあつて、新發掘調査談をされたり、ユーモアと皮肉のまじつた旅行談をされたり、まぜたり、こねたりして、うまく坐談の効果を収めておられた。先生はほとんど和服に袴で、手に煙草がきれたことがなかつた。

考古學教室からは毎年、調査報告書が刊行されていたが、これはたいへんな仕事だつたにちがいない。つまりほかの教室とちがつて、専攻學生を養成することのほか、調査業績の年次出版が一つの仕事だつたのである。濱田先生がこのために大きな努力を積まれたことは、まつたく頭のさがることである。私の學生時代には梅原先生は外

國留學中だったが、助手の島田貞彦氏はよくやつておられた。

それにもう一つ濱田先生が當時既に三陳列室に充満するほどの参考品を蒐集されていたことも特記しなければならぬ。日本内地はいうに及ばず、朝鮮、満州、中國、インド、エジプトなど、先生の廣い視野そのままに参考品があつまつていたことで、私たち學生はほかでは得がたい知識の糧をえたのであつた。

濱田先生の考古學的構想は文字通り古今東西あらゆる遺物を、科學的であれ美術的であれ、検討解明しようという構想であつた。私は藝術作品以外にはまつたく、とい人間であるが、ちようど一回生のはじめ頃に先生に勉強の方法をお尋ねしたことがあつた。先生はこう言われたものである。「單純な形、たとえば土器のようなものから順次に複雑な形のものにすすんでいけばいいではないか」けだし發展史的考察法というものを先生らしく言われたのであろう。

考古學研究室は午後三時か四時になると、濱田先生が楕圓形の大テーブルの前に坐られ、茶話のひとときがもたれるのが、つねであつた。よもやま話、珍談、奇談の花が咲き、史學科だけでなく學内いろいろの先生がたが期せずして集られ、或る新聞記者がこれをカフェ・アーケオロジイと稱していたのも、いまは談り草となつたが、思えばのんきな時代だつたのである。

第二次世界大戰中の學生

——いわゆる豊川事件を中心に——

一九四一年十二月八日、日本は、中國の援助をやめない米英に對して宣戰を布告し、無謀な太平洋戰爭を開始するに至つた。戰線は中國だけでなく太平洋全域に擴大され、兵隊はいくら補充しても不足であつた。町に村に毎日、「萬歲萬歲」の聲に送られて壯丁は出てゆく。工場といわず農村といわず、生産者の數は日とともに減退する。學生も生徒も、最早學校において勉學に専心するというのが許されず、或は戰線へ、或は工場へ、或は農村へと出動しなければならなくなつた。

わが文學部の學生も、一九四四年（昭和十九年） 月十日から同月十九日迄、滋賀縣野洲郡中州村吉川へ、さらに三月五日より同月三十日迄、滋賀縣甲賀郡岩根村岩根並菩提寺へ出動し土地改良作業に従事した。これよりさき、一九四二年六月、わが海軍がミッドウェーの海戰に敗れて後は、戰況は俄かに逆轉し、わが國の敗色は濃くなつた。けれどもそれはひたかくしにかくされ、一般の國民は大本營發表の「大勝利」の報道を信ぜさせられていた。しかし、國民總動員の計畫は戰線の實況を反映して強力に遂行され、一九四四年の春には、學徒の通年動員が實施されることとなつた。わが京都大學の法經文三學部學生も、この年五月二十日より愛知縣豊川海軍工廠に出動することとなつた。この出動は翌年三月末までつづけられたのであつて、京大生にとつて最長期の出動でもあり、しかもその間種々な事件がおきて、最も思い出深いものであつた。この間一部の法經文三學部學生は、この年七月十五日より九月十四日まで、宇治火藥製造所に出動し、裏山につくられた火藥貯藏庫を守るべき貯水池作りに出動した。

さて豊川の出動は最初から問題を含んでゐた。文部省の通達は九月卒業豫定の三回生を出動させよといふのであつた。法經文三學部長（文學部長は落合太郎現奈良女子大學長）は、次のように考へた。即ち三回生は間もなく卒業であるから、せめてそれまで學校にとどめて勉強させることとし、その代りに二回生を出動させよう、他の學校は三回生を出動させているであろうから、それらの學生は九月に離廠するであろう、その時京大生も一緒に離廠出

來るであろうと。こうして京都大學法經文三學部の二回生約一〇〇名餘（うち文學部學生二三名）は、五月二〇日、豊川海軍工廠第十工員寄宿舎一一四寮に入った。文學部第一回の付添教官は遠藤助教（現教授）であつた。到着早々學生の空氣は險惡となつた。それはかれらが三回生の身代りとされたことがわかるとともに、工廠側は、二回生であるから通年動員とし、九月に離廠することを認めない旨を明らかにしたからである。私が付添教官となつて豊川へ行つたのは、丁度各地で夏の大掃除が行われようとする暑い頃であつた。

朝は六時に起床、五分間で服をつけ直ちに運動場に集合、皇居遙拜、體操、終つて洗面、朝食、七時二十分工場へ向つて出發、夜勤の學生と交替、午後五時迄就業、歸寮して入浴、夕食、七時輪檢、九時消燈——大體このような日課であつた。第十工員寄宿舎には京都大學、東京神學校、立命館大學その他の學生數百名が出勤しており、文官舎監一名、武官舎監、少佐二名、中尉、少尉一名ずつ、他に事務員が數名いた。學生には煙草や菓子などがときどき配給される。學生に關する事務は付添教官と寮長一名が主としてこれを擔當し、各室の室長がこれを助けた。出勤當初は一一四寮の二階建一棟全體を京大生が獨占したが、室數は一階二階合計二〇、事務室一、教官室一、勉強室二、他の一四室を學生の寢室とした。併し戦局の緊迫は出勤先きにも及び、一人出征し二人入隊して秋には約半數に減少して了つた。初め不服であつた學生も戦局の苛烈さをしので、九月離廠をあきらめ、全部一階に集まり、新たに入寮した慶應大學の學生を一階に迎えた。

私が秋に再び豊川へ行つたところには、既に疲れた學生の面貌には、どことなく淋しいかげがただよつていた。この年の七月には太平洋上の最大の根據地サイパンが陥落し、冬にはアメリカのB29爆撃機が東京をはじめ日本本土の都市の爆撃を開始した。豊川に付添教官として出勤したものは、従業員五萬といわれる大工廠が爆撃される日の慘劇を思うと、一日も早く學生を離廠せしめたい氣持で一杯であつた。

年が明けると一九四五年（昭和二十年）、東京爆撃の頻度は日とともに多くなつた。豊川からは、學生の空氣が

いよいよ險惡であるというニュースが幾度か學校へ傳えられた。一月の終り、私は落合文學部長に呼ばれ、豊川へ三度出勤を依頼された。「學生を離廠さす迄頑張りましょう」と。二月の初旬、私はまたも豊川の土を踏んだ。來てみると學生のうち法・經の學生は皆軍法會議その他の事務に配置轉換され、數名の文學部學生だけが、現場に残りすでに馴れた手つきで旋盤を廻している。

一九四四年五月三十一日の調査では、文學部在籍者五一〇名（留學生を除く）中、應召・入隊者三五七名、うち哲學科學生一五三名、史學科學生一一七名、文學科學生八七名、殘留者は哲學科六三名、史學科五四名、文學科四六名、計一六三名であつたが、今年一月には、昨年十月本科生一五五名の入學者があつたにかかわらず、在籍者五一五名中、應召・入隊者三七二名、殘留者一五三名にすぎず、このうち豊川出勤者は僅かに數名になつている。滅びゆく祖國の運命を見越してか、一部の學生の顔にはあきらめにも似た淋しさがただよつていた。しかし大半の學生は、日々近づいて來る爆撃の日を豫想して、ただ離廠の日の一日も早きを願うばかりであつた。

間もなく名古屋の爆撃がはじまつた。殆ど毎夜、空襲警報が鳴り渡り、遠雷のような地響が傳わつてくる。と思ふ間もなく西の空が赤く燃え上り、爆撃を終えた敵機が爆音をとどろかせて豊川上空を過ぎて行く。それは臟腑をえぐるような響であつた。今日は豊川か、明日は豊川かと、地獄の業火に一日一日近づく思いであつた。

三月のはじめ、夕食を終えて教官室で休んでいると、「貴様、來い」という聲が聞える。酒でも飲んだ京大生が引立てられて行くのか、と思つていると、案に相違して、法學部學生が三人、一人の若い海軍士官を引きずるやうに二階へ引きあげてくる。三人は少し酒氣をおびている。おやおや逆だな、と思ひ、「どうしたのか」と尋ねると「先生一寸來ないで下さい」といいすて法學部の學生の部屋へ入つていつた。すてておくわけにもゆかないので部屋へ入つてみると、二十人ばかりの法學部の學生が輪をなして坐り、眞中に若い士官と、これを引き上げた三人の學生がおり、一人の學生は今なお士官の襟首を掴んで叫んでいる。

學生（士官に向い）「貴様は俺を誰と思うか」

士官「存じません」

學生「貴様は井上日昭先生を知っているか」

士官「存じません」

學生「貴様はなんにも知らん。俺は京都大學法學部學生何某で、〇〇會の京都支部長だ。貴様のような奴は武士の風上におけん。俺はいつも日本刀をもっている。今から腹を切るから貴様も切腹しろ。（他の學生に）おい俺の日本刀を出してくれ」

こういつてこの學生は洋服の上下のボタンを引きちぎつて裸になろうとする。私は見かねて「この學生をそちらへやれ」とむりに横へおしやり、「室長、こうなつた理由を話してくれ。事と事情によつては僕が相手になる」と室長を呼びつけた。室長の話によれば、法學部學生のうち軍法會議の事務についたものの調査によつて、煙草・菓子など學生への配給品が相當武官舎監の手に流れていることが明らかとなり、かねて京大生に特に辛く當つていた武官に對して一泡ふかそうとその機會をねらつていた。今日たまたま前記三人が酒を飲んで歸寮が少し遅れたのをこの士官がとがめたので、日頃の鬱憤が爆發したのだという。私は士官に向つて「今學生のいつたことは間違いありませんか」とたずねたところ、「相済みません」という。「よろしい、それをきいて安心しました。あとは私が引きうけます。あなたはどうかお引取り下さい。おい君、帽子を返して上げてくれ。」こうして士官はさすがに歸つていつた。私はこれを見送つて法學部の學生に向つた。「君達法律を學ぶ學生ではないか。リンチを加えるとは何事か。やるのなら何故軍法會議にかけぬ？ 向うが悪いということをして正直に認めたので歸したが、不服があるか」と少し威たけ高になると、「もういいです」ということでけりがついた。後で寮長（經濟學部學生K）が教官室へ歸る私をとらえ、「先生、これはどうなりますか」とたずねる。「さあどうなるかわからんね。ひよつとす

ると寮長こい、というようなことになるかもしれない」「そんなこと……法學部の學生が勝手にやつたんですから、私はしりませんよ」「しかし君は寮長じやないか。この寮の責任者は君だから、君の責任だよ」「僕はしらんですよ」「まあ君、心配するな。配給物を横取りして、京大生にリンチされたなどと上官に申告出来ないじやないか。まあみていて見給え。何も起らんから」

豫想した通り何も起らずに済んだが、名古屋の爆撃は日毎にはげしくなる。危険はいよいよ近い。或日學生の要求で京都へ歸り、羽田總長にお會いして「一體どうされるお積りでしょうか。學生の中には退學しても離廠するというものも出て來ました。よろしい、何時でも退學し給え、とはいつていますが、危険は日々近づいています。なんとか早く離廠させねば取り返しがつかぬ事態が起ります」と進言し、法經文の學部長、學生部長、各學部の動員關係の教官に文學部教官室に集つてもらつた。これらの人々に豊川の實情を報告し、誰か直ちに上京して、文部省に離廠の交渉をされたき旨を懇請した。爆撃の激しい折柄、進んで上京するという人はなかつたが、最後に黒田法學部長が「では私が上京する。明日出發する」といつてくれた。それを聞いて私は直ちに豊川に引き返し、夜、學生一同を集め、一兩日中に何かの報告がある旨をつげた。しかし二日待つても三日待つても誰も來ない。學生は工場から歸寮すると「先生まだですか」ときく。私自身も少し不安になつた。三月中旬であつた。日、學生全部を教官室へ集めた。「今まで待つたが、まだ何の報らせもない。しかし二十四日まで待つてほしい。少し考えるところがあるから」と傳えた。二十一日であつたか、寺尾學生主事がやつてきた。「どうだつたか」ときけば、「文部省は、工廠の方で離廠さす、というのであれば離廠命令を出すといつてゐる」とのこと。これまで工廠側は「文部省の離廠命令が出れば、離廠さす」といつてゐる。これではどうどうめぐりで、少しも解決しない。學生は絶望にも似た氣持をもつに至つた。この時第二の事件がもち上つた。

寺尾主事が歸學した後であつた。夕方文官命監から放送がかかつてきた。「本日はA少佐の巡檢が行われる。各

寮とも清掃しておくように」と。寮長が私の所へやつて来た。「先生巡検をことわりたいと思いますが」「よし」とわらう。下の慶應の寮長に、京大は會議をするからと傳えておいてくれ給え。」巡検のときは灯をつけたまま皆ベッドの中にねていなければならぬが、ことわつたので、學生はそれぞれ自室でくつろいでいた。午後七時「巡検!!」とわれがねのような下士官の聲が下からきこえる。と同時に、「貴様らなんだ!」ときき覺えのA少佐の聲。「なんだとはなんだ!」という學生の聲。それとともに五六名の京大生が二階へかけ上り、私の部屋へどやどやと入つて来た。「おい巡検中だ、早くベッドの中へはいれ」といつたが、「先生、ここにおらして下さい」という。「京大生がにげかくれしたと思われては残念だ」と考え、「よろしい、ここに給え」と私の部屋にとどめて事態の推移をみることにした。ところがどうしたことか、ことわつた管のA少佐が部下をつれて教官室の前にすつくとあらわれた。私はしらん顔で書物に眼をおとしていた。と「京大はけしからん」と大きな聲がきこえた。私はおもむろに顔をあげ「一體何がけしからんですか」とたずねた。「京大は巡検毎に、今日は授業、今日は會議と巡検をことわる。甚だけしからん」と眉をつり上げている。「なるほどそうかもしれません。しかし私は豊川海軍工廠で暮すこと前後百日に近い。はじめのうちは毎日巡検が行われたが、今回私が来てから約一か月になりますが、今日がはじめてです。もし必要な巡検なら何故毎日やられませんか。一月に一回位の巡検ならやめたらどうですか」といささか大人氣なかつたが逆襲に出た。學生もよるこんで「君、入つたらどうか」と威張る。憤激したA少佐は、「けしからんけしからん」といつて歸つていつた。暫らくして寮長が飛んで来て、「先生、来いといいますが」と顔をかえている。勿論、寮長来いということはわかっている。しかし一人やつてはビンタの一つも喰うことだろ。う。「来い、て、誰かを指名したか」ときくと「指名はありません」と答える。「よし、皆をたたき起せ、指名がなかつたので皆来ましたと、總員舎監室へ行け」と指令した。「それつ!」というので平素は起しても起きない連中が一人残らず押しかけて行つた。私は一人教官室にあつて考えた。星錨といわれる時代だ、ここまで来るとただ

では済むまいと。静かに辭表をしたためた。これをふところにして立命館の教官室をたずねた。一つにはさすがに波立つ心を静めるために、二つには徹底的に論争さすために。三十分程して舎監室へ行つてみるとA少佐をとりまいて京大生約五十名が環を作り、「馬鹿野郎!」「貴様、何をいう」と罵詈雑言の應酬の眞最中である。争いはいつ果てるもしれない。九時過ぎ今一人のB少佐が歸つて來た。「井上さん、これは一體どうしたんですか」ときく。「どうもこうもない。こうなつてしまつたんです。責任は私がとります。今暫らくこのままほつておいて下さい」というと彼も心配そうに私の側に坐つて事の推移を見守つていた。争はずで二時間以上たつている。A少佐もやや疲れて來たようだ。言葉もやわらかくなつた。「僕が京大生に特にきびしくあたつたのは決して他意があつたわけではない。僕も東大の工學部出身だ。半年の苦しい訓練をうけて軍人になつた。その經驗から、やがて軍人となる諸君を教育しておいてやろう、と思つたに過ぎない」という。私はこの時を逃しては解決のチャンスがないと考へた。「一寸おまち下さい。ただ今きいてみると、貴方は京大生を教育する、といわれた。これは京大の教育はなつていない。だから貴方が代つて教育してやる。という風にきこえます。これは京都大學全體に對する侮辱だと思ひます。私は京都大學全教官の代理としてここに來ております。京都大學全體の名においてたゞいまの言葉の取り消しを要求します。そもそも教育とは……」と教育論を二十分ばかりしやべつた。學生はだまつて私の顔を見ている。A少佐は「はつ、はつ」と頭を下げてきいてゐる。こゝらあたりが潮時だと考へた。「おわかり下さつたら結構であります。學生の立場としてあるまじき雜言を吐いた無禮の仕儀は、私から深くおわび致します。國家はまさに非常時です。徒らに私闘をつづける時ではありません。すべてを水に流して増産につくしましょう。既に太分おそくなりました。明日の仕事に差支えます。われわれはこれで引き上げてよろしいか」とたずねると、「どうぞお引きとり下さい」という。こうして凱歌を奏して引き上げることができた。

翌日の正午頃「本日午後三時、各付添教官と寮長は舎監室に集合されたい」という放送がかかつてきた。さては

昨夜のことで何か通達があるのであらう、と想いながらK君をつれて舎監室に行つた。みると總務部長H大佐が來ている。ことがいよいよ大きくなつたようだと考へていると、靜かな口調で大佐が口をきつた。「部下の不行届のために皆さんに大變御迷惑をかけたようであります。私の監督のいたらなかつたため誠にし譯が御座いませぬ。私の子供も松山高等學校におり、學生諸君の氣持は十分理解している積りです。そこでこの寮からは武官は全部引き上げさせ、學生諸君の完全な自治寮したいと思います。幸いかねてから京都大學に依頼していた自治寮案ができていますので、これを本日検討して頂き、よければこれによつて來る四月一日から自治寮として出發して頂きたいと思ひます。戦局はいよいよ苛烈です。四月を萬朶の月として、いよいよ増産に邁進したいと考へます」と。この工廠の數ある將校のうちこの大佐だけが、早濠上陸に参加した實戰の經歷者だときいていたが、流石に腹の出來た態度には頭を垂れさせるものがあつた。こうして昨夜の騒動は萬朶の櫻を咲かせることとなつたのであるが、勿論戦局には何らの關係もない。

しかも離廠問題は一向解決しない。二十四日になつた。夜、學生一同を集めた。「約束の二十四日になつた。三月中に離廠するためには一週間の準備があると考へたので二十四日まで待てといつた。しかし今もつて何の指令も來ない。爆撃は諸君の知る通りで、いつこどもやられるかもしれぬ。諸君の命にはかえられぬ。今日から僕も獨斷專行をやるうと思ふ。君達の要求する通りに動く。學校と交渉せよといへば學校へ歸つてくる。文部省と直接交渉せよというなら明日にでも上京する。君達の意見を述べよ」といへば、異口同音に「直ちに上京してほしい」という。「では今夜の十二時豊橋發で上京する。二日分の食糧を準備してくれ。三日以内に歸らねば東京で爆死したと思つてくれ。その時は寮長が私に代れ。寮長に事故あれば法學部の室長が、これに事故あれば經濟學部の室長が、さらにこれに事故あれば文學部室長が代れ。それ以上は自由行動をとつてよろしい。」こう後事を托して出發しようとする、法學部の馬場龜二君——片足を中支で失つた陸軍豫備中尉——がどうしてもお供するといふ。「君と一

緒では敏捷な行動が出来ない。好意はありがたいがことわる」といつたが、どうしてもきかない。しかたなく馬場君をつれて上京することとなつた。汽車は満員。馬場君と最後に乗車したのでようやくデッキにつかまることが出来た。三月でまだ寒い。顔は風で冷え切り、手はしびれる。落ちなかつたのが不思議であつた。朝死ぬような思いで東京につく。神田の焼跡をみて文部省に行く。

文部省は海軍省の許可なしには離廠命令が出せぬという。われわれは文部省の管轄下にある筈だと押し問答をしている所へ動員係の海軍中尉が二名あらわれた。事情を話せば「よろしい離廠さしましょう」という。「では何にでもよいから京大生を離廠さすこと、その補充は海軍省が責任をもつて行うことを書いて頂きたい」と頼めば名刺の裏にその通りを記し捺印してくれた。「軍人の方が話が早い」と捨てりふを吐き、その日の夜行で朝早く歸寮した。休む間もなく工廠長〇〇海軍中將をたずねた。「閣下はかねがね指令さえあればいつでも離廠さす、といつておられましたか、今でもその考えは變りませんか」「變らないね」「指令は文部省でも海軍省でも、どちらかの指令であればよいのですか」「どちらでもよろしい」「何か形式がきまつておりますか」「別にきまつていないね」「では」と、かの名刺を出して「京大生は本日九時に離廠させて下さい」「井上さん、まけましたね。では九時に離廠式を致しましょう。こうして三月二十六日、難問の離廠に成功したのだつた。豊川の爆撃は五月に行われ、多數の學徒・工員が爆死したことを後になつて知つた。

二十六日直ちに歸學して部長に報告し、「もう工場はごめんですね」と話し合つた。この後文學部の學生は法經の學生と共に、七月一日、滋賀縣高島郡川上村貫川内湖干拓作業に出動し、法經の學生は小學校の講堂に、文學部の學生は湖畔の寺に合宿した。B 29 が來ても爆撃の心配もなく、夜は「父歸る」などの芝居を稽古し、農民慰安のために公開して絶讃を博したが、戦局はいよいよ悪化し、遂に八月十五日の終戦を出動先ぎで迎えた。學問を放棄して、或は戦場に、或は工場・農村に出征・出動した學生のうち、戦場の露と消えたもの、學問もせずに卒業するも

のが多く、その犠牲は餘りにも大きかつた。巨大な歴史の輪の中にまき込まれたこのいたましい學生と生活を共にしたものとして、平和への希望と意志とを強めずにはいられない。

佛文の思い出

大 岡 昇 平

京大の佛文には、ただただ感謝の一語があるのみだ。僕のような怠け者が卒業出来たのは、一重に太宰、落合兩先生の寛大のお蔭である。

昭和七年の卒業だが、これがちようど佛文がはやり出すさかい目にあつたらしい。僕の年度はたつた三人だつたが、次の森本君などのクラスは十五人ぐらゐに増えてたと思う。今、定員何人だか知らないが、入正末から盛んに翻譯されたフランス文學が、高校生を惹きつける頃になつていたらしい。

三人揃つて怠け者、うち二人卒業。僕の卒論が六百字詰十六枚というのも、佛文はじまつて以來の短い論文、東京へ行つたり戻つたり、最初の一年の出席は日にして數えるに及ばず、二十時間ぐらゐなものだつた。

卒業の年、相棒と連れ立つて、太宰先生の試験を受けに、熊野神社前から電車に乗ろうとしたら、太宰先生が降りて來るとぶつかつた。試験はすんだとおこられた。二人揃つて時間を間違つたのも珍らしいが、すんだといっても、二人しかない卒業生が出てなくてはしかたがない。その晩、先生のお宅で施行して下さるといふ寛大さだつた。

ブルンチェールの文學史だつたが、岩波文庫の譯本を携行したら、試験場にコタツが出ていたので、蒲團の下に

忍び込ませ、律義な先牛が隣室との境の襖を開け放し、書見しながらカントクされる隙をうかがつて、十分にカンニングをなし遂げて、無事に通過したのである。

今はそんな呑気なことは出来るはずはなく、眞似すべきことではないが、まあ當時の佛文といえればそんなものだった。

文學部文學科という科があるだけで、佛文専攻とか言語學専攻とか書くのである。僕はまあ昭和七年卒業と經歷などに書いているが、大學の記録には、昭和八年中退となつてゐるはずである。

昭和六年には滿洲事變がはじまつている。上海の風雲も急である。徴兵検査の點も辛くなつて來たという話だった。僕は身體強健ではないが、相憎これという故障はない。甲種合格なんてことになれば、軍事教練は高等學校以來落第してしまつてゐるので、直ちに入營しシナへ持つて行かれてはたまらないから、形勢がしずまるまで、學校へおいといてくれと、親父に泣きついた。

しかし無論言語學なんて面倒な學問をやる氣も、京都の學生生活を續ける氣もない。丁度この年から言語學へ移られた落合先生にも泣きついて、籍だけの不在在學生にしていたたく内諾も得た。

ところが四月東京のおでん屋で喰べたカキ鍋からペラチフスにかかり、六月の中頃退院したら、補缺検査の通知が來ていた。五尺六寸の身體で目方は十二貫五百に減つてしまつていたから、これなら大抵大丈夫だろうと、運は天に任せて受けて見た。片足をあげたら立つていられないさまを、検査官はけがらしいものを見るような眼付で見ているが、それでもやつと第一乙だったんだから、全く危いとこだった。

兵隊が助かつてしまえば、もう言語學にも京都大學にも用はない。落合先生に事情報告し、一年分の月謝だけ收めて、退學してしまつた。

何から何まで勝手なことばかりである。無論勉強なんか頭の悪い奴がするものだなんて、當時の風潮で、威張り

くさつていたのだが、實は五十近くなつて、そろそろ堅固な知識に基いてものを書きたくなつた現在、若い時の不勉強がたたり、何でも初歩からやり直さねばならぬので、時間つぶしで困っている。もつて後進の戒めとするに足りると思います。

京都は考えて見ると、勉強には都合のいい町である。東京は廣いから、學校でも圖書館でも、一時間半は途中にかかる。京都はそれが二十分を越すことがないから、それだけ勉強の時間が多いわけである。

文化はかくして發達する理で、日本文化の中心が關西になるといふ桑原先生の説に僕は全く賛成で、京都大學を卒業したことを誇りとしています。

二十 年 前

内 藤 晃

昭和十年の春、大學を卒業したばかりのホヤホヤの時、私は文學部三十周年史の編纂をやらされたことがある。あれからもう二十年の歲月が流れ去つたことを思うと、感慨もひとしお深く胸うたれる思いである。

當時編纂にたずさわつた人々は、西田直二郎先生を御大將として講師藤直幹、助手柴田實、副手時野谷勝等のかたがたに、私もまた副手として下働きをさせられた。無類の理想主義者である西田先生の統卒によつて事がはこばれる以上、そう簡単に三十周年がでさるはずはない、と一同はじめから覚悟はしていたものの、さて着手してみると、各人の書いた原稿はナカナカ先生のお氣に召さない。訂正に訂正が加えられて、いざ印刷ということになつた時は、すでに祝典は一週間の後に迫つていた。そこで關係者一同腹をきめ、毎日朝から晩まで印刷所へ出校正を

はじめたのだが、どう計算しても日数がたりない。致し方なく三日ばかり徹夜を強行することに一決して一同眼をコスリコスリ頑張っていると、そこへまた西田御大が現れて、口繪に入れる古地圖の色が氣に入らないと言つては刷りなおさせて、印刷屋を泣かせるわけである。それでも祝典の前夜、最後の校正を終つて引きあげたのは、夜もふけわたつた頃であつたかと思う。明くれば晴れの二十周年祝典當日である。心配していた私たちの前に、祝典の始まる直前の午前八時頃でもあつたらうか、トラックに積まれた書物が、文字通りインクの香も新たに運びこまれたのを見て、一同ホッと胸なでおろしたことであつた。

こうした西田先生の理想主義は、俗物屋の私たちにとつては何といつても得がたい良薬であり、京大國史の學問の中に一つの風潮をつくりあげたエネルギーであつたと言つてよいだろう。それはむろん西田史學をつくりあげた内田博士の學問の發展した姿であるが、昭和十年代の國史學界をリードしたその大きな足跡は、永く日本史學史の上に光りかがやくことだろう。そういえば何かと私たちがお世話になつた藤直幹、柴田實、赤松俊秀などという諸先輩が、その學風にそれぞれ獨自な持味を發展させながら、みななかなかのコリ屋である點も、西田史學のよき後繼者である證據である。思いをめぐらせば私たちは毎日研究室の中で、何か事あるごとに藤先生から叱られ、柴田さんからジツクリと獨特な靜かな口調で忠告され、また赤松先輩から辛辣に批判されながら、ヨチヨチと危つかしい歩みを續けてきたのである。こういう表現には多少の差さわりがあるかも知れないが、それはみな良き師良き先輩から與えられた温かい恵みとして、私たちの思出の中に生きている。

私が研究室を去つた昭和十八年の秋のころには、すでに空襲の危険がさげられて、古文書の疎開の方法が西田先生を中心に研究されていた時であつた。そういう重苦しい空氣が大學の中に押しよせたのは、たしか十七年の春頃からであつたと思われるが、それにしても私たちは入學以來十年間、よき時代を京大國史の中で送らせていたのだわけである。よき時代、などと言うと、或いは今の若い世代の人たちから叱られるかもしれない。それは特權的

な餘りにも獨善的な世界であつたかも知れないのであるが、しかしそういう古い形の小世界の中では、ごくよまれた人間的な美しい側面を、今日しみじみと回想の中にかみしめて、そこに大きな喜びを感じるのには、はたして私の單純なセンチメンタリズムのせいであろうか。

研究室の中でいつも影寫本をめぐつていたのは、赤松俊秀、清水三男、田井啓吾、林屋辰三郎というような面々であつた。今にして思えば、東大史料編纂所などとは比較にならないほど自由な制度の中で、着實な實證的な學風が京大史學の側面として生長していたのである。古文書の採訪、その整理、影寫本の作成というプロセスを経て、今日みるような充實した史料室が作られるまでには、三浦周行博士のあとをうけた西田先生の深い配慮と、中村直勝先生の獻身的な努力とが注ぎこまれていたのである。中村先生のおともをして、京都から奈良地方を古文書を求めて歩きまわつた楽しい思出も、忘れられない研究室生活の一コマであつた。

いま古い寫眞帖をひき出して過去の記憶をたくつて行けば、毎年大規模に行われた研究旅行の記録が眼前に展開され、旅先で生まれた諸先生諸先輩にまつわる數々の一口ばなしが、ほほ笑ましく思い出される。北は北海道から南は九州地方まで、全國をまたにかけハイヤーを連ねて古社寺を歴訪した豪華な旅行は、今日からみればまことに夢のような話である。

こうしてこのたびの記念すべき祝典のために、過ぎ去つたことどもを書き連ねて行けば、思い出のまわり燈籠は止ることを知らない。しかしよしそれが私のようなロクロクとして徒らに齡を重つつある田舎教師のくり言であつても、かつて國史研究室の中に育まれた良き傳統が、今日の新しい京大史學の中に受けつがれるための、一つのよすがとされるならば、それはまた田舎者にとつての望外の喜びである。(一九五六・三・三〇)

「ノマッド學生」

野 間 宏

私が佛文科にはいつたのは昭和十年のことで、丁度文學部の新しい教室が建つた年だつた。私はその新しい建物で太宰先生のラシーヌのベレニス、落合先生のデカルトの方法序説の講讀を受け、伊吹先生のラシーヌとヴァレリイについての研究をきいたのである。同級には加藤美雄、林憲一郎の兩君がいたが、加藤君とは高等學校以來ずっと一緒だつたわけである。

當時私は身體がわるく、まだ微熱がつづいており、講義に出るにもさしつかえる状態だつたが、私の心をおもくおさえつけていたのは、この上ない勢で動きはじめていた軍國主義と戦争の前進だつた。私はその不氣味な動きに恐怖を感じていたが、なお戦争がどのようなものであるのか、軍國主義とは一體どのようなおそろしい力をもつて人間をおしつぶすものかをはつきりとらえる理性も感情もつくりだしてはいなかつた。私は敗北したとはいえ、それにほんのいくらかでも抵抗することができたとすれば、それはこの京都大學での三年間に私が學び自分のものにするのであったものが、私を支えてくれたからなのである。

私は決して勉強をなおざりにはしなかつたといえると思う。私は正確に辭書をひいて教室に出たし、私のつける譯は必ずしもわるいとはいえなかつた。しかし私は當時たえず不安におそわれていて、教室にいても自分の内にある別の考えにとらわれてしまうので、或は講義のさまたげになつたのではないかと思う。私はフランス人には二人とも悪い印象をあたえていた。それは私が會話ができないためでもあつたが、私が教室で落着きがなく、質問され

ても、全くとんちんかんな返事しか出来なかつたからである。年とつたガルニエ先生は私に可を下さつたし、若いベルトラン先生は私をノマッドと呼んだ。ノマッドとは遊牧の民のことであるが、私がよくおかれて行つてのろろとして教室にはいつて行つたからである。しかしこのベルトラン先生は私の提出したフランス文のレポートにブリリアントだという評をかいて返して下さつた。そして私はこれにはおどろかないわけにはいかなかつた。あなたの文體はじつにブリリアントだが、おしむらくは短かすぎる、もう少し長くかいてほしいと彼は言つた。

私は落合先生にきつくしかられたことがある。それは私が一回生の時のことだつたが、講讀がおわつてから、教授室にこのこはいつて行つて、授業をじつと受けるのが苦しいなどといつてしまつたからである。たしかに私もはや授業に出ることができないような氣持になつていたのである。しかし私は自分でそのような言葉を先生の前で口にしうなどとは考えてもいかなかつた。私は今後自分がどのようにして勉強していつたらよいか、相談にて頂こうと考えていたにすぎないのである。ところが私の口は私をうらぎつてしまつた。そして私はしかられた。私は白髪の下の光つた先生の顔を見つめていたが、何を讀んでいるのかと問われジイドと答えた。そして私はまた日本で自分がジイドを一番よく知つているのだなどというようなことを云つてしまつた。先生は私のその言葉をきいてさらに立腹された。私がジイドを翻譯でよんでいたからである。そして先生は次の講讀の時間に私にあてた。ところが私の發音は全くなつていないのだ。いまでもおぼえているが、私はアルジュレスという發音がいくらやつても出来なかつた。先生はさらに立腹された。そして私に家にくるように云つた。私は、先生の家へ行つて、長い槍のかけてある玄關で向い合つていたが、私の眼鏡がまがつていると注意をうけた。「君は唯物論者であるのに、眼鏡をまげてかけていては、精神がまがるといふことがわからないのか。」私はこのすさまじく私の心をうつた言葉を忘れることが出来ない。私はなるほどなとかえりながら考えた。先生は私の家の經濟状態がどのようになつてゐるのかをくわしくきいて、それから私をみちびく方法を精密にとりだしたのである。

私は時々ヴァレリーの詩について伊吹先生に質問したが、いまもそのときのことが生々と思いだされてくる。太宰先生のベレニスも忘れることが出来ない。中西信太郎先生のシェリーの詩の擁護の講讀も私のなか深くはいつている。當時の自治會活動や學生の友人たちについては、すでに他のところでもいろいろな形で書いてあるので、ここではもつぱら授業についての回想をかくことにした。

思　　出

吉　田　良　馬

私が文學部に勤務することになったのは大正十年六月で、現在の法經建物の場所、心理學實驗室の西側に木造二階建があり中央南側に支關があつて、當時は時計臺のある建物はなく本學正門へ直通することが出来た。その支關の東側階下に文學部事務室、教官室、部長室、西側階下に經濟學部、法學部の事務室、部長室があり、階上に教室があつた。心理學實驗室の北側には、東西へ木造二階建の研究室があり、陳列館の東北隅、北側、西北隅は、まだ増築されていなかった。

學部長は第四代故狩野直喜先生で、教授二八名、助教授八名、外人教師一名、講師一四名、助手五名、副手八名、教務囑託五名、書記二名、雇五名、寫字生及び給仕三名、小使五名、總計八四名に對し、學生生徒數は約一一五名の外に大學院在籍者約四〇名計りであつた。その後高等學校が増設せられた關係上、大正十二年から入學者が増加し、これに加うるに選科入學者も多くなり、大正十三年には約三〇〇名となり、大正十四年以降は本科入學者のみで二一〇名を降ることなく、昭和八年には三〇二名入學したことがあつた。

事務室には伊津野直主任書記の下に、故田中鐵三教務囑託、熊谷俊次履（現大阪外大教授）が、教務及び圖書係を、故松山義道書記と私が庶務及會計係であつて、窓口受付係は設けてなく用のある方は皆事務室へ這入つて來られた。圖書室として別になく、新刊圖書は事務室に陳列してあつたので、先生方はよく事務室に來られた。故西田幾多郎先生はいつも兩手を後に組み、故今西龍先生は兩腕を前に組み、圖書を御覽になり、又話をされるのが常であつた。木造建物時代の研究室は、狹隘で設備もよくなく、自宅で研究せらるる先生が多く、講義室が主として事務室のある建物の階上にあつたので、講義の時間前後には、先生がよく研究室と自宅から教官室に來られ、用を辨じ、或は談笑し晝食を共にされていたことが時々あつた。故濱田耕作先生は、いつも研究室に居られ、日に一回は教官室へ來られた。

先生方の思い出は深いが、第五代學部長の陸軍中尉であつた故原勝郎先生は、いつもステッキを持つておられ、非常に活潑で呶鳴ることは有名であつた。私は時々呶鳴られていたが、或日學生の脇田庫雄君が、鐵道乗車割引證を請求に事務室へ來た時、先生が奥の方に居られて、「君帽子を脱ぎ給え」と呶鳴られたことがあつたが、昨春秋京大以文會大阪支部結成會に列席し島崎得道君（現大阪大教授）と懐古談中、原先生に事務室で前述のように、呶鳴られたことがあると云つたので、君も帽子で呶鳴られた組かと、大笑した。

大正十年から十四年頃には、年のいつた學生生徒がいて故三國谷三四郎氏の四〇歳が最高であつたが、大正十五年四月第六代學部長故坂口昂先生の目前で、入學宣誓署名を最初に島津忠承氏（翌年退學、現日赤社長）、次に五四歳の故福葉常楠氏（昭和四年最近世史卒業）が署名したのには、先生も驚いて私に何の専攻かと聞かれた。同氏の令息行成君も同時に英文専攻に入學したが二回生のとき病死された。

現在の中央教室が新築される迄は、陳列館階上東側の貴賓室が教授會等の會場になつていた。同館作業室に、殘存の爐を圍んでの雑談は史學科學生少數時代の方々にとつて、特に思い出深いであらう。

教官學生相互の親睦を計る文學部學友會は、年中行事として新入學生歡迎會、卒業生豫饒會に併合して、新任の教官、海外から歸朝の教官、退職の教官、海外留學、或は出張の教官歡迎會を行ない、大會として修學旅行を舉行していた。大正十二年頃迄は學生數少なく教官の會費によつて、學生に相當補助することが出來たが、學生數増加に伴い經費的關係上、昭和二年から新入學生、教官の歡迎、退職教官の送別を兼ね修學旅行を舉行することになつた。昭和四年秋から當日の會費不要で松茸狩を行なつたがこれも經費の都合上、昭和八年を最後に中止のやむなきに至つた。宿泊修學旅行は明治四十三年秋、舞鶴及び天橋立行から始まり、伊勢神宮鳥羽、出雲大社松江、高野山、寒霞溪高松、吉野山、日本ライン下り、下呂溫泉、高知には二回以上、その他に木曾福島、和歌山、養老の瀧名古屋、奈良方面、山中溫泉、上高地、金澤及び片山津溫泉へ旅行しておるが戰爭のため交通及び食糧事情等惡化によつて昭和十七年十一月高知行が最後となり、その他の行事も勤勞動員、學徒出陣等によつて、中止のやむなきに至つた。昭和二二年學友會の組織は學生の自治による學友會に變つた。私は時々旅行に隨行したので想い出は深い。紙面の關係上省略する。卒業生諸氏も種々の想い出があり、中には逸話を作られた方もあると思う。

今や文學部出身者は五六〇〇名となつた。昭和八年四月、卒業生和親の京大俱樂部が京都ホテルで結成せられたが、戰爭以來諸種の事情で活動が出來なくなつていた處、昨年四月京大以文會と改稱して再發足を見るに至り、各都道府縣に支部が結成され又結成されつつある。明治、大正、昭和の方々が、相會して在學中のことなど懷談する機會が生れ、或は生れつつあることは、喜びに堪えない。特に本年十一月創立五十周年祝賀會が舉行せらるる趣、本會の愈々隆盛におもむかふこと切望して止まない。